五十音義訣

二百四十八煙

ホ利2
16
2

七 義解下 三之巻
八 清濁 四之巻
九 延約通畧
十 古言由来

利第本門
號 16
卷 2

五十音義解卷之三

大壑 平篤胤撰述　男 鐵胤
孫 延胤　謹校

○五十音義解下第七

波布良波良比布理布流閉布禮閉禮保布呂保呂

此行の。五聲し。日文傳よ云る如く。脣内の柔音。其父聲し為ま。阿行の元音。其母韻し為りて。齊子る聲等ら。る。其音象を按ふよ。波し波良理し志こる壱。比を比理、くし志こる壱布し布流理し志こる壱閉し閉禮理し志こる壱。保を保呂

理〻〻る色〻て。共〻ゝく良行の五色をの形象を助〻て。其合口言ふる。布流て〻言の。出来しらを。起り始りる

此は古今〻波良理、波〻ら良く、比理〻く、比〻り理〻り、布流理布〻ら良〻、閉呂理、閉〻ら良〻、保呂理保〻ら良〻、ふど謂ふ形容言の多うるを、思ひ合せて辨ふ方し、然て本色の下〻布良波良かど注せるて其本義〻る言ふり、次〻委くこふを俟べし

其由て波行篇の初章ふる。二十五言と。神典の古傳て。何色〻波行の従る五言しを徴し攷て。所知りる。はつ其。

波良	比良	布良	閉良	保良
波理	比理	布理	閉理	保理
波流	比流	布流	閉流	保流

二十五言の譜りくの如し。是章〻第三段布流の合口言ふるが、其中央〻佐して、其竪横まく斜〻貫通ば、

波禮	比禮	布禮	閉禮	保禮
波呂	比呂	布呂	閉呂	保呂

る趣〻、意を潜めて、此行も、三段布流より、起る所以をまし、抑是、心留居ずし、

十五言は。布流より起り。奮の義ふして。布。良。布理。布流。布禮布呂と活りるが。布良、波〻く約りて。初段〻居り。布理て比と約りて二段〻居て。布流て布〻く締りて。素のやく三段〻居於て、布礼は閉〻く約りて四段〻居て。布呂て保〻く約りて五段小居る。是を以て此行五色の初義。共〻奮の字の義ふり。但し其段位て。五母韵の次第〻因ること。既〻云るり如し。奮字て記文奮部〻輩也从雀在田段注〻羽部曰輩大飛也。雉雞、羊、絶有力、皆曰奮て見え。他字書等〻、曲礼奮衣由

奮、鳥張毛羽自奮也

右上註振奮也迅也飛也動也振也舒也揚也發奮也と云
よ、蓋たそ、是五色の初義よ引用せり、かむ無色各〻の未義
謂ふを見ずして如此次第て。奮字の本義なる。波比布閉
保よ。由て各〻よ。良行の五色相副しハ波と初段晴の治
用し成り。比ハ二段乾の活機しかて。布ハ素の如く。三段奮
の活機を為し。閉て四段減の活機しかり。保ハ五段揚の活
用し成れり。此て是行の轉用せる初かり。晴て説文夕部よ
夜除、星見也、从夕生、色、韵會よ、徐曰今作晴或作暒前、天文志、
天暒而景星見孟康曰暒精明也と見え乾と説文乙部よ上
出也从乙乙物之連也、軋声、段注よ上出此字之本義也易釈
之曰健也健之義生於上出上出為乾下注則為涇故乾子涇
相對俗別其音舌無是也とあて、減て説文水部よ損也从水
咸声、增韵よ減耗也と見え、揚ハ説文手部よ振也从手昜声

段注よ、吳語夫諺曰狐捚之而狐揚之
是以無成功章註揚発也と云へり、然るよ良行の五色と。
もと形容より。機よ。副てる色等かれハ。其本色ひよ。かて。
韵のに残て波比布閉保の單色と齊しる。下度く良行
の副ひて。右の音義て。成せるより。永久よ其義を存して。各
く其音よ。自然の如く。晴。乾。奮。減。揚。の義を持てる。然て有し
て。其て實よは。第二義なるる。其治機の大要を云むよ、初
遥かとの祖言、二段て乾よ起りて、段て晴よ起りて、原治春、張、
三段て奮よ起りて、放零振、觸、かとの祖言四段て減よ起て
て、尾端、綜、かとの祖言、五段て揚よ起りて、洞、欲、穿、幌、かとの
祖言かる類ひかく轉用し出てる言て。多て、其て本篇
よ就て見て。しかて是五色の起る由来を神典よ稽ふるよ

彼一物の未剖れざ。漂ひて在りる状を。神代紀一書に。古、國稚地稚之時。譬猶浮膏而漂蕩云く。古事紀に。國稚如浮脂而久羅下那洲。多陀用幣流之時云〻と。有る。猶浮膏てふ譬、かし。此行の起原を知ずき神語なる。神代紀一書に曰、一所空中因此化神號國常立尊と云る文かれど、此と漂母都國の成りし初めの傳かれた、今引出ずき文に非ず古史傳を見て知るべし、いで其由を。はづ浮膏とは浮雲。浮草。かど云類の各よて。初の脂の水に浮べるを謂ふ。和名抄に。脂膏油かとを。阿布良と訓り名義と阿と例の指嘆りる聲まて。彼の義かると思ふ。乃彼舊て〻言ふ。阿布良の水に浮める様の布〻良〻と在るをば、

誰も見て知れるが如し、まと溢字をアブル〻と訓ム、炎字をアブル〻と訓むも是より轉を出る言ふり本篇を見て知るべし、然れど此傳を。天地と成ずき彼一物の。かを初め〻稚く在るも。遂に開き割るずき活発を含て。布〻流〻と奮めに。布〻良〻。布〻理〻と在る。状を。目前に見行せる神の御心に。去り所思者せる隨に其象を大御言に。詔ひ形はし賜ふるが右の古傳の発出る初まて。即是五色の元基とふるまり。其て右の古傳まく當昔去り有りる様を正しき謂ふること、上の條〻に見る神ふらでは、語り始め給ふまに論ずる説等に思ひ合ひがし但し脊脂ふどを阿夫良と云ふ言の素より有りて、此傳を語り始め給ひし神の、去を譬に、取り給ずるまと非ず、其物の有状を指して、波布良と詔ひしが脊油ふどの、状まく其に

似るが故に、其稱しかしるを稍後に此物を以て譬を添へる、傳、ふることし、彼、欠羅下那洲てふ譬への所に云へる。如し、思ひ錯て抑、其元基の然る所以と。阿毘に波行の從ふる。五言に因てを所知りる。其て阿行篇第六章の初段かる。阿波。阿比。阿布。阿閉。阿保の五言是かり。阿ハ皆例の指毘と。彼の義かるを。上件の二十五言と。相黙し攷ふるに。初言の阿波ハ。淡の義かるしバ。此は彼一ッ物の布て流て。布て良て在るを指して。阿布良て詔せるを。其物已に分りて。精妙かるが。天霏と晴廣かるに。振て振て。張ひ彫まる故を以て。阿布良やりて其言て為り。良の閉音に因て阿波と約て

彼譜の初段かる。波良。波理。波流。波禮。波呂の活機をかし。阿布良を。乃彼振の義かるが、開音して、阿波と為てハ。彼晴の義かし其を一字訓に綜てハ淡まて遇の義あて、まて阿波て。阿波る、阿波ま、阿波らむて活くきて言かるを謂ふ然れど此て阿波理阿波禮と云ふ嘆き言のと傳はりて、其餘て世に傳はらしたて阿波良と阿波と約て。阿波理を阿比と約て阿波流て。阿布て約まて。阿波禮は阿閉て約て。阿波呂ハ阿保て約て。淡の活機かるが。後に聞え初て。世の初には天霏に。阿波と云る言有しかて。其て言の本を阿布良かる。張晴て原に。散て根星の係しるが。栗を散せる如き象かるを惟ふ。淡て栗てハ元より同義の言かり。淡て

説文に、薄味也、從水炎聲、韵會に、對釀之称、廣韵、滔淡、水満貌、又、澹淡、水動搖貌、と見えたり、是淡薄の義を取て、古より、阿布良の約れる、阿波てふ、言に、此字を用ひて淡嶋と書いるを始め、貶しめ詞に、淡め淡むる、かと云ふ、其と取たまり無く、阿夫那りかるを云ふ、阿夫那に、曰く浮雲の字を用ひ來りしは、乃阿夫良と同義かと、其と舟を布孫と云ふと布と良と布と那とを、通して、浮雲乃かるるよう、出く言かれば、かう、本篇を見て知べし、然れど阿毫に、波行の從ふる五言と。彼譜の初行かる。浮良比良。布良閉良保良の活用と。其、元一ッふして。彼舊と指いる言の。活機かと。阿波。阿比かどの五言を。其副いる良毫の云れる言波良比良等の二十五言は其疑いる阿毫の。省かと齊へる言等よて。共に右の古傳を詔ひ出いる當初の神詔かること。疑

ふし。其と阿毫はも、凡て指いる事物の無ては、決めて出ざる毫かるに、彼、阿波て、内つ粥舊と指いる物あり、彼散と指いる所あり起れる言かるを以て、うく毫謂ふかう、其と此阿波に姑く良行の五毫をそ、彼、波理、波流かどの五言に仮に名く指毫の阿を疑し活用うし呼試とても知るべきかう、○扨て上件毫。此行五毫の起原は、各音に一義を持いる。都較の詔かるが亦同行互に。音義相通ふ事の有るは。彼、二十五言の横五段竪五行に整る上ふて。初行の五言毫。共に波と成り。第二行の五言は。共に比と成かと。第三行の五言毫。共に布と成かと。第四行の五言と。共に閉と成り。第五行の五言と共に保と成れるに因る事かと。故是を以て、同行ゐがひに其音の相通ふ耳かられ、波と呼ふ毫と一ッふして、其義の

易る言あり、其て此下巷のみに非ず比、布、閉、保も共に おなじ趣かり、抑是行の五巷。りく彼二十五言の。混錯りて調ふるが故に。今しも一義を執ては。決め難きに似たれど。其中に就て。波の主たる巷。晴の義にて布良波良の約と。比の主たる巷。乾の義にて。布理比理の約り。布と奮の義素にて。上下四音の義を持ち。閉の主たる巷。減の義ふて。布礼閉禮の約と。保の主たる巷。摺の義にて。布呂保呂の約とにて。各〻其上に冠きる四十五言。各其下波比、布閉、保に頭に冠する言の各〻四十五言とハ、謂ひ各〻其下に従ふる五十言とハ、彼比布閉保の下に従

ふる言の、各〻五十言ありを云ふ此と既に古言活用の條波行の所に云るが如し、斯て其四十五言と、五十言とハ、此行五巷の機りに、祖言かるが、猶是より轉用假借し出したる、諸言と更かり、他言とそも切りて、此行の五巷と成ると、中〻自然に其義を生せり、其ハ本編に次〻釈以て行くを見て知るべし、扨て此五巷はも。麻行と同志く。脣に起れるが。脣の元より軽含める所かるる。波行を其内邊に。柔に觸きて出る巷等かる故に。其音象自然に其趣に聞えて右の如く五義に別て。晴。就。奮。減。摺。その顕に立ち。奮その巷を主として。詩靈の幸を為こ少例の如し。

其て右二十五言の譜と更かり、本篇毎章の二十五言も、みか此例に違ふ事かし 然て此五巷、麻行と同し脣音かるから彼、行と閉に起りて易の如く、此行と柔に起りて、会の如き謂ひり是をもて、波麻の二行と、表裡の如く。夫婦の如くに

て、此行の濁音と麻行と常に通ふことは縣居大人の、早く教へ遺されしるが如し。扨て其音象の隨に波と初段に在りて。含み初まる音を為し。比と二段に居て。含みを定むる音を為し。布は三段に在りて。含み用ふる音を為し。閉を四段に居て。含と令ふる音をなし。保と五段に在りて。含と終る音を為せり。五色共に、畜字の義を持つるは初色の父に稟つる色、まく各、初音者質かること定用令終に、音の別あり。を、五毋韵に受つる上の如し。彼国辞解に、波ハ事を内し含む言、比ハ事を含み置く言、布と事をおき含む言と事を押ふる言、保と事を含と治むる言と云へり此も理もいる説なり、さて此五色の語上に在り語下に於きて活用なく。其連色に因りて。義の轉り。變りまく或と上省り。下省りて。各一色

の言と成れるも少うらに。其と此所に盡し難ものと。是色ものの出る。諸章の因に秋辨ふるを見て知るべし。因。

麻年良 麻良 美年理 羨理 年年流 米年礼 米礼 毛年呂 毛呂

是行の五聲と。日文傳に云ふ如く。脣外の剛音。其父聲と為り。阿行の五声。其母韵と為りて。齊へる色等なるが。其音象を按ふに。麻く麻良理と志くる色。麻良理と志くる色。米を米礼理と志くる色。毛は毛呂盛し年を年流理と志くる色。

理しくる色ふて。共に良行の五色。その形象を助りて。其合口言ふる年流てふ言の出来しなりて。起り初りる。

此と古今よ、麻と呂と、美と理と、年と理と、米と理と、毛と理とをかゝ謂ふ類の形容言の多くるを思ひ邇して、如此と謂ふかと、然て本色の下よ、年良麻良かと注せるハ、其本義とる言等かり、其由と下よ云ふを俟かし。然るに麻行篇の初章かる二十五言を。神典の古傳と阿色よ麻行の從てる五言とよ。微し改て是を知れと。而於其二十五言の譜々くの如し。是章よ第三段年流の合口言かるか、其最中よ住して、其竪横まと斜よ貫通する趣よ意を潜めて、此行も三段年流より起れる所以を、まと心得居きし、抑此二十五言は。年流より起り。聚の義よして。年良。年

麻良	美良	年良	米良	毛良
麻理	美理	年理	米理	毛理
麻	美	年流	米流	毛流
麻礼	美礼	年礼	米礼	毛礼

麻呂	美呂	年呂	米呂	毛呂

理。年流。年礼。年呂と活りるが。年良と麻と約りて。初段よ居て。年理を。美と約りて。二段よ居て。年流と年と締りて。素のまく三段よ居おき年礼と米と約りて。四段よ居り。年呂を毛と約て。五段よ居ル。是を以て。此行五色の初義と。共よ聚字の義かり。但し其段位と。五母韵の次第よ循ふこと。例の如し。聚字と、說文ハ部よ、會也邑落曰聚、段注よ邑落謂邑中村落といひ、他書よと、衆也とも見ゆ、聚散也聚かと熟語して、何よ由れ、群集ふ意よ用ふる字かと、蓋ハと、此五色の初義よこそ有れ、ふは毎色各くの末義かと、其と下よ云を見るし、ちて如此を屈て。聚字の本義かる。麻美年米毛よ。由と各くよ。良行の五色

相副しなば。麻と初段圜の活機と成る。義は二段滿の活用とかり。年を素の如く三段聚の活用をかし。米と四段ひの活機と成る。毛は五段盛の活機とかしり。是と此行の轉用せる初かる

圜字と説文口部より天體也、从口睘聲、段注より、呂氏春秋曰何以説大通之圜也、精氣一上一下、圜周復、禮無所誓留、故曰天道圜、許言天體亦謂其體一氣循環無始無終、非謂其形渾圜也、今字多作方圓方員方圜、依許則言天當作圜、言渾圓當作圓、言平圓當作圓と見え、滿と同書水部より、盈溢也他字書等。充也、足也、實也、かどあり、ひハ説文、ひ部より、象春艸木冤曲而出、金氣尚彊其出ひひ也、段注より、ひひ、難出之皃、物之出土、難也、如車之輾地淡滯と云り、公來より、裝束を次第より云らし、著たるを、米良郷と云ひて、退字を用ひ、樂家より音の軽重上下より、甲乙の字を塡て、加理米理と訓こと能く叶かり、盛と説文四部より、黍稷在器中、名祀者也、段注より、盛者実於器中之名也、引伸為凡豐滿之偁、字彙より

茂也大也長也多、然るより良行の五皃ハ。もと形容より。機きも也かと見えいり、然るより良行の五皃ハ。もと形容より。機きも

副かる皃等かしど。其本皃をひより云て。韻のみ残る麻美年米毛の單皃と齊しるが。一度〻く良行の副いて。右の音義を成せるより。永久より其義を存じて。各〻其音より。自然の如く。圜。滿。聚。盛の義を持〻る。然しど。其〻此行の第二義かる。今其機の大要を云むより、初段は圜より起りて、餘圜、希丸同義かる、二段ハ滿の活きより、世より美り理りく〻充る、美理〻〻抑るかる、謂ふ美理より、美の一音〻実の義かるが、御見を訓むも、是より出〻る、三段〻聚より起りて、材叢郡室かどの祖言かるが、年の一音〻聚の義より、身を訓むも同義かる四段〻しより起り、米流米理、米良、志〻活きて、退字をも訓〻米の一音は芽の義かるが、目女を訓むも同義かり、五

段て諸に起りて、滋守盛なるこの祖言なるべ、毛の一音ハ、茂の義にて、此は説文に艸木盛良と見え、爾雅に、如松柏曰茂、注に、言扶疎茂盛也と有れど、此にて其宇音を用ふるに非ざ書紀に、扶疎をシキモシと訓るも古言なるまぼ是に據れり、蒼も説文に、艸多良、詩曰、蒼兮蔚兮と有る段注に、詩曹風文、毛傳曰、蒼蔚雲興良、引伸為凡物會萃ちて此五色の。然起れる由來を神典に。誓之義と見えらり、ふるに。既に引くる神代紀正書に。古天地未剖陰陽不分、渾沌如雞子云ふ。同じ一書に天地混成之時始有神人焉云ふく有る。渾沌。混成に傍くる古訓の。牟良加礼て聚加礼。麻呂加礼て。圓加礼にて。牟良麻呂に。右譜中の言なるを。先思ふべし。此を牟良加礼、麻呂加礼と訓る加礼ハ、聚祁圓祁と いふ、祁の延くる詞なるが、然延れて乃ちの加行の

譜の、加理加流加禮の義を成せり。然て、右神代記、正書、の文、と、漢籍三五暦紀の文を採れるなきと、其事と元より皇國の古傳なること上に云ふも既に云るがごとし、抑是傳て。上に云る如く。天地と剖るなき一物の未分れば。混沌に在し間の傳なれど。其物の渾沌くる狀の。牟と流くと。聚ると。牟と良と麻と呂と在りる象を。目前に御覧せる。神の御情にちり所思看せる隨に。其様を大御言に。詔ひ形はし。給ふるが。右の古傳の発出くる初にて。即是五色の元基と為れて。其て右の古傳に當昔ちり有れる狀を正目に目行せる神のりてハ語り始め給ふまじき道理なること、上の件くに、論ふる説等に思合せて知べし いで其元基の終る所以を。阿色に麻行の從ふる。五言に因

てゞ所知める。其し阿行篇第七章の。初段かる。阿麻。阿美。阿
年。阿米。阿毛の五言是ふる。阿を皆例の指色よて。彼の義か
るを。上件の二十五言く。相照し攷ふるよ。初言の阿麻し。天
の義かして。此し彼一物の。年〻流〻。年〻良〻と在るを指
して。阿年良〻詔せるを。其物判りて。清易かる。天霧し薄
靡くよ。聚〻〻〻て。混成ふ周きる故よ。阿年良やゞて。其言
し為ふ。良の閑音よ因りて阿麻し約り。彼譜の初段かる。麻
良。麻理。麻流。麻禮。麻呂の活機をかし。阿年良し。乃波聚の義
し為りては、彼圓の義をかし、其は一字訓よ綜てし天まゝ餘
の義よて餘り、餘る、餘れ、餘らむし、活用くを謂ふかゝ但し

餘を麻理と云ふを、人こか阿麻理の阿を去れる言し、思ふ
んれど、此しもし圓の活ふるよて、阿し切りて添る言かり
尿まり尿まふの、麻理よ同じ、本篇を見て知べし、けて阿麻良は阿麻し約ふ。阿麻理
ハ阿美し切まふ。阿麻流し阿年し切より。阿麻礼は阿米し
約ふ。阿麻呂し阿毛し約よて。网の活機かる。网を素よ
天餘し同言かふ。其し此天空。上件の如く。成竟る物よを
有れど。示元より。其最中を。最莫よして。動き移らば其末
真洞かる域あふ。其最中かる所し、乃謂ゆる天極紫微宮か
異古暦傳かどよ
記るを見べし是域乃天の本網かる。是より竪横よ。五
百網千網。を引延る如く。圓くよ向伏し餘り。編成れる物

かて。天空やうて。世界の大網かる義かて故是を以て古語
よ。此を都て高天原と称すて。其て今見放る如く。网目かも
彌廣ふ。張餘て。原かして。聳ゆしたかり。天を説文よ、顛也、至高無上、从一大、於六書爲指事
一大、段注よ、至高無上、是其大無有二也、故从一大、會意綱と同書よ、网よ作りて、庖犧氏、所結繩以田巨漁也、从
門下、象网交文、段注よ門、羅其上也、从象网目文、と云ひ、ずく
罔よ作りて、网或加它、と云て、然して網の本字と、网かるを
後よは、罔よ作て、後ずく網よ作しるかて、網は同書よ、网紘
也、从糸网、声、段注よ、紘、繩也、孔穎達云、紘者网之大繩商書、曰
若罔在網有條而不紊、と見えり、万葉十九、石川年足、朝臣、
新嘗會の祝歌哥一首かはも五百都網ハふ万世よ、国知さむ
と五百都網はふと、詠しそ、此古義よ想ひ合され。彼老子
の書よ、天網恢々、疎而不失、と云るも、今の俗語よ、天の網の
羅るかどりふよ、思ひ合ちる、然て其天網の本網て即ッの
中央紫微垣内ッの天極星の所在かるが、其しり博く周天

を高天原と云ひ、遂よ是天照大御神の所知者以、天日の
御国をも称ふ言とかしり、委くハ古史傳を見て知べし、然
れど。阿邑よ。麻行の從ふる五言と。彼譜の初行かる麻良美
良。牟良。米良。毛良の活用と是。其元つ。して。彼聚と指る
言の活機かて。阿麻阿美。かどの五言は。其副しる良邑
の太しる言。麻良美良。等の二十五言を。其冠しる阿邑の省
うり齊ふる言等よて。共よ右の古傳を詔ひ出しる。當初の
神語かること疑かし。然るは阿邑はも、凡て指しる事物の
麻と。彼聚と指しる物ふ、彼圓と指しる所ありて起れる
言かるを以て、くハ謂ふかり、其て阿麻の一言よ姑く良
行の五邑をを彼麻理麻流かどの五言よ仮よ各し
指邑の阿よ冠らし活用うし呼誠とても知べきかる

○十三

て上件し。此行五色の起原。よゝ、各音よ一義を持るゝ。較畧の說あるゝ。亦同行互よ。音義相通ふ事の有るハ。彼二十五言の横五段。竪五行よ整ふる上よて。初行の五言は。共よ麻しく成ア。第二行の五言を。共よ美とゝ。第三行の五言し。共よ年しく成ア。第四行の五言し。共よ米とゝ。第五行の五言は。共よ毛しく成小るゝ因る事ゝ。故是を以て同行しゝひしに麻し呼ふ、色し つゝし て、其義の易る事あゝ、其し此一色のゝ然るゝ非ば、美年米毛も共よおゝかじ趣あゝ抑是行の五色も。ゝく右二十五言の。混錯ア て調ふるゝ故よ。今しも一義を執て色。決め難きよ似ゝれど。其中ゝ就て麻の主ゝるは。圜の義ゝく。年良麻良の約ゝ。美の主ゝるし。滿の。義よて。年理美理の約ア。年の主ゝるは。聚の義素て。上下の四義を包祢。米の主ゝる色。しの義よて。年礼米礼の約ゝ。毛の主ゝるし。諸の義よて。年呂毛呂の約とゝて。各し其上よ冠小る四十五言。各し其下よ。從ふる五十言。共よ此義よ差ゝ事ゝし。各し其上ゝ冠れる、四十五言しハ、麻美年米毛を頭ゝ冠れる言の各し四十五言ゝく有るゝと謂ひ各し其下ゝ從ふる言の各し五十言有るゝと云ふ、此し說よ古言活用の條麻行の所よ云るゝ如し、斯て此四十五言し、五十言しハ是行五色の機ゝる、相言ふゝ。ふるゝ猶其ゝ轉用假借し出ゝる諸書更ゝ、他言ゝても、切ゝて此行の五色し成ぬるゝ。ゆゝく自然よ其義を生ゝ、其し本簡よ次ゝ欵以て行くを

見て知るべし。しかして此五音はも。波行と同じく。脣より起るが。脣と
元より剛と実満かると。柔と軽合めると相兼ねる所なり。
此行に。其剛と実満かる方なり。発する音等かしこ。其音象
自然と。其趣と聞えて。右の如く五義と別て。圜満聚と盛と
の頭と立ち。聚との。出を主りて。詞霊の幸を為こと。上と同
じ。具に右二十五言の譜し更かう、本篇各章の二十五言も
こゝに此例と差ふ言かし、然て此五音と濁音かし、其濁音
と波行の濁音とて兼れどもかう、波麻二行の会易
表裡の如く、相離れざる所以も是にて知るべし、しかして其音
象の隨と麻に初段と在りて。満初める音を為し。義ハ二段
と居て。満定むる音をかし。年々三段と在りて。満用ふる音

を為し。米に四段と居て。満令もる音を為し。毛に五段と在
りて。満終る音を為こと。五音共と聚字の義を持るは、初
今終と、音の別る〻を五母韻と受こと、音質かること、上の
如し、波国辞解と、麻に事を指満に言義は事を満し備ふ
と言、年に事を備ふ満ふに言、米々事を備ふ押ふる言、毛ら
々事を満らし納むる言に刈ることは実と然る言とこと
くて。此五音の。詞上と有て。詞下と移て。活機き移く其連
音と因て。義の薄を易う。まゝ或に上省りて下省りて。各
各下音の言に為れるも少からば。其に此所に盡し難れ
ど。是音ども出る諸章の。因に。釋辨ふるを見る貴し。

夜由良ノ夜良ノ以理由理エ由流エ由禮ヨ由呂曳礼余由呂余呂

此行の五声とは。日文傳に云る如く。謂ゆる半喉音にして。五母韻の頭に。各〻伊声冠ひて。成れる声等かるが。其音象を按ふに。夜と夜良理〻と〻〻る声。以て以理〻〻と〻〻る声。由を由流理〻〻〻〻る声。曳て曳礼理〻〻〻ある声。余て余呂理〻〻〻〻る声。共に〻〻〻〻良行の五声。その形象を助けて。例の合口言かる。由流てふ言の出来しよりを起り初るる此を古今に由良理、由〻良〻夜良理以〻良し、由流理、由〻流〻曳良理、曳〻良〻余呂理余〻呂〻かど謂ふ類の、形容言の多〻るを思ひ合せて辨ふ分し然て本声の下に由良夜良かど注せるは其本義〻る言かり、次に委くこゝを俟べし、甚て夜行篇の初章かる。二十五言を。神典の古傳と阿

夜良	以良	由良	曳良	余良
夜理	以理	由理	曳理	余理
夜流	以流	由流	曳流	余流
夜礼	以礼	由礼	曳礼	余礼
夜呂	以呂	由呂	曳呂	余呂

声に夜行の従ふる五言〻〻。微し故ありて。所知るる。ぬつ其二十五言の。譜かくの如し。是章に第三段由流の合口言かるが其中央に位して其堅横に斜に貫通する趣に意を潜めて此行も三段由流より起れる所以を抑是に於心得居ずし。

二十五言は。由流より起り。動の義にして。由良。由理。由流。由禮。由呂と活るが。由良と夜と約めて。初段に居り由理を以て約りて。二段に居る。由流を由と締りて。素のまゝ三段

に居おく。由禮を曳と約まて。四段に居る。由呂は余と約まて。五段に居る。是を以て此行五色の初義と。共に動字の義かる。但し其段位と。五母韵の次第に因ること上の如し。動字は說文、力部に、作也と見え、段注に作者起也と云ひ、他の字書等に、静之對也、出也、搖也、振也、周礼、九鉦、四曰振動以兩手相擊蓋古之遺法也とある、動搖共に皇朝に、古く由流具と訓來もり、ちて如此にすて。動字の義より起れる。夜以由曳余に。陶〻各〻に。良行の五色相副しかば。夜を初段遣の活用と成り。以て二段苛の活機とする由は素の如く。三段動の活用を為し。曳と四段擇の活機と成り。余と五段宜の活機と成れり。此を是行の轉用せる

袪音墟襄也
逐也散也又
彊健也或作
佉ニ以上玉篇

初なる。遣字と說文辵部に、縱也、段注に、糸部に曰縱緩也、一に曰舍也、字彙に音牽、送也、袪也、遂也、発也かと見えて、発遣の義なり、苛は說文艸部に、小艸也、段注に、引伸為凡瑣碎之偁、字彙に政令繁細曰苛、政又虛也、急也、煩也、怒也、察也、揚慎也苛、小草也、今但知為苛刻之苛と見え擇を說文、手部に東選也、段注に東者分別、簡之也、簡者存也選、下に曰選遣也、一に曰擇也と見え、寄と說文、宀部に、託也、段注に、字从寄、寄異也、言部に曰、說寄也、韵會、廣韵に附也、增韵、又寓也、傳也かと見えて。然るに良行の五色を。もと敢容とす。機き副しる色等かして。其本色はひに去りて。韻のみ残て。夜以由曳余の單色と齊しるが。一度。〻く良行の副ひて。右の音義を成せるより永久に其義を存して。各〻其音に自然の如く。遣苛動擇寄の義を持つて。然れど。其と此行の第二義なる。前六行の例の如く此所

より其活用の大要を述べきかんで、此行の以曳し、阿行の伊延と相似て、互に胡乱しき事あり故其勝を下に云むとす。こゝに、けて是五色の。ちから起れる由來を神典に稽ふるに洩なく、此を上件の如き。諦しき神語て。有こと無しど。上に准て。是を按ふに。此は波一ツ物の。海月なと。久く良くと漂ひ。浮膏ふて。布く良くと奮くる狀のまく由く流くと動めき。由く良く。由く呂くとも。所見ゆむを。然る象に見行し坐る神の御心に。ちから所思有に隨て。其樣を大御言に。詔ひ形はし賜ふるか。此行五色の元基と爲れること疑かし。此を極聽度の如ふれど、まく決めて此行のく起れること上件くの由來とし平心に按ひ合せて。悟るべし。其由良

を。神典に。天皇祖神の。饒速日命に。十種の神寶を。授け賜ふ時の大御言に。布留倍。由く良く止布留倍と有る。由く良く是にて。布留倍て。可振く謂ふ言ふなり。由流くハ。神に幣束奉る。左右左右く振る趣ふるを謂ふ。布流く由流くを、元より、同義の言ふり是をもて、鎮魂祭に御衣を筥に納れて、動かん御式ふるを御魂振くゝふ、まく漢文にて、其を振動くも書いり、由良て ふ言て。古語に、玉緒も由良に取由良とし、手玉も由良に、由良く玉緒ふゞの類ひ、數ふるに遑あらに、抑是行の本基に。然有る所以て。阿邑に夜行の從ふる。五言に因てそ。所知ふる。其て阿行篇。第八章の初段ふる。阿夜。阿以。阿由。阿曳。阿奈の五言是ふる。阿て皆例の指邑にて。彼の義ふ

るを。上件の。二十五言と。相照して攷るに。初言の阿夜と。
文の義かれど。此は彼由と流と。由と良と在る物の。已
に剖りて。其精妙かるが。蘇騰と。天霧と合搏くに。動と寛
う固しるを。阿由良と指詔へるが。乃其言と為り。良の関
音に因りて。阿夜と約と。彼譜の初段かる。夜良。夜理。夜流。夜
礼。夜呂の活機をかし。阿由良と。乃波動の義かるが、関音して、阿夜と為ては、彼遣の義をかし、其
を一字訓に綜て文まと異の義を成せり、此言古くを決
めて文り、文る、文北、文らむと活る言かりりむを其言と
後に傳はる事かしけて阿夜良を。阿夜と約り。阿夜理と阿以と坂
と阿夜流は阿由と坂まり。阿夜礼を阿曳と約と。阿夜呂を

阿余と約りて。文の活機かるが。此を天霧の真區かる域を。
の本網と為りて。八方ふ無成ぎき周しるに衆星これに係
りて。列を亂らで左に旋と。日月五星大地は右に旋り。由と
良と斐ふせるが。奇しき天の文かるかう。「文と説文に、遣畫也、象交
文、段注に、遣畫者、迹遣之畫也、考工記、日青與赤謂之文、道畫
之一端也、韻會に列扁為天文、草木為地文、又理也、文章也、美
也、善也、兆也、華也、班也、ふと見ゆ、字義くくの如くかれど、我
が古古の阿夜と右の所以より起しる嘆色かるが、天文を
云を始め奇と怪しみ、阿夜うし、過ち、阿夜ぶと操ぶ、ふと種と活ると、本篇を見て知るし、然し
て阿邑に。夜行の従る五言と。彼譜の初行かる。夜良。以良
由良。曳良。余良の活用と。其元にして。彼動と指しる言

の活機かうしゃ、阿夜阿以かゝの五言は。其副多る良色の
云れる訳夜良以良等の二十五言と。其冠多る阿色の省ク
て齊へる言等〻〻共に右に論ふ大御言にのとし。當初の神
語かること疑かし。其は阿声は、決りて出ざる色かるに、彼阿行と、彼
動く指〻る物あて、彼遣し指嘆〻る言かるを以てうくそ
云かう其は阿夜の一言に姑く良行の五声とそ負、彼夜理
夜流かゝの五言に仮に各〻指色の阿を
冠らし活用らし呼試みても知べきかう、○扨て上件の説
等ハ此行五色の起原。まゝ各音に一義を持る。都較の説
かるゝ然しも全く調ひ竟〻る事と。喉音三行の論に図セ
る如くして。実に阿行の五色に。伊声の冠〻る拗音かて。

故是を以て。其音こか自然に。苛ち進ミ壯かる意象あて。其
はまゝ。由良の夜と變るに。良声の韵かる。阿の圓満かるゝ
残て。其根韵と成ぬまて。其初音伊かるゝが故に。先窄みて
譬へと。茹失と云物の形に。想ひ像る〻色かゝ。是を
以て弓箭の箭を夜と云そ更かて。氣進尋ぬる言も成
りそ。其方に。耶哉歟乎かゝの字を訓み来て。尚種〻の活
用を為やう。其と和訓栞に「や或と語の辞とえり哉乎歟の
詞と注セる意に聞ゆるハ玉かしや宿かしや消
草かしやの類かう或と「やと留りて、やまの意かるあり、
ばと有りも花と見ましや、光の由〻も我や忘〻の類ふ
り唯しや「とうゝ緩かう「は疑の詞の下にあり、やと疑
ふ詞の上にあて春やとき花やたそに、夜や闇き、道や惑ふ

るの類なり、よく花やもみち、雪や氷などゝは花く紅葉曽
し氷の意なりやく葛城や高天の山、更科やなばもて山犬原
やをしかの山、なとゝ、近きを取合せてもじ故よやと切
らう近江のや鏡の山と云るも、毎く近江の鏡の山なれど
至りて軽きなり、と云るが如し、〳〵る類なり種
〳〵あり、然れど此是こなる歌詞のうちの議よりて、然はとは
故。今世よ太刀なき。承ゆけ。或て弓射る時なと氣勢を発し
て。高くやあと声を揚ると。矢声とも遣声とも謂ふ。此こ皇
極天皇紀。中大兄皇子の。蘇我入鹿を殺し給ふ所よ。曰吐
嗟即共子麻呂等出其不意以劔傷割入鹿頭眉云こゝ有る
吐嗟。乃是こゝ。夜の一声よ阿の韵。その刀を副て驚せる声
なり。今本此吐嗟の左旁よやゝ〳〵アヤト宜こも有るはゝく
訓ずき由なれと アヤとえてハ、只よ驚き奇しむ声

今人ふく此方言を紀童ら親よ物をらゆ
せく責るようく
せ云あり此法師が
ヤゆくハ己がえし
く叶へてよく此妻
責りかくるなり

こなりて、此よ叶はざるをやアこてハ其力いと強し、呼試こ
て知ずし他記よ此吐嗟を発語の辞アハヤの響なりこと
云るも有れど 然るはあらじ、後なり。宇治拾遺九よ。兵き功る法師が。仏
供養の條よ。目を怒らして。人の妻をまぐ者あるやゝくこと
云て。太刀をぬきて。云く〳〵〳〵有るやゝ〳〵必ず。やあを後よ訛
れる声なり。其こ古よやゝ〳〵云ひし詞よ。神樂歌よ。也宇也
宇〳〵有れどなり。拾遺の印本やゝくの下よをゝくこと有る
れどなり、後拾遺集の誹諧歌よ。入道摂政のれくこそ。はたかよ
通ひ侍りける頃。帳の柱よ。小弓の矢を。むきび付なりける
を。外こて取よ。こやて侍りければ。遣にこて詠る。大納

言道綱母。思ひ出る事もあらしと見え侍るを。やゝ云ふこを驚かしめる。此はかの驚かし呼はる声のやゝ。矢を云ひ掛るなり。然れど来家漢語抄よ。箭伊也。射遣之略。と有るし然る言よこを。初名抄よ、箭釈名云笑和名夜しあり、谷川氏の説よ、矢て射発の時の声より名くと云るも然る言して、往年江戸の三十三間堂と云て謂る通し矢と云を人の射るを見し事あり、うの矢叫しれ射るよ其矢の半して勢ひ撓こ、鏃けづりて見ゆる時しも其射人を更ふり、助をとる人等も、声を合せて大音よやあと叫ぶよ、其こわりる矢、やゝ鏃を上りて的よ及ふゝ往こありき、近き火災よ火、粉を追ふして、諸人声を揚げて、やあくと呼ばるよ、火粉うゝ散、けて軍の時よ。敵身方避るるとも、最奇しき事ふりうし、うゝみよ射出る箭と更ふなり。鳥獣なとを射取むと欲るる

射外さしと。弭ゲ上よ疾く重ね射るを。矢續早として譽るるしど。是より搏りて。凡て事物の数重ふるを。八集と云ふ言起りなむ。八度拝み八十嶋などの八是よて。乃弭字なれよ當る八字を訓むも。此義かるゝ。其根元を由良の夜と約て遣の活機を為せるよ起れり。八十嶋八度拝み、ふどの八八の義よ見ぬきよし。既よ大人等の教ゑ置れし事ふるが中よと正しき数を云る事と、あゝゝ有り、其と古史傳よ、然る語の出る所くよ云るふて知るべし。本篇の夜良より。夜和よ至る九段の夜こそ是義を漏る事なるし。其と此夜毫よ。上件の譜の如く。良行の五言相副ふ。夜良。夜理。夜流。夜礼夜呂と活よて。逐

鑓遣。同行相従ふ。夜。夜以。夜由。夜曳。夜余と。稍咄。動。惟かど
の祖言かるを更かる。遣を夜良より起りて遣り、遣る、遣れ
遣るより此名とかる、逐を夜良比し訓むも、夜理を延べる
言かる、稍漸較旋差微良徐かどを、夜〻〻訓むは皆同じ事
よて、由〻良〻の約る殊よ著し、其て古事記石屋戸段よ逾
思寄而稍自戸出而云〻〻有るも動く出御せる趣かるを
思ふべく、然れど貴人の座所を移し給ふを、動座と云も能
く叶ふり、且是動字を夜〻毛須礼婆と訓む、夜も同詞か
り、然て動と寛と、元より同言かる故よ、其寛〻かるより徐
微漸かどとも訓て、此文字幣の義かる言の如くを聞ゆる
かる、咄惟の事加行の従ふを。焼の活き。佐行の従ふは。優養。
と上よ云ふり、
泰。瘦。多行の従ふと。奴谷。寠。傭那行の従ふと。梁。脂。屋波行の
従ふと。和。薮。麻行の従ふと。山止病寡。和行の従ふと。徐かる。

是等の夜〻かる。遣の義かるを以て知べし。かゝ是等の言よ
〻る言も數多あり。首よ夜も上り、轉用假借し出
末より生、別義の如く聞ゆるも有し、其原よ沂りて攷ふ
れど、右の義からぬと有こと〻かし、其
〻本篇よ、因て釈くを見て知るべし、○凡て以を。もと。由理
の約かれど。如此調い竟〻る上より云べ。伊よ伊の冠し
る色かる故よ。阿行の伊よ。比ぶしば。氣進と苛い泡壮よ
して彼伊よ代りて。下の活機を為こと。喉音三行論よも云
るが如し。下よ活く〻ハ、上よ論る、おい、くい、むくい、ふと
次〻謂ふを見のいを云かり、此等の外よもかゝ多って、本篇よ
て知るべし、然れど是以やゲて。弓を射るの以して。上件
の譜の如く。良行の五声相副ふを。以良。以理。以流以礼。以呂

熬牛刀切
乾也、煎也、
悃胡困切

と機きて。苛熬射悃捧。ふごの祖言ふるは更ふ。阿行の伊は良行の
從ふも、苛は起ゐ、入りの活機として出く對して、内に入るを
是故に鐫をも訓む、そは金を烊して鎔に入れ作る義ふ
色も同言ふる色、是まく物に〳〵滲入れたふふ、然るに
射るに此より、彼方放ち遣るふふ、射く入くの刻口に云ひ
耳に聞く色に同くもて、出入相反ふ、是を以て伊以の別
を知れし如此云は、苛熱悃捧ふごの同言ふること、雖し
已ふもく味加行の從ふを。嚴怒佐行の從ふは。勇頻磯多行
知りかむ、
の從ふて。痛。出乞最。那行の從ふて。稱。往。太。波行の從ふて。負。飯
言。麻行の從ふを。忌。夢。同行相從ふて。彌。愈。和行の從ふて。住言
ふし。此等の以こふ。氣晋し意象ふるを以て知れし。ふか是等の言
ふ搏用假借し出こふる諸言を更ふふ、他言にても下に奉
る諸言の類ひ、切。是て以ゐ色にふれるを、すく自然に以色の

義を生ず、其て本篇に次く釈くを見て知れし。○ちて由を由流の義本質を。其
言の始めて出こふを。神代紀。云に。伊弉諾尊。乃向大樹放
屎。此即化成巨川とある。本注に。放屎此云愈磨理と有る愈
乃是に。磨理に放に當る。屎に由く云は。温泉の由に同し
く。湯てふ言に。放出給ひし時に。湯ちし故に。湯く云へる
るしく。実に水に。水の初めを。即皇祖二柱神の御屎に
有ふる。其に是ふ前に。伊弉冉尊の御尿に水神の生坐る
を思合せて知れし。ふか是事に就ては。殊に微妙ふる故に
し有りと、其に、此に盛しがこと、古史傳
を見て
知れし。ちて。湯を由くいふ言義に。湯水ばふを。寛しふる

物の有こと無く。動寛。元より同言なれど。此二義を兼ねら。
扱さと水よりまし。湯よ沸せるよりまし。浴もし灌きもして。體
よりまし物よりまし浄むるを。由麻波流と云ひ。是よりして。齊
庭齊都なども云ふ由てふ言起もり。此をさと同行相通はし
て。比べも云ふ。忌やく齊を以義と訓る是なり。和訓集に齊を
そいむの反しもあり、湯をとゝむは、齊の義清潔の意なりと
云るは、未未違り委くは、本編夜行の第四章に云を見る
べしけて。此由美以美。元より同語にて。疑なく由麻理の約な
り。然れど弓と由美と云も同語なること著し其と書紀に
由麻理てふ。古語に放屁と書れる能叶ひて。放尿放屁な

ど用ふ。赤縣の熟語なるが。射るを放とも云て。同義の語な
るを。古き祝詞に射放物止弓矢と有る詞をも。按ひ合せて
暁るべし。さて醫書などに、放屁もるを、薄矢氣と云ひ、水澤
を水射と云る語も有るなどを同音の假借と云へば
常なれど、然る假借も其音の元より、同義なる由の
有れば、此等の統等なれば別に論ずる物もなれど。うく按
ひ続くれば。弓由美と齊と。單に由と云が本語にて。麻理てふ
詞の副しなり。由美といふ體語と成りたれば。其を却て末
にて。其本に由流の約なり。動まく寛の義なること疑なし。其
く此由に上件の譜の如く。良行の五色。相副ふ。由良由理
由流由礼由呂と活きて。瑳動寛揺などの祖言なると更な

夜以由は、良行の従ふる言は、ふか数多あるを、此もて其
を。活機の大要を知ためむ爲なり。〻四五言、或は一二言を、
出さず、其は別に委曲に釈〻本篇あり、かく文辞の繋き
を厭ふばかり、前後の諸行、相従ふ言等を、畧記せるも、此例
を用ひ〻〻、加行の従ふは床、雪行佐行の従ふを。揺齊動多行の
従ふて。寛。煠。那行の従ふを言かし。波行の従ふは。結の活き。
麻行の従ふを。齊。弓。同行相従ふを。忌。和行の従ふは。故。是等
の由〻なり。右の義等に漏るる事かし。此等の言〻、將
用假借し出〻る諸言
は更なり、他言〻〻も、下に挙る諸言の類ひ、切てて由、色と
爲れるはやう〻自然に、由、色の義を生ず、其く本篇に次し
釈くを見て知べし。○ちて。曳を。由礼の約して。阿行の延に伊の冠し
る色なる故に。阿行の延の老成かるに。比ぶまで。得の義こ

〻に劇しく壯にして。彼延に代りて。下の活機を爲こと喉
音三行論にも云るが如し。下に活くと、上に論ずる。さえ
此等の外にも多〻〻、本篇に次く謂ふを見て知べし、然るに。上の夜以由の。矢射弓
ふと阿行の延の得かるに依て按に。此行の曳は善
の義にて。擇の曳やうて是なり。其は古事紀。神世の初り。
伊邪那岐。伊邪那美。二柱神の爲て。天之御柱を往廻て會
はして。阿那邇夜志愛袁登賣袁阿那邇夜志愛袁登古袁と
詔ひ相せる御詞の愛て。師説に書紀。一書に。可愛く書て。此
云袁と見え。正書にて。可美。よく一書にて。善とあり。是等の

字にて。其意顯かう。神武天皇段の大御歌に。延袁斯麻加年
とある延も。可愛少女と云こと かう。書紀の、可愛は、字の意を取れ〻ど、古事紀の
愛は、只假字にて意
かし、勿思ひ紛そ、よく雄略天皇段の。大御歌に。吉野を。延
斯怒と詠せ給ひ。天智天皇紀の。童謠に。多抱尼之曳雞武と
ある。曳は即余かう、同時の歌に、御吉野を義曳之弩とある。て知べし、由く在吉。日吉の類
ひ。古余伎を延と云ること 多し。今も然も云るあり。有
余伎を延と云ること 然れど。善は。曳と云ふの本語にて。余
万葉かど〻も多〻、
と云は却て。後かるを。擇し。心に善と好きる物を。擇し取
る義にて。上件の譜の曳良。曳理。曳流。曳礼。曳呂を。乃其活機

かるの阿行の延に良行の從ふを得の活機にて、我に得捷
故かう、此て阿行の延かるの故に、字流とも謂ふ夜
行の曳に良行の從ふて、擇の活用るの故に、俗言に余理
取るとも云ふ、他に有る物を善し擇し取る義かう、其く上
に引く愛袁登賣袁愛袁登古袁の愛まく、延袁斯麻加年の
延共に擇む意かるを思ふべし、然れど矢を射當て取るる
物を得物と謂ふも、宇の如く思はむを、事も無れど、善物由
に擇物の意深るべし、其て、仇に由れ、烏に由れ、獸に由れ
彼を取らむと、擇み射る意有れどかう、得と擇かく微かる
差別かるが故に早く假字を混らして、古事記に多く延を
用ひ、書紀に多く曳を用ひて、中に希に曳雞武、美曳之
弩の如く叶べる言も有れど其みな偶中にて有りて、加行
以下。和行に至る。八行の從ふ言。多く傳はらず。枝。胞。夷。鰕。鰣
かどを。此行の假字からも欠く思ふ耳かな。其く深き故に
凡て第四段の色に、迫れる色にて、言少き中にも、阿行の延
く其祖言かれど、其行に著はを如く、むげに言かきを此行

の曳は、其より代りて、下より活用くを思ふよ、其用くを悉く此曳の用る所ならむと惟ふまでの事よこそ、○けて余を由呂の約と。其本質とて。乃阿行の於よ。伊の冠ひて成しる色なるが。ぬつ日の没りて。闇となるを余と云は。寄て ふ言なり。其と神世の歌よ。青山よ日が隠らば。ぬば玉の夜と出なむと詠める詞の如く。日往と夜の来と。夜往けを日の来て隔をなし。晝と起居て事を為をを。夜と寄居て息へと。なと。故古も今も貴人などの寝給ふと。御余流といひ。起き給ふを。御比流と云を。其と中務内侍日記よ、御ら[illegible]の後も、とみよはぬらしに同じ日記よ、御ひるよりも前よと赤りるしを云し増鏡よ、かふの日ゝけるよ御門はいとくよ御ら[illegible]と問よ、

著聞集五よ、月をも御覧ぜてたちなれば、なと多く見えうち、今と御ひるをおひなりおひるるおひなりおひらむと活りし御ら[illegible]をよよと、おちるるおちれたちらむと云ふ、此を夜と寄と八、元より同言なるが故なり、扨は世代などを余と云ふも。夜と同語にて寄なと。其と万葉二巻よ。天地之依相之極所。如行。神之命等云と六巻よ。天地乃依會限萬世丹榮將往迹云と。と詠る如く。天と地と寄相ふ極と。人とと物の。寄て在るが故よ謂ふ言なと。谷川翁云、世を[illegible]と訓むと。寄の義なり。老来子よ、人生於天地之間寄也と云と、代運、葉、をとも同じ方葉よ寿をも訓と夜は世の移り易る如く、同語なるべしをるとも云を、休用の詞なり日とひるとも將ひるが如し、おちるは御夜なと、たひなると、御昏なり、依仍などを訓むは、世と躰用の詞なるなりと云を伝も、然る言なれど、未委くならに、但し世代の

字義をも別ちく云へバ。世を余と云ふ。歳を余と訓むと同じく。暑往りは。寒きたる。寒往りは。暑來たる。年重なると云ひ。代を余といふ。甲退は。乙代り。丙退は。丁代る如きを謂ふ。此を共と。晝夜の替るを。相似たる故と余と云ふ。然るを。常夜常世の文字こそ。異なれ。全同語なるを思ふ。常世常夜の說と、記傳なる師說とハ甚く異なり、其とちゝと昼し難し、古史傳四十三段の傳と見かしけて竹の両節の間を。余と云ふも同語なり。然るを。和名抄。節竹中隔而不通者也。和名布之。両節間云公俗云與故以擧之とあり。両節間を與と云ふこと。俗なを非ず。其と純體天皇紀の歌と。以矩美娜開余嚢開と見え。以は発語なる冠れるなり。矩美娜開は。節折の神事なり。其御政と出さるる。荒世和世の世と云も。竹の公と。御世を係なる語なると。古今集。雜部と。木もあらば草もあらば竹の節の間かわが身と成ぬるものかな。師說と。與と節と節との間かれども。古へより。通はして。其をも節と書くハ常なりと有るが如し。天と地と依相ありて、寒暑往来し故く歳の世をなし、昼なる日と寄りて夜をなし、夜なるより依りて昼をなし、竹は節あるなと依て公をなし寄りて與とハ云なり、流まの末なるとは。節をなハなを相通ハして與とハ云なり、如此甚く引放しなる。言の如く聞ゆまでも。都てハ寄の義

を出ること無し。其て上件の譜の如く。良行の五色相副ふ
ハ。余良。余理。余流。余礼。余呂と機て寄自夜緋宜かどの祖言か
る色 更かア。此し寄より起りて依ア、従る。據ル寄らむと活く耳からば、糸を絵るも同じ活きる
て、歓び、昭ひ。萬坂遷け蹈くかど云言さまよ、加行の従ふは
是より出こう、委くは、本篇を見て知るべし。
善能除横。佐行の従ふは。任好寄依装。多行の従ふは。禁淀那
行の従ふは。米波行の従ふて。胥呼麻行の従ふて。數讃姫同
行相従ふは言かし。和行の従ふも言かし。此等の余ふか寄
の義かると以て知かし。かむ是等の言ふう、溥用假借し出
る本る諸言の類ひ、切りて余色と為ルるて、まく自然よ
余の声の義を生せり、其て本篇よ次く釈を見て知かし。○

けて此行の音義。互よ相通ふ事の有ると。彼二十五言の横
五段。竪五行の整まる上よて。初行の五言は。共よ夜と成り。
第二行の五言は。共よ以こかう。第三行の五言そ。共よ曳と
かア。第四行の五言そ。共よ曳とかう。第五行の五言は。共よ
余と成ルるよ因る事かう。故是を以て同行あひよ、其ノ音の相通ふ耳からば夜し呼ふ色
しつよして其義の易る事あり、其て此一下色の
ミ然るよ非ば以由既余も共よたかじ趣かう、抑是行の五
色。こ彼二十五言の。混錯りて調ふるか故よ。今こ。一義
を執てハ決め准きる似これと。其中よ就て。夜の主るは。
遣の義こて。由良夜良の約り。以の主こると。苛の義そ。由

理以理の約り。由を動の義素して。上下の四義を兼ね曳の主る所を擇の義として。由礼曳礼の約り。余の主る所を寄の義として。由呂。余呂の約として。各〻其上に冠れる四十五言。各〻其下に従ふる五十言共に此義に差ふ事なし。各〻其上に冠れる、四十五言とハ夜以由曳余を頭に冠れる言の、各〻四十五言なり。有るを云ひ、各〻其下に従ふる五十言とハ夜以由曳余の、下に従ふる言の各〻五十言なり有ると謂ふ所を既に古言活用の條、夜行の所に見るが如し、故是を以て。遣苛動揺寄て。此行の顕に立ち。由良由理由流由礼由呂。その幽を主りて。言霊の幸を為し。於其音象の由まに。夜を初段に在りて壮り初むる音をなし。以ハ二段に居て。壮定むる音を為し由て三段に在りて。壮を用ふる音をなし。曳を四段に居りて。壮を令ふる音を為し。余て五段に在りて。壮り終ふる音を為せり。五色共に動の義を持る〻各〻初定用令終に、音の別るゝハ、五母韵に受る、音質が各〻、初色の父に禀る色、に推定むる言。由を事と定め推を言、曳ハ事と定め推ふ言、余ハ事と推治むる言と云るといへども委からず。て此五色の語上に在り。語下に於て活機に於て其連色に因りて。義の溥に易り由〻或て上省り下省りて各〻下色の言と為れるも少からず。其此所に盡し難りれど。是声〻もの出る緒章の。因くに釋辨ふると侯ぶし。

和（ワ 于良 和良）章（ヰ 于理 章理）于（ウ 于流）恵（エ 于礼 恵礼）表（オ 于呂 表呂）

是行の五色を。日文傳よ云へる如く。謂ゆる合喉音して。五母韻の頭よ。各〻于色冠ひて成れる色等なる其音象を惟ふよ和と和良理〻しき色。章ハ（井 居）章理〻したる色。于色を于流理〻しき色。恵ハ恵礼理しき色。表（形）表呂理（折）〻しき色と。共よ〻良行の五色。その形象を助りて。例の合口言なる。于流（ウン）て言ふ。詞の出来しようを。起り初りる。此と古今よ和と良。和〻理〻。于〻呂〻。表〻呂〻。など謂ふ類の形容言の多るを。思ひ通して辨ふ。然て本色の下よ于良和良など注セること其本義なり。然るハ。和行篇の初〻言ふ。下よ妥くこゝふを後ずし。

章なる。二十五言を。神典の古傳と。阿色よ。和行の從ふる五言〻。微し改て是を知れて。尚於其二十五言の譜っく

和良	章良	于良	恵良	表良
和理	章理	于理	恵理	表理
和流	章流	于流	恵流	表流
和禮	章礼	于礼	恵礼	表礼
和呂	章呂	于呂	恵呂	表呂

の如し。是章第三段于流の合口言なるゝ其中央よ位して其竪横尚〻針よ貫通もる趣よ、意を潜めて此行ハ三段宇流とり起れる所以を尚於心得居ずし抑是、二十五言を。于流〻起て。麗（ウル）の義よして。于良于理。于流于礼。于呂〻機りるゝ于良を和〻約りて。初段よ居て。于理を章〻約りて。二段よ居

已。于流と于と約して。素の内と三段と居り。于礼と恵と約して。四段と居り。于呂と袁と約して。五段と居る是をして。此行五色の初義と。共と麗字の義なり。但し其段位て五韵の次第と因ることと上の如し。麗字と。説文、鹿部と。旅行也、段注と。此麗之本義、其宋本作附旅行之象也、後乃从鹿耳、而相附則為麗、易曰離麗也、日月麗于天、百穀艸木麗于土、是其義也と云ひ、字彙と著也、附也、美也、光明也、数也好也などと見えたり、しかして。如此そなへて。麗字の義と起れる。和韋于恵袁。四〻各〻と。良行の五色相副しなば。和と初段破の活用と成て。韋ハ二段處の活機なり。于ハ素の如く三段麗の活用を為し。恵と四段彫の活用と成り。袁と五段折の活用と成りし。此ハ是行の轉用せる初なり。破字と説文石部と、石碎也、从石皮色、段注と、凡部曰、衆者破也、然則碎也、勞也、折也、と見え。處と説文几部と、処と作りて、止也、从夂几、夂得几而止也、段注と、人偶几而上引伸之為凡尻処之字、久讀如蕭、と云ひ、字彙と、處音杵居也、止也、制也、息也、定也、又留也、とあり、彫と説文彡部と、琢文也、从彡周声、段注と、琢者治玉也、玉部に、有琱亦治玉也、凡琱琢之成文曰彫、故字从彡会意、則彫雕行而琱廃矣と見え、折と韵會と、説文斷、斷也、从斤斤所以斷木作、斷徐曰、此指事、説文、篆文从手作斷、今从篆作折、廣韵、斷而猶連也、又物折一曰屈曲也、又方曲也と見えたり、然るに良行の五色と。もと形容なれども。機き副へる色等なれども其本色はひとしなて韻のと殘ると和。韋。于。恵。袁。の物音と齊しるが。一度らく良行の副ひて。右の音義を成せるなり。永久

に其義を存して。各〻其音に自然の如く。破。處。麗。影。析。の義を持ちう。然れども其こ此行の第二義なり。上ノ麻行ものの例の如く此所に其活用の天要を述べきかれども、此行の于を阿行の宇と互に相似て胡乱しき事ありて、下に其別を云ふべき所にそ漏し洩ぬ。けて此五壱の然起をる由来を。神典に索むるに就て。ものつ云べき事あり。其こ上に著せる如く阿行の五壱も。其始め宇流より起りれども。彼こ純単音に締ひ調ひて。五母韻に等しき成声なるを。和行こ實には阿行の五声に。于の冠重ねし壱なれば必ず阿行に帰納せべき理なるに。然し調はば、如此別に一行に立てるなり。故是を以て。五壱なる自

然に。稚く麗しき方に活機を為せり。然れど是行實には阿行の上壱稚壱にして、の於物音なり、彼阿行の伊宇延の絶て下に使はる、支なく、其下の活機をば、彼行に此行と、三行にて、動くこと金の道理に因る由こ既に論ずるを思合せべし、けて是行の音の始めて神典に出るは。上に引いる神代紀に。天地未剖判不分云〻。古事記に。国稚如浮脂而云〻とある。剖分稚なるの舊刻はし其初殺なるの稚字の剖て。和加。和伎。和久。和祁。和古〻活く訓して別分なるを然訓ひて更なり。紀に剖分の字共に。和加礼〻訓るも和加の再機なる言なるの。此を和加礼〻云ふば。自然に。我彼の義を成して。破割等の字を。和理。和流。和礼。

和良年〻活らし訓むと。全く同義の活語かう。其と和加礼と。和加理、和加流、和加礼、和加良年と活きて我彼と別る〻義、和理の和理、和流、和礼、和良年〻活くそ、一ト筒かる物の二ツに破分るる義かるを思ふ、ゆし、然れど古人て、彼ノとれても未よ、のつ類かるれを別きての意かりて、釈〻る人も有しかと。

くて。其和流と。右二十一五言の。初段かるを按ふよ。是もく彼一ツ物の初しく稚く浮漂ひし。時よ宇〻流〻と潤ひ宇〻良宇〻呂〻と在りるの。破裂りて。天地と剖れ。稚国の麗く〻と所見りむを。然る状よ御覧せる神の御情よ。考る所思看せる隨よ。其様を大御言よ。詔ひ形はし給るる。此行五色の元基と為ること疑ふし。其ハ諦しく然語り傳きし事こそ無れ、天地未り剖と会易不分、国稚かるの語と当散ちの有りる趣を、正目よ、見行せる神からでと語ア出給ふまじき謂かるを、上件〻の説等よ思ひ合せて悟れりし、内て其元基の然る所以と。阿声よ和行の従へる五言よ因りてで所知る。其と阿行篇。第九章の。初段かる。阿和。阿章阿于。阿恵阿表の五言是かア。阿と皆例の指声りて。彼の義かるを。上件の二十五言と。相照し攷ふる。初言の阿和て沫〻て。青と同義の言かれて。此は天地已よ于〻良〻と閑々しを。阿于良と指詔せるか。乃其言と為り。良の開音よ因りて阿和と約り。右譜の初段かる。和良。和理。和流和礼。和呂の活機をかし。阿于良と。乃彼麗の義かるか、閑音して阿和と為てハ彼破の義をかし、其

を一字訓よ綜てし泡の義を成やり。此言古くて決りて、泡
ゑ、泡る、泡れるなど活りりむを、其言後よ傳はらば
但し俗言よ怜哀を阿和礼と云
は、波と和と素とり通ゑばかり、けて阿和良と阿和と約ア。
阿和理と阿章と於まア。阿和流は阿干と於まア。阿和礼と。
阿恵と約り。阿和呂と阿袁と約りて。泡の活機かるゥ。其と
訓よ就てかれ。泡字も用ふれ。實よは青の義なて。古語よ。大
空の壁立ち狀を。青雲の降居向伏を極と云ひ。大地の廣
ルき狀を。青海原潮之八百里と云る如く。青色やゥて天地
の初り。其麗稚よ。敵の薫滿ゝる泡かしれどかり。青と説文
也、木生火ノ位ニ生丹ニ段注よ、考工記ニ曰、東方謂ニ之ニ青ト丹赤石也。南
方之色也、韵會よ凡遠視之明莫若ニ丹青ニ黒則昧矣字彙よ、荀

子、青出ニ于藍ニ而青ニ于藍ニ音精青ニ堅剛茂盛之貌と見え、泡は
同書よ、水上ノ浮漚也とも沫を涎沫とも、水沫とも、浮沫とも
見えゝり、泡青の字義と、斯の如くふもと、我ゥ古言の阿和
阿袁と、麗稚き義なて、藍草を阿章と云ふも是より出るる
ゥ青侍青女房かど云と始め、青某とゝふ言の多るも、こ
ゥ稚き義とり轉りせゝる、言等かゝ、本篇を見て知るべし
然しなど。阿毛よ。和行の後る五言と。彼譜の初行かる。和良。
韋良。于良。恵良。袁良の活用とハ其元にして。彼麗ゝ指ゝ
る言の活機かるし。阿和。阿章かるとの五言ゥ。其副ゝる良
毛の去れる言。和良。韋良等の二十五言は。其冠ゝる阿毛の。
省りり齊へる言等なて。共よ右よ論ふ。大御言あるし當初
の神語かること疑かし。然るし阿毛はたて指ゝる事物の
無てハ決りて出さる毛かるよ彼

阿和と、彼麗を指る物、亦彼破を指る所ある、言かを以て、うく冬謂ふかア、其冬阿和の一言よ姑く良行の五色をを兄、彼和理和流かとの五言よ、各く指色の阿を冠らし活らし呼試ても知べきかり、〇けて上件の説等ハ此行五色の起原ゆ、各音よ一義を指る。較畧の説かるゞ。然しも調ひ竟る支し。喉音三行論よ云ふる如して其實て阿行の五色よ。合音の祖かる。于の冠しる故を以て。其音ふる自然よ麗稚く聞める中よも。于良の和と変るよ。良色の韵かる。阿の圓満かるゞ残りて。其根韵く成り。其初声于かるゞ故よ。其音ゆ、圓回かと意象ありて遂よ其形せる物よ云ア言と為りて。彼泡の和ハ更かり。古支記

よ。丸迩坂丸迩臣かと有る丸の訓み。但し此丸を師て訓よ ハ非ズ、字音ガンと云 きれ。ゆく天武天皇紀よ。河曲と書き。万葉一巻よ島曲二巻よ。浦回かゞ多く見え。和名抄車具よ。輪車脚所以転進也和名和と有る所と是かア。谷川氏云、転をワと訓むも同し、勾と酒勾の類ひまがりと訓むかアと云り、故是と以て。此声訓の上よ在りて。全く稚の義と聞める言よ。回の義を含み。當よ回の義ゆ聞める言よ。稚の義を兼ゝるあア其て上件の譜の如く。良行の五色相副ゆ。和良和理。和流。和礼。和呂と活きて。破割悪我童かとの祖言かるを更かア。此ハ破よ起して破ア。破る。破き、破らむと活用くと本して、うく種ゝよ薄用し、慕ゆく笑ゆも見り出

らり 委くハ本編を見て知るべし、加行の従ふて。稚。脇。漏。別。佐行の従ふて。態。鷲。忘。走。多行の従ふて。渡。那行の従ふて。蹄。鰐。波行の従ふて。他。麻行の従ふて。破。枝。是等の和こゑ右の義よ漏るゝ事なし（かゝる此等の言より轉用假借し出しる諸言を更るゝ他言よても、切りて和音と為しる）は、自然よ和音の義を生せり、其て本篇よ次ゝ釈くを見て知べし。○扨て韋ハ上件の于流の。于理と活るゝ。理声の副詞にして伊と成ぬきを。于の仍留ゆりて。伊よ于の冠する稚音なるゝ。彼伊て氣動く意の音なると。此韋を其反て。處定する義なり。其て處居坐ると訓むハ更なり。井と訓ムも。熊と据ゑる故よ由も。泉水を湧る所よりハ。水の處聚よる所なる故よ。韋と謂ふ。堰く堰を訓むも、塞して水と畜ふを分俗誤りて、ゐと訓ずるを立ると、ゐをあてるとゝ云ふ類なり、堰く率将帥なると訓むは。我が許よ引居る義と通ず。蘭を訓むを。居席と造る草なる由。猪喰豕突なると云る。世よ猪頸と云語のある如く。彼獣の頸の。居喰めるゝ故よ、負る名なるむ。此等の事ども谷川氏も、既よ云るを、今て已ゝ思ふ旨なれ交て記せるなり、然れと韋。處の義なること。知べし、其て上件の譜の如く。良行の五声相副ふる。韋良。韋理。韋流。韋礼。韋呂の。處居の活機なると以て知べし。此活用よ據るよ、居ても

と居て居る居を居らむと活らし云る言ゐりくむを、右書
どもゝ、居る居て居る居らむ、るど云へる言のを有るに、後ゝ
云ふ面の韋ルるから也、然れど居をと云ふ加行以下。和行
きと俗ゝ居ろしもゑふて自然の事うちと、
ゝ至る八行の從ふ言ども。多く傳はらず。夜行の從ふゝ敬
てふ言の有る耳かと。韋声の首ゝ於る言の、ゝく必かる
ゝ、自然ゝ言の上事と元より下ゝ居定まる言かる故
ゝしゝ云さるゝや、○けて于ゑ。上件りくゝ往く論ふ如く。其元
く阿行の字と同く。彼元氣の云ゑ。起りしど。委曲ゝ其活
機を攷ふもた。彼于ゑ内ゝ潤滲る方ゝ調ひ。此于ゑ外ゝ
麗愛しき方ゝ調ひて。彼と此と、自然ゝ母子の如く成く雅
との差別あり。然て何と以て知らるゝ。其音くゝひゝ相

似て。義の相反るゝ頼てど所知る。其て因つ彼字ゝ良
行の從ゑるて。裡得憂空。かどの祖言して。内ゝ屬る訛る
り。但し此て、良行の從ふ訛のを然るゝ非ず、加行以下
の從ゑる諸言も皆しゝく、彼係と復ゑ見て知ゑし、然る
ゝ此于ゝ。良行の從ゑるゑ。上件りの譜の如く。于良于理于流。
于礼于呂て。雙の活機かる。浦。賣麗未懽かどの祖言か
る始ゑ。此ゑ麗より起りて賣ゑ、賣る、賣ル賣らむて活く、
言て麗しくして人ゝ賣るかり、阿行、宇流も
我ゝ得るかり此一下言ゝて彼字く
内外の差別ある事を知り辨ふ。加行の從ふて。浮動佐
行の從ふは。失噓多行の從ふて。打伐棄那行の從ふは言か
し。波行の從ふて。初上麻行の從ふは。海産夜行の從ふて敬

同行相從ふて訛かし。是等の于ゐる。雅く外より於く言等かりかむ是等の言等をも濃用せる言等も多うて、さて他言るても切りて于ゐと為れるハ自然より于ゐの義を生セり其て本篇より内て此行の于の一音なる言ハ。十二支の卯を見て知かし、内て此行の卯を于と訓むと。兎の訓より外より聞ゆることと無し。をを卯を于と訓むと。兎の義なて。此行の音かれる由は。あづ万葉集より。宇佐藝。和名抄より宇佐伎と有れて。内て万葉より。兎原卯名手兎道卯管かと有内て。于と訓むも呼し故より。其省語を假字より用ゐるかり。獣名より省語を用ゐる例て、鹿を加、猿を佐とばかりも呼ぶる是るり、内て始めて聞えし物かれで、根住の義かる。然るより万葉国りて始めて聞えし物かれで、根住の義かる。然るより万葉と省きて利とのと云るて。たかし例かり

十四の東歌より。于佐藝と見え。新撰字鏡より。于佐藝とあり。是本語りて。于佐伎を却りて同行りして。其音の濃まるり。然まは此物はも。大國主神より仕奉りし物の。御尾前かり。故より此名を負ゐるを。于佐藝とも云るかれて。卯とうと訓むて。此行の于かるかて。炳烏かり。谷川氏云兎て吐而生子と云ふハ易経の意りて。かくるゝやと云ふれより。御尾前て仕奉れる事て古支傳ハ十段を見て知かし

○ちて惠を。上件の于流の于礼て活りるか。礼声の副於れは。閉口して延て成きを然を進み敢て。宇の仍苗ゆして延より宇の冠まる雅壱かるか。阿行の延て。得の義て宇て

も動き。受得る意。夜行の曳を。殊よ壮よ擇る意かるこ。此恵
こ未擇得かどの義よ至らば。神代紀よ。妍哉此云阿那而恵
夜と有る恵こ。何よまし其と善く思ふ情の内よ起まる
時よ完尓と咲向ふ意かア。阿那而恵夜と孔完尓咲哉の義
かるよ。但しその咲向ふを乃遂
妍哉の字を文略よ過らう
よとと擇得べき本情か
り、故是を以て此恵こ未擇得かどの義よ至らばとハ云か
り、是乃阿夜、二行の延曳とく、此恵の稚き所かく彼、言を也
や安見児得こう云ての歌の情よ善しこ咲擇める、安見
児を得こうこ歓きる趣きの歌かるこも思ひ合せ、活
こ書紀よ。嘘樂。歓喜かどと。恵良岐こ訓こ。續紀の詔詞よ御
酒食倍恵良岐こ見え。万葉十九の長歌詞よ千年保伎保伎

吉等餘毛之恵良恵良ホかどと有る恵良こ。笑ふ状かるが此
は彫鏤かどの字を。恵流こ訓むこ同義かるが。恵よ素よも
咲こ彫この二義を兼ねるこ。其こ和名抄よ。靨、面小下也。恵久
保こ有るよ按合せて知かし。人の笑ふよ頬のあまりかし
こ云ふ、言の意こ彫凹かが、咲窪かた也何れこても同じ。
和良恵良共よ笑ふ起象かるが、共よ和こ功るを世言よ和
ここ笑ふ、和ここ嘲ぐかこ云ふまこ破る笑ひ元より同言
かるが、世よ慕實かどの熟アて破こるを、エミワレこソひ
板かどこ並べ張こるよ、透間の出来しを咲むこも、笑ふも
云ふ、ハレ破こ笑ひ咲こ彫こも、元より同言かるが故かり、
くくて此恵よ。上件の譜の如く。良行の五色相副へば。乃恵
良。恵理。恵流恵礼。恵呂こ活きて。嘘彫窪。かどの祖言かるこ

更ふと。おを雷とり起りて、彫ると彫る彫ると彫らむと活
りるが、將りて種くよ用ふるおと左のおとし、加行
の從ふを酸。剋。佐行の從ふは。眯多行の從ふて。嘔那行の從
ふは。犬。波行の從ふは。醉。麻行の從ふて。咲。罅。夜行の從ふて。
咲哉同行相從ふは言ハかし。是等の恵うか右の義よ漏る
事かし。かは是等の言等ととと、將用せる言等も數あり。やと
他言ふても切りて恵を成れるは、自然よ恵を
義を生やり、そは本
篇を見て知べし、けて此恵の早く。一音の言と為れるハ。
畫の訓りて。此を彫畫きて。咲見る物かる故よ恵とハ謂ふ
かと。其言の始めて物よ所見いると。出雲風土記。秋鹿郡。恵
曇郷の所よ。須佐能乎命御子。磐坂日子命詔。此處者國稚美

好有國形如畫鞆哉。吾之宮者是處造事。者詔故云恵伴神亀
三年改字恵曇と有る是かり。此を今の要ふき文を書きて
引ふり、書紀よ畫工を、工カキ
とも。工タクミとも 訓み、万葉二十よ〔わ〕が於よも畫よりき
取らむ、暇もが旅ゆく吾を。見於く去ゆ〔む〕ぬと云へる歌あり
今是文の義を按ふよ。須佐能乎命の神世よ。早く畫鞆とて
咲美く彫畫りる鞆の有りるよ。此處の國形との畫鞆か
して、国稚きを美好と咲見ませる。由の。御語りて、有りる。鞆を
是より遥よ前天照大御神の高天原よて、猛き御稜威を震
ひ蟄る所よ出て、古事記神代記よ、見ゆ其後と、拳るよ遑あ
ば咲畫同言かる由を。万葉二卷。柿本人麿ノ歌よ。見の海。
能乃浦回乎浦無等人社見良目。滷無等人社見良目。能咲く

師浦者無友縒畫屋師。浦者無鞠鯨取海辺乎指而云こと。咲
畫と互に書くるは。然る意の文字用るとも。按合せて知
ら し 由こと十三巻の長歌よも、海部之釣不為吉咲八師浦者
無友古畫矢師云こと咲と畫を對書くら、略解よ、たこ
し 志やしは、そしやしくこと云るこ字
斯等也志ら説れくるよ、拠れる解かれど非かり志やて此
詞の主よて重くそし ハ縦字の義にて拉し下のしはげよ
も助辭かるら志やうとハ古事記の神語よ、阿那迩夜志
ある迩夜志の類語にて、迩夜志こ完尓哉し、志やし多咲哉
しこて浦かし、澈かし、かど人の云と心に嘲うし思ふ由の
詞あと迩夜志咲八師、こもよ、字斯ゑ
ちの説て、能く釈得られけりと、抑繪畫かいこと恵と訓
ことゝ。ゝく諦しき古言かると。和名抄圖繪具よ。野王按圖畫
物像也。畫丹青所圖也繪會五綵也と云て。其古言と漏る

故よや。古今の學者こゝか。畫と恵とゝ、繪の字音と取く
る言の如く心得さめるは。甚く誤れる事よこと。其こ契中
呉音と以て、和名とせりこと云ひ、和訓栄よ、繪を名と云は呉
音かり、畫も同しと云る類ひ、是かり、文字はよし唯よ音
の志々しの字よも有れ初りて作り出心こと、精しき思
ひ兼よ出る事かれを容易くらぬ事かれど、書とゝく支し
今も二三歳ばりの兒も、誰教ふ孫ど自ら手次さびよ、
人の目異まこ口〇△蛭蛆かど色。書出ると、上古の人、いる
よ大抵かるらむらよ、今の兒子よも、及ぎもしと爭でゝ云
む、まこ彼畫鞠の畫もし畫よ非ひて、將何よゝ有らむ、平心
よ惟ふ、然が意よこと彼繪字の呉音の恵かるは却て此
方の古言の傳はれる言とこと思はる れ、其こ然る類ひの
言等も數有れば、かり、如ゆく飲食の事よ、恵とゝ、訓あと。其こ依づ
古事記應神天皇の大御歌よ。許登那具志。恵具志尓和礼恵

比迩祁理と有るなり。記傳よ。事和酒咲酒よ吾酔よけりと釈しなり。酒よ咲としも云は。咲向はる〳〵由の詞と通えらゆゑ此を呑めば打咲る〳〵故よ。謂ふと云むも雅かし。名物考、和訓栞かとよ。神代記よ、姙を孕と訓て、悦ふ意として、ゑむをゑふ今も俗よゑみと含むと云ひ、物語よゑみ侍りてと云り、或と云くが咲顔の類ひ皆同し万葉集よ、咲字と訓るも同意なる充し、源氏よ、ゑがちよたはれと有るも、笑がちよ御坐かり、保元物語よ、龍顔志なりよ咲壺よ入らせれはしまを見えらり〳〵云るく然る事かり、然しと書紀の。神功皇后の御歌よ。玉嶋すて釣し給ふ文よ。取粒爲餌と見え。和名抄畋猟具よ。四壱字苑云餌以食誘魚鳥也、和名恵と出せる餌の訓と。咲酒の咲と同く。咲向ふ由の言うて。鳥獸ふのと言ことゝ非ス

旧を人よも云し言と聞ゆ。たは今しも吐と恵都伎。嘔と加良恵都伎と云は。士清説の如く。餌衡の義かしど。人の食物なも餌と云ること著かり。但し和名抄よし、嘔吐、倍止都久久太ガ比、とあて、世よはもく恵多伎とも云て、赤縣人の詰よ、飲食男女は人の大欲存にと云る如く、飲食よ恵と云て咲向ふ意かること是とも思ひ合ひ方し、和訓栞よ、餌を乞と云は飢と義通ふ〻やハ日本紀の歌よ、いひよ乞てと有り、飢と云かりと有れど、彼歌よ烈てと有るとゝうゑのうと殺りるまて、元より恵の下音かる餌とハいうく異なる物とやけて新撰字竟連字部よ。嚬呻暢五躰而息心之貌乃比須。又恵奈久と見え靈異記の。力女示強力と云條よ。嘲恵都良可志と有て。恵奈久久は。文よ拠るよ恵那伎とも活き。餌和の義よて。俗よ食息

めしと云語の如く聞え。恵都良可志を。咲連うしと聞えらゆ
ゆと字鏡口部に、嘆喘息也、恵奈使須と有るに。上の義の摶
れるなり栞に。忘るき毛、餌法なるべしと云ふ也しく暢五脉
而息心之貞と有る文
に拠るも然るは非じ、ゆゆく和名抄に。揚氏漢語鈔云。屠児屠
牛馬肉取鷹雛之餌義也。和名恵止利と有るに。今昔物語
に。餌取と書たる義なり。契沖云俗に織多とかきて。ふしと云
は此恵止利を訛りて終に俗字と
作れるなるべし。○けて表に。上件の字流の。字呂と活るが。呂也の
副詞にて。開口して於と成るかきと然毛進み敢に。字声仍面
ゆゆて。於に字の冠れる。稚声なるが。彼於に。織逐ふ意う
大の義と成し。此表く折終る意より。小の義と成らり古昔

よの二音のいと謝に別とし故毛。古事記開化天皇の御段
に。妹妹に。意祁都比賣命。袁祁都比賣命あり。仁賢天皇。顕
宗天皇。御兄弟にて。意祁命。袁祁命と申せる意毛。阿行に属
て大の義と和行に属て小の義なり。意祁命を記傳に意
冨祁命と書て諸本
に冨字なし。今て延佳本に依れり。真福寺本、なと、此には此
字なれども、下に二処に此字あり、然れたもと有しと諸
本にかきは後人の書紀に依てさかしらに除きなるなる
べしと云まと、意冨と有るに知て後人の校意毛有
る其大小の義ともと織折より出拔しと全く其義の調毛
る事に。波行の従ふに。頼る意にて。於毛於波。於比。於布。於閉。
於保と活きて大てふ言の終言に発り。袁と袁波。袁比。袁

布袁閑。袁保と活きて。小てふ言、この終言より起し。於より波行の必ふと遡ひ遡ふ遡ず遡はむと活りる、余りの於保を乃大かり、袁より波行の必ふと終ひ、終ふ、終ず終ず、終る、終し、終らむと活りる、余りの袁保と、乃小かり、追ふて進て、大かる勢かり、終ふは退きて小かるる象あり、然るより終の活用全くは傳はらず、況て小より袁保の訓の有しか絶くるも、世より知ず是ぶを成よりる、但し此ていし上代をりの支くく有々を

よて此、行の壱等の阿行の雅壱かる義理。南く灼然かず。然れど。古支記の。初め。二柱神の御言より。愛袁登古袁。愛袁登賣袁とある同し事と神代紀、正言より。可美少男烏。可美少女烏。と有りて。其本注より。小男此云烏等孤。少女此云烏等女と見えうる。烏を乃小の義なて。同紀より。男夫士陽雄壮かと訓る。少を美る方より出くるか。万葉と始の諸書より。尾緒絃麻宇岑岡丘をも訓るて。大より對て。小の義かるかと。准て知て。其て尾ハ躰の大かるより對て袁とソひ、器より比くる級のさを、弓琴かどの絃とも同し。麻苧と云は細きと云ひ、岑岡丘かどと袁と云は、山の大かるより對て其小かると小處と云て省りる言かり、但し陽雄壮かどと袁と訓むて、其陰雌壮の小かるより對て於と云ずきが如かれと、小て男の必きと称めて女男と相對て袁と薄やる訓かれど、大小の小と小と云とハ別より して老少の少と袁と訓る意かり、思ひ錯ふかりられ。南く地名より。を祢瀬と筑波を比叡と佐保かど云へるをは小字と用ふる如く。少く美しき由て称くる詞。まと栂尾槙尾松尾高尾かど云るを。峡峡かどと訓るより同く。山の尾かり。歌

より。峯よりも岳よりも詠る是なり。上のなり初瀬なども類と、栞より
北と戰國策より林山之尾、常山之尾なども有る注より尾猶末と
云なり、万葉より、峯岑をもとめり、尾より根の義あれば、み祢
と同意なるべし、古支記より、五十隱岐三尾之作矣と見えし
も峯尾の義なり、神代記より、丘陵をとめると。或りの略なり
と云なるも然る言なりけて上より引なる神詔の。愛衣登古良愛衣登賣
衣の末の衣も。記傳より。余と云は通いて。衣登古余。衣登賣余
と云むが如し。此例古へ多し。其八重垣衣。などの衣も。其八重
垣衣作るも。上より廻る衣より非ず。八重垣余の意なりと有
るが如し。此外より衣てふ一言の、種くの脈絡やうこと
より用ゐる心得りなど、詞の玉の緒より委くかさし
ひ增なる書等もたくさん有れど、論ゆく栞よりも。右の神詔と峯

て。神代紀より。可愛少男。歟可愛少女歟。と問ひ。歟と衣と訓
ひ。と云るも然る言なり。其正書の文より。焉と衣と訓なり。
實にも彼末なる衣も。歟焉などの意なる詞なり。なお栞より、古支記、万
葉集なども、そにをはのをより、矣と書なり、矣も字音より非ず
乎哉而者の類なりて訓の詞より當て訓なるなり、乎と同く用
なる例も、墨子より焉在矣来晏子より、豈不多矣の類なり万葉
集より焉と訓なり、古今集より、その義なる曲なりの訓多し字書
より、焉と決辭と注
せり、なども云なり、けて上件行の所より引なる。淺深秘抄より。称
唯時塞口警蹕時開口也。とある警蹕の色の。於くなるなり。
既より云る如なるが。称唯時塞口と有るは。是ゆく於衣の関
合。大小反對なる。諦しき證なるが、称唯を名目より。イシヰヤ

ウと唱ふこの事ハ、禁中名目抄
など諸書ニ見えたり。其讀ニハ。表〻登申須〻と有
ルと。其正しき應声の時ニ成。表〻とのミ唱ふるなり。其と
神武天皇紀ニ。天上ニ坐シて。武甕雷神の。熊野高倉下に。天
皇ニ。韴靈劔を進り給ひしと所ニ。高倉下曰。唯〻而寤之と有
ルとなり。本紀の旁訓ニ。越〻と有
ルと。ヲハの假字なり、ちて源氏夢の浮橋ニ涙
の落るを見せしと。ゐぎさらはしニ。をく〻荒らかニ聞え居
ゝり云〻。宿木も。御盃ちゝりて。我〻と宜へる声ばかり云
ゝと云る詞もあり。然ルに此等のをく〻。称唯の表〻とは
別なり。栞ニも枕草子ニをこと取うちふさきて、と見えと
り、今も人ま答ふて我〻と云ひ、いや我〻と云ふ是

なり。祝詞などニ、称唯と有ルと口と開くるまりニ色を出
シ、口と漸くニ開きて、去声ニ云ふ、文選注ニ、唯ハ諫應也、と
見えたり、ゐゝ軍ニ我〻のミ云る答もあり。其を落窪物語
四ニ。御心して。おがさむ方ニ。ちるし給へと宜へ。我〻と
立給。御幸巻ニ。近江の君のかさと召セど我〻と最ルにちや
うニ聞えて出来り。など有ると常の應声なり。古今著聞集八好色の條
ニ大二條殿小式部内侍がもとに月といふ文字とりきて
使はしゝりまば、然るときもの和泉式部り妙なれど易
く心得て、月の下ニをといふ文字なりを書て奈らセ
る月とりふ文字なりを書て待ち出をと心得ゝり、ゐゝ人
のめに御答ニは、男をとゝ我と申ニなりとあり、
然ルに丹生忠見集ニ、三月櫻木の本にて、うの弓いる心ニ
もいる日の弓はみやゐかるニ花のあぬりニ我とと答ふる
と有ルと、をとりふ答ふ女ニうぎらゐ如くも聞えたり、此

はるか攷ふるし　けて此表より。良行の相。副ふる。表良。表理。表流。表礼
表呂の居。折。已緒。かどの。祖言かる色更かり。加行の從ふし
岳。招。癡。佐行の从ふは。治。教。食。嘘。多行の從ふし。歸。遠。劣。那行
の從ふし。斧。波行の從ふは。竟。甥。終。小。麻行の從ふし女。夜行
の從ふし。痒。和行の從ふし。唯。たし等の表こる。右の義より差
ふ事かし。かは是等の言より、轉用假借し出こる言等も數
多あり、由こ他言よりも切りて表色と成れるは
ほこ自然より表の色の義を生セり、其は本篇と見て知るべし。○けて此行の音義互に相通
ふ支の有るに。彼二十五言の。横五段。竪五行より整へる上より
て初行の五言色。共に和と成り。第二行の五言色。共に韋と

かる。第三行の五言色。共に予と成り。第四行の五言は。共に
惠と成り。第五行の五言色。共に表と成れるに因る支かり、
故是を以て。同行色がひに、其音の相通ふ耳かりに和呼
ふ声色を一にして、其義の易る事あり、其こ此阿声のこ然る
より非に韋予惠表も共に同し趣かり、抑是行の五声りく彼二十五言の混錯
りて。調へるが故に。今しも一義と執りて。決め難きに似こ
れこ。其中に就て和の主こる色。破の義にて。于良和良の約
り。韋の主これこ。居の義にて。于理。韋理の約り。于色麗の義
素にて。上下の四義をこれ惠の主こる色。賜の義こて。于礼
惠礼の約り。表の主こるは。折の義にて。于呂表呂の約とし

て。各〻其上に冠する四十五言、各〻其下に従ふる五十言。共に是義に差ふ事なし。各〻其上に冠する四十五言とハ和韓于恵表と頭に冠する言に各〻四十五言なり、有ると謂ひ。各〻其下に従ふ五十言とハ和韓于恵表の下に従ふる言の、各〻五十言なり、有ると云ふ、此を既に古言活用の條、波行の所に云るが如し、斯て其四十五言と、五十言とハ、此行五声の機りる 祖言なるべ猶是より摶用假借し出る諸言を更なり、他言にても、切りて此行の五声と成ぬるは、まさに自然に其義と生せり、其〻本篇に次〻挑もて行くと見て知るべし、故其破居麗。形。折を。此行の顕にもつて良。于理。于流。于礼。于呂。その幽と主りて。言靈の幸と為し。于於其音象の内〻に。和を初段に在りて阿音の稚き音とし。韓は二段に居て。供音の稚き音と為し。于を三段に在りて。宇音の重き音とかし。恵と四段に居て。延音の稚き音を為し表は五段に在りて。於音の稚き音と為せり。五声共に麗稚き義と持〻るて、初声の父に禀〻る声。ま〻各初定用令終に、音の別〻を、五母韻に受〻る音質なること、上の行と の如し、彼国辞解に、和て始言の重、韓ハ、定言の重、于の動言の重恵と欲言の重表は治言の重と云ると多〻に、阿行の重恵と定めざる説かれど、有かり、〻くて此五声の。語上に在り。語下に於て。活機きなり。其連声に因りて。義の摶り易に。内〻或と上省りり。下省りて。各〻下音の言と為れるく鮮〻ら。其〻此所に尽し難〻れど是声どもの出る諸章の。因〻に釈辨ふると供べし。

良宇良 阿良 理宇理 伊理 流宇流 禮宇礼 延礼 呂宇呂 於呂

此行の五音も。上よも且々云る如く。阿行の五言。古末よ嚴しく觸まて。成しる声等かるが。其音象を按ふ。良を阿良 理を伊理 流を宇流理 禮を延禮理 呂を於呂理 と云る音。流と宇流理 と云る音。禮と 延禮理 と云る音。呂を於呂理 と云る声とも。其初めく阿行の冠ひて。其合口言かる。宇流て言の出来しよ起りて。阿行と二行よ分れる。声等よかむ有るが本音の下よ、宇良宇理かど記せるとも其本義云る言。阿良伊理かど記せるとも其義かり、其と此五声もと、形容の声かりが、阿行の冠云る故よ始めて音義と為れバかり、下よ論ふと見て知るが為し。其と何と以て知れかしで。既よ阿行の條よ出せる。彼篇の初章かる二十五言と神典の古傳及び諸書かる古語よ。徵し攷へて。是を知まり。其二十五言の譜便宜よ依て再此よも。出し記。是章よ第三段宇流の合口言かるが其中央よ位して、其竪横まゝ斜よ貫通たる趣よ意を潜めて此行も三段宇流より、起れる所以を思ひ心得居ずし抑是二十五言を。宇流より起り。潤の義よして。宇良宇理。宇流。宇禮宇呂と活りるが。宇良を阿と約りて

阿良	伊良	宇良	延良	於良
阿理	伊理	宇理	延理	於理
阿流	伊流	宇流	延流	於流
阿禮	伊禮	宇禮	延禮	於禮
阿呂	伊呂	宇呂	延呂	於呂

初段より居り。宇理を伊と約りて。二段よりをア。宇流と宇と締りて。三段より居りをエ。宇礼を延と約りて。四段より成オ。宇呂ハ於と約りて。五段より居り再各くより良行の五色相副ひて現入潤得。卸の義を成して。此義なひよ。阿良の二行より分まさり。二行より分るハ一下度然る五義を成せるより。阿行より良行よりも。自然より此五義の具はるを謂ふ。阿行より右の五義彼條の云ふしで此所よりて良行の事を斡と謂ふなり、うくて其初色の良をもと現より起はるが。現の本義と彼等りて。何よまは等と云ばうり。諦より見留はる言かる故より。良行を第四段りて。総て有在二字の義を指うり。是を以て万葉集よりリルレの詞より多く此二字を用ひあり。其三巻より、高有之二より大雪落有一より、念有我母三より思有者四より相在登母、三より立在松樹かど有る是よりてかゝ数多うり、万葉はて良をかゝ在と神代紀より、澄清在とある在も是かり、阿良の省語りて。等の義かる由て。神代紀より。吾等所造之國やまゝ是出雲臣等祖也。はゝ此集人等始祖也かど数見え。古事記も同じ趣より用ひ。万葉一より。海處女等之。三より相見之兒等羽衣かど。数多を都て。はつく賤しむ方より用ふる詞かり。其は同し神典よりても尊む上よりを、同じ等字かから八百万神等ヤヨロ海神等かど、ミる列チと訓うりまゝ是等字を、ホモと訓る所も多うり、此と殊より賤める言かり、まゝ万葉よりても一巻より朝布麻須等六、六巻より、定異等霜かど有るに。訓

を借て假字よ用ひいるるかり、抑是行の音とも。都て言語の上よ用ふこと無き也。舌音といふ中よも。多那の二行よ比べては。其色陋しく。舌頭いと冗忽しく振動きて。弄舌の趣かるが。其機き甚博く。良也彼久く良く。須く良く。都く良く。奴く良く。布く良く。年く良く。おどの形容言。ゆく良加。良志。良年おど。想像の詞よも何よも。此とかく活く音とハ為ル。契冲の正盗抄よ良ハ舌音の至極かり、古の端を卷て、多那よりも猶斷を於よく彈じて云はる。餘の舌音と、舌を下齒よ著ても云るゝを、是と云ルとと云ひ、士清の言よ良ハ等をよむ。吾等幾等、あち等、たち等、おど下よ於りて云詞よて、ゆく戀しら、他しら。物ら。思ひら。湊ら、夜ら、霞らおども詠り、多く語末の助けよ云ると有り、ゆくかく云辞おど、云辞よも通ひて聞ゆ

と云ふり、もと弄舌の陋しき色かる故よ、おゝ種くの活用をて為にかりり、其色良の一下色のこよ非ル。理流礼の活きて殊よ。繁く。常の言語し更かり。事を記ルよも。一下行も此ノ三色の出ざる行のかきり如し。然るよ唯呂色のを。用ふ言の少きて。例の離れて助くる音かるが故かり。其色既よ乗よも、呂を助語よ云ハ尾と云ひ、程を何とろと云ひ、児をセろ姉をいもろ家といもろ、兒をたろと云ふ類かり、何セろかせろを坂東詞かりと云ふ東国ふて、見をと云ことを見ろ聞りよく云こことを、きりろ、置くおとを、たりろと云ふと、云るが如く。付て此行の五色の言の上よ無しと。云こと ハ今し誰も知て謂ふ事かるが其く言よこと無りル。謂かる在音之内在音之外と云かる

詞の上には。呂を除きて。餘りの四音。これ専用の音になも
有ける。其は皆同行相從ふ良流。良礼の。所字の義にて、被
見なとも訓り。加行の從ふ良加良伎の。如然爾乎などの義な
る。佐行の從ふ良志。良須。良世の想像の詞。ゆゝし敬ひ詞なる
をも更なり。良加良伎と聯らく、疾らき、等の類なる、形容詞、ゝ
な上ノ件の字等の意あり、良志、良須、良世ハ、坐良志
のらし、那良志の類ひ、ゆゝく奉良
須、奉良せ、などの類と謂ふなり、多行の從ふ良知。良都。那行
の從ふ良那。良爾。良禰。波行の從ふ良比。良布。良閉。麻行の從
ふ。良麻。良美。良牟。良米。夜行の從ふ。良由。良曳など。こな言よ
非ぬ詞なるを以て知る法し。谷川氏云、良久と老らく、戀ら
く見らく、聞らく、許多らく、の

類なり、良久の死し留、詞の緩急なり、良須と、下ゝきら渡らば
など是なり、良須の、死し流なり、良比ハ程らひ中らひ、など
云え、なおらひて、直會直相など書る類まてあひの溥なる
べし、良年ハ疑の詞なゝ良米と助語よ云り、袖らひだらめ
の類なりと云り、此等
の説をも。思合はすし、

○古言清濁記第八

古言清濁の事は。まだ語意考よ、清濁を相通はし。いふ例。と標
して其說よ。五十聯音の中よ。加伎久祁古を賀藝具宜碁と
濁て。佐斯須世曾を。邪自受是叙と濁て。多知都氏登を。陁治
豆傳杼と濁り。波比布閉保を。婆備夫辨煩と濁る。此ノ二十音
のと濁りあり。其清むと濁るを。言の本別なて。然れて是を

合セて七十音なり。篤胤云清むと濁るとの言の本別なり、と
ハ、下ゟ委く云べし。清濁の言ハ。古支記。日本紀。その外古書の訓注も。
濁言ゟ也。濁字を書ると見て知べし。ゆゑ濁言ゟも清音の
字を書し。所も有れど。清言ゟ濁音の字と書ことハなし。万葉
かどゟ、千が一ッその違ひ有るも
後ゟ字を誤りしなり改むべし。うくて万づの訛ゟ。本より
濁るあり。言便の濁あり。其本より濁るをば。通はし溥し延
約むるも。同しく濁るなり。言便の濁るゝ易らば。然れども。
通はしなどゝて云も。本同音なれと自ゝら通はし溥し
ても。言便の濁る多し。言便の濁りハ、二書といひ連りる時
ゟ必あり、そもゆゝ海河山河我人か

どの類ゝ彼此をうゝ並ぶ云ふ故ゟ濁る事ふし。山之川の
之を畧ゝて。やまうハゝと云ゟも。川のもを濁る。浦之人山之
人を浦人山人といふ時も。びを濁るは皆是ふり。ゆゝ山之
風をし山風と山ゟ下ゟせの濁り有れむ。ゆゝ
加を濁らば。此類も有るあり。凡言便の濁りを。ゝく心得る
事も。年経ゝい心を用ひざれば叶はば然るゟ平言ゟも自
づゝ此音便の清濁りを誤るも希あり。仍て平音ゟ心を
付て思ひ知べし。惣ての音し平言ゟ古音多しゝ。古書ゟ
のミ、古音雅言ゟ有りと思ふ事ふれ。然心得て。ゝず書の
音を通り知て。のち平言ゟ心を置き心得ばゝず足りぬ。
そゞ中ゟ本より清と濁るゝ却て相通ふ例あり、殊ゟ此清
濁の通ふ言の事ハ、後世ゟ傳ゝ云ふ人ゝくゝか日の入る
國の音傳へしてふ人も。心得ざれど左ゟ挙ぐ。篤胤云上件の事ども。師
の漢字三音考皇國正音の條ゟ古言の正音ハ。都て五十ふ
ゝ。是ゟカ行サ行タ行ハ行の濁音合せて二十を加ふれば。都て

七十ふれども、濁音は〳〵清音の變ずして本より別なる者なれば故なく皇國の正音なり、是を別ちて立じ清音なる構ひなる者あり。一音の言なれ濁る例あり。凡て濁りてもじ其中下なる合せなる言なれも首を濁る例あり。凡て濁りてもじ其中下なるのみ有り。然るに上下相接を連ねて合せ云ときは首をも濁ること多し月をも望月あるゞ云ときはつを濁るなり。と谷川ふゞ云ときは、かを濁るが如しとこれしるをも合せて心得べし。○婆備夫辭頌の濁音を却て麻義弁米毛の清音して云り、神奈備を神奈義。加夫利を加武利。須倍良藝を須米良藝。比頌を比母ゐど。相通はしいふ數を知らじ。○陀治豆傳杼も。はゞ那迩奴祢能なる通ずり、加太志を加奈志。金作ふり、鈔を云ふり倍太知を閉奈里。萬葉なるをタチヒめり多治比を丹比とも書くは。多爾なる通ふ故なり。但馬丹波も此

意ふり。美頭と美奴も其本眞瓊の義なり。奴傳と奴祢。紀なる瑞の字を用ふる奴傳と奴祢。紀なる也で也ぐもと有るも。瓊音は於杼礼と於乃礼。罵る言なる於廼こゝのうぶき鳴ことあり。

そるとも云ふも。於乃〻久と同じ。篤胤云此中なる義頭と義奴有るひ。猶夏等の外なるも云ひ遺にし言等あれと何○右をぞやと打傾ゐるい說も。今らなる抛し出にあむ漢字にて見る時も。馬美武米母。呉音はおゝしめも漢音もばびぶべぶふり。雖亦祢祢廼。呉音ハふる思祢の漢音もだぢづでとあり。此ゐゐ仁もゐんぎん然も祢んぶ

どの類ひ。呉漢二音あるを。此国なる呉を用いて。仁も亦ゐ

さ知もゐ用ひ。泥ハ祢と傳もる用ひ。烏をうとをもる用ひ。廼もぞゝのもる用ふる類ひ多し篤胤云士清の言なる。唇音の清濁の行。ハヒフヘホの

音変じて マミムメモとある。此をは行同等といふ。古音の清濁行。タチツテトの音変じて。ナニヌネノとある是を外十同等といふ。ナニヌネノの行。マミムメモの行なり。其漢音ふしをて強ていすバ皆タチツテト。ハヒフヘホの濁音とふれり。那ふの呉音ナニ。漢音ダデ。馬美も呉音マミ。漢音ハヒの類あり。反音拗なり。エケセテネヘメレエの横通り漢音ふしをて云ひ云ひ云ひ ○ 宇れしきを嬉しい。悲しきを悲しい。嬉しくを嬉しう。悲しくを悲しう。闇くして闇くして。幸くして幸くして。等の類のきをいくをいくをうくをうくこれを平言ふり。雅言ふい。必ずふしき嬉しきと云ずり。後世と云へども。歌ふハ此平言ハ云ばるを。文ふハ誤る人あり。其物語文ふをりて誤るめり。物語ぶミハ。昔くのあしふし話

あれむ。平言を專と書る中ふ。雅言をも交ずしあり。仍て雅文をゝ人。是にせて。ちる物語の言を。みぶるふ取るいひぶ事ぞ。雅言ふて。古言を本ふりて。今も傳へて云へる。正しき言をいふ。平言とハ。常ていふ言ふて。然しふが言誤りてハ無くて。雅さらぬ思を云ふ。俗言とハ訛り轉じ。まゝ他国の言ゝ相交ずて云ふ。まゝ事記。日本記。その外の古書を訓むふも。皆雅言を用ふずきふ今の訓ふハ平言も更也。此記日多くい古書の書る例を挙ぬも煩はしりもぞあり。挙ざるも皆ふり所有るめり。見む人思ず。ずとり所を挙るに一ツ二ツ故のこ挙てやみぬ。然れどその故よし此と限也りと思ふこと切れ。○ 篤胤云。上件の考説ハあとゝ大畧言の。足ハ思支ふて有られど。今し古語の学びふ従ふ徒ぶ。誰ゝもゝく

足ぱ也誨とり。出ざる者の有らむ。当昔世に有れる学ぶり
を想ふに。余も却りて。此足も然誨とこそ尊しとハ思ず。
然るに我ふみ。らし次こに其缺を補ふ器。謂ゆる青ハ藍
より出て。藍より青き説を成たり。其こふ是字斯の。ちる
思頼に因る事ふれぞあり。我黨の小ふ志ほしも此事を勿
忘れそよ。鈴屋字斯の御蔭イ言ほ〳〵しゝふり。然るを今世
ら。大抵生ふがらに。其則を知さり負に。是考の事ふど。取豆
て称ひ出る人もあく。適〳〵に見る人あるも。甚はうろき物に
云〳〵ごし然る足ぱ也事をし嘸々り。呼はる倫も有るも其
教守の廣く及ぶる驗ふれで字斯の雲の天翔り。いうに本
懐ある事に見給ふらむとハ思へど。然れげに慨〳〵こそ進
波人入江正善ゲ。久保之取蛇尾と云物に。細川玄旨翁いも

く。深く執心して工夫をふし。不審を晴さむと思ふば。愚ふ
る身ふれども偏然ふき説を見出ぱもの。然ありとて
古人と勝り劣る智慧こそ非ぱ。只今弁知ちる事も。先古人
の荒ふふしをして置もし上に付て出来る義ふり。古賢の
恩徳とあらぶとふ事あしと誠に書を見る人。是一の心
得ふるべし。と云るハ実然る言ふり。語意考ふど。誠に荒ば
ふしまを有ふれど其ふ〳〵は我ら爭てう
も。如此ばうりの説とも荷ひ出ぱ。（ぎき）　抑古言清濁の事
ほこ古昔の假字用格のこと。已ゲ思ふ旨ら。古事記傳説と
本ぎきて。既に古史徴開題記と著せれど。尚言足らぱ所思
る事と有れも。復更と此よ云てむ。其に開題記て。放ありて卒ふと思ひ立ち。筆
工彫工を雇これきて草稿ふ〳〵ふ徑ひて。り彩書き且彫し
めて半年ばうりに。甚急ゲはちしく物せしうば。今見るに言
足らぬ平ふらぱ。云ざほ悪うと思うれぞれ。然るに其師説と。假字用
りて。悔思はるく事も有れぞあり。然るに其師説と。假字用

格のこと。大うゝ天暦の頃ようり。以往の書等は。皆正〳〵〳〵しく
て。伊韋。延恵於表の音。はゝと下に連もする。波比布開本と阿伊
宇延於。和韋宇恵袁との類。こだれ誤アることゝ一つもふし
其をこゝろ。恒に口よいふ語の音に。差別有りるうゝ。物に書
よりも。自ずからに其假字の差別い有りるあり。篤胤云此も早〳〵語意考よも
古事記。日本紀。万葉。その外の古書の假字。均しくて。新撰字
鏡。和名抄。まて惣て異ふ。及び。其和名抄より後に漸こゝひう
こと出来て遂に盛に成りるしも。古書をうまり見る人悉れ
む正しく人もあし。うゝらうては。字の音ふどい。其書ごとに異
に〳〵て定り難きを。此は初ある伝手て易ざるあり
斯てから字の始めて来りて。軽嶋明宮の和名抄を書し差
平の御時まで。四十六の御世ゝと六百七十年ばかりか
り其間世の中の事ハ悉う移り変る事ありとも猶上代を

傳承て。盛ある代に。皆同し音。同し假字あるうゝらい。後代と
万の事。失はれて。古意古音も忘ぶ思人の云へるを用ひむ物
うは。古き世ふるき書。古きあと
に據て心得ずしし云もこう 然るを。語の音よも。古へと差
別ハ無をしを。為ど假字の上ゝるを。書分ゝる耳ありと思ふ
も。甚しき非あり。もし語の色に差別あゝ。何にとりてと
を。假字を書分ることの有む。そのうみ此書と假書と。假字
の違へることゝあしゝと。皆自ずからに
に素ゝう差別あをし事を知ずし。斯て中昔より漸こゝに右の
れるうゝ物に書ゝも其別あゝ音ども各乱れて一つに成
假字ありて。其も無用ふる如く〳〵あくあるとて。一つの音に二つとしの
に京極中納言定家は歌書の假字ばかりひを定めらる。是に
う世に假字づうひとゝこと始まりき。然れとも当時既に

人の語、音別なくて、すべて古書にも伝なくて心もて定められる故と、其假字づかひも、古の格とハ甚く異あり、然るを其後の歌人の思ふまゝにて、古も假字の差別無てしを、唯彼師あむ、始めて定め給へるを思ふあり、ほゞ近き世に至りてハ、名ご音の軽重をもて辨ふべし、といふ説あども有れども、こゝを古と知られ忘言あり、さてゝ雖波に契沖といひし僧で古書をよく考へて古の假字づかひの正しかりし事をバ、始めて見得たりし、凡て古へ学の道も、此法師よりぞ、ひらけ初れる、いとも有がたき功なるあも有りける、さて其正しき書等の中に方事記と書紀と万葉集とハ、殊に正しきを、其中にも古事記、殊に正しき也、と其正しき由を論はれたり、篤胤按、古書ある假字用格の事、ひとり此師説の如く、心得て在ずきこゝれども、仍熟く惟ふに、天暦より以往の人の言語も

あ正しく、恒に口よいふ、詔の音に、差別ありし故ふ、物に書まし自ら知られん、其假字の差別も有りける也、と云れし、説も後ひ難くれども、其も当昔ひで正きひとし、世人の言語の、其後忽に乱るべき道理あり、れぞあり、但し和名抄の成れと頃ひて、世人の言語正しかりしを、其より後に乱れとそこと、上の分注に出せる語意考の説もおもし、然ふ、天暦より以往の書等の假字の正しき事、奈何といふに、ひづ神世も更あも、いと上代の人も、恒に口よいふ語の音に、差別ありて、真に正ひとし事ハ論ひあきを、世の降て来ぬるほに、漸くに轉て訛る事と所思るあり、其いと古くし、訛言の有りし事も、書

紀を始め古書どもを本云某今訛云謀と云る事の多きを思ふべし。是やがて乱れ訛りたる訛あるとや。然れども イ井 エエ オヲの音まぢり下を連れるハヒフヘホとアイウエオ ワ井ウエヲとの類の。近く通ひて聞ゆる音を方へとゝなどを。互に混れ訛れる事の無くて有むや。然るを天暦を以往の古書ども。彼書と此書と假字づかひ違ひ。大かた同じ趣を正しき故も。其本書の假字用格を拠て。然ら為ば餘の事を記せる彼旧辞の書等を本ぶきて。書しとる故を正しきあり。旧辞の書等とは。天武天皇の御世以前をいふ。いかに旧く有来し辞書どもあることを既るゝ如し。中昔まづごろ物書むどの人も。今わが徒もて旧辞書を記せることを疑ひ。無き物ありけて人の口をいふ所を。外国への轉言をも率て拠て。弥降を乱れ来れども。其辞書どもを。言語の正しきを記せる書を次こを記し拠りる書ありし故を。其を拠りて書ろふこの。彼此よく答ひて。正しるべき謂あり。其書〻る書の。假字づかひの正しきを以てそを記せる世の人の言語もミふるくの如く。正しるべ。況し師も縣居宇斯も。和名抄の〻と思ひむも委うるべ。成れる当時まで也。世人の口をいふ音の正しうあしが。其後乱れ〻る趣を云れ〻る也。彼抄の假字の正し〻。其後の書を訛と多きを以て。云れし事あれど。彼抄の正し〻き也。即古き辞書を採て記せる故あり。其もとの序文を。延長弟四公主。訪二万物之名一。其教曰。我聞思拾芥者。好探二義実一期折柱者。競採二文化一至二于倭名一棄要屑是故雖一決二世俗之疑一。適可決二其疑一者。韓色立成。揚氏漢語抄。

和名本草・日本紀私記等也。其餘漢語抄・不知何人撰汐集彼
歟家之善説今我臨文無所疑柔固辞不許遂用修撰式漢語
抄之文或流俗人説先挙本文正説各附出於其注若其本文
未詳則直挙雜色立成・揚氏漢語抄・日本紀私記・或挙二類聚国
史・百葉集・三代式等所用之假字云云有るして著明
あり。和名抄の事あゝ開題記を委〻論ずらと見ずし。然れ
も頃朝臣の当昔天暦の頃。既に世人の倭名を屑とせし。適
まこあるも。古語を慮ひの有しを以て。其以前をも想ひ遣
るべし。ほゝ一箇の書よい非びて。其頃の人の。已が海〻
書しる手澤も多く傳はれる假字違ひの交れるを以て
も想ひ辨ふべし。最上れるし世ら。漸に乱れ来りて。ら〻く
成つるらと疑ふく。延長第四公主の御教しの任に頃朝臣

の此抄に撰びて。古言を訂されしとる点。訛言を轉はせじし。
方域に関居とる如き。美き有功にあて。然れど昔より心あ
りて物をみせる人も有ども知らぬ。溢れにあふれ訛りに訛りて。遂
に上件の字斯こらの論はれしとる如くあも成れりとる。然る
を今ら〻く。古学の真盛とあるべき時にあひて。神語の本辞
さし探汲知べく成るは甚し辱ふき事ありうし。然れど此抄を更ふり。其餘の古
書ゐし。イ井エエオヲの音。まこ其餘の音ふも。互に通ひま
訛りとらと所思ゆる事も。往こを無きに非び。そを本編ゆる
古史傳に。然る語の出こる所こに云を見るべし。然るに世の一倫ふ
る倫も。ゐる事の由を深くを思はで。書来れる假字にのこ
泥こて。古書と釈もとれる故に。解得ざる語も多うり。元を

り古言を、古書の假字をうて、釈得る事も常あれども、謂
ゆる臆説なりて、正を索むる旨をも、ものを思ふべくこそ、
抑天暦よりもの以往の古書は、往こ假字の違ひも有ることは、當
昔いまだ。其後の如くは。言語の道の乱れざりし故に。却て
今世古学の徒の如くは。旧辞の書よりも正し敢ば。ものを
あくまで訛れりと見ゆるも多くは。其を次こと寫し訛りの
来るなりと。思ゆる事も有れども其心しらで見るまし。然るを又
その一倫ある倫も慥しき古書を見ずして假名の違ひを有
れば当時の物あるべきを捨て取ざるを見識なきも有れ
ども熟る假字の違ひを書し別て比ひ見て眞偽を正し得べ
き事のあるを。思ひ慮らばぢるべし。最もあやまり無きわざ
こそ。いにしへ古言清濁の事は。ものの上に出せる語意考の文に其

清濁を濁るは。言の本別ありしと有れと。此を別るは非ず。其
本も同言なるが。清軽く濁重く。音二ツ岐て。其義の轉易
れる耳なり。但しは元より清音の言なるが。音便なる
山を下し論ふを見ずし。其も殊に近き一事を挙げて論はむ。天地初
発の古傳に。如葦牙因萌騰之物而と有るも。其物を葦牙の
如くと譬へし故に。毛延阿加理と。萌騰の字を塡れども姑
く葦牙の譬へを忘れ。萌騰の字をも放れ。太古の言のこゝろ
し世に心を回らして。熟くこれを惟へば。其毛延阿加理と
物も。天日の初あれむ。燃ちて萌え。明りて騰れる傳へを

其清濁を言の軽重あることゝ著明らし。此言の義、委くい本編か行の所ゝ云べきを、あゝゝは例ゑ。その大意をこゝにあり。然れも燃萌共ゝ。毛延毛由といふ。言の同き音更あり。明を阿加理騰を阿賀理ゝ訓もし。清濁ゝ抱はらび。同言あることゝ論いあし。其ゝ是燃明萌騰のゝゝ非び。假字の同じき千言万語。その塡る字ゝ其清濁も易るゝし。皆同言の轉用あるが。唯し清も本ゝ〜て軽ゝ濁ゝ求〜ゝて重きこと。准ゝて知べきあり。故是ともして此書の本編ゝ古史傳ともゝ古言を釈こゝ皆この意をれ〜ゝ。説を成せり。見む人異〜み説ゝる事あれ。けゝて古事記傳ゝ古書の假字用格の正〜き中ゝも。此記の正〜き由を論れ

ゝ次ゝ。ゝ此續紀ゝ以来の書等の假字ハ。清濁分也。濁言の所ゝ。清音の假字を用ゝる耳。あゝび。清音の所ゝ濁音の字をし交ゝ用ひ。ゝゝ音ゝ訓ゝを雑ゝ用ゝるゝを。此記書紀万葉ハ。清濁を分てを。然れも此事ゝ就て。ゝも人の疑ふ事あり。今乗曲ゝ辨ゝも。其ゝは後世ゝは濁ゝ言ゝ。古ハ清ゝゝゝゝ多しゝ見えて。上の枕詞のあしびき。ゝゝ宮人あゞのヒ。嶋形鳥家形鳥。あゞのトの類ひ。古書等ふも何れゝ清音の假字をのゝ用ひゝ。濁音ゝゝゝゝし。ゝも此類多し。ゝゝ後世ゝゝ清む言ゝ。濁音の假字をのゝ用ひゝる

も多し。是らハ假字ばかりひの漫ある故非ず。古と後世と。言の清濁の變れるなるべむ。今の心を以て。ひくり無く疑ふべきよ非ず。すべて其外よ言の音の假字を用ひさる事もいと希し所よも。濁音のみ始めて清音あるべきあるハ。自づから取ハ誤りて誤れるも有るが。すべて後よ寫し誤れるも有べし。はれと古事記よハ殊よ此違ひなし。と希よして惣ての中よ。アづから二十ばかりあらてい見えばる其中よ十ばかりハ。婆字あるを其八つハ一本よハ波と作るも。のとり云云の婆も。もとい波なりしこと知られ。とり然れい記中はは〳〵。清濁の違ひと見ゆるもいと多し。十だかりよハ避けして。其餘幾百かある清濁ハ。ふ平しく分れさる物をいと希なる方よあづかりてあかてを疑べき事はて書紀も。古事記よ比ぶれば清濁の違へる事いと多し。此をいと不審しき事あり。然れども全くこれを分らば。濁用ひさる物よハ非ず。凡て是正しく分れさるバ。らの後の全く濁用ひさる書等のみる非ず。すべて方葉集。古事記よ比ぶれば。違へる處も稍多かれども。書紀よ比ぶれば。違ひばいと少くして。凡て清濁正しく用ひ分らる趣あり是らの差別ハ。その用ひさる假字どもを。一一毎よあはれく考ヘ合せて。知ずき事あり。只大ち抵よ見て委しき事ハ。知り難ふるずき物ぞとあり。師の是論ずよ。ちりて志をれこして異る古言の清濁を。考ヘ著せる書ハ石塚龍麿呂が古言清濁考あり是はは〳〵見ばハ有べく。ば。篤胤この師説よ因ても。亦按ふ事あり。其ハ古事記ありて。以末の清濁ハ。

誠に師説の如くあれど。言語の本を云ふときは上に云ふ如く清るが本なれば。上古よりは決めて斯の如くあらば濁る音の言はいと少くそのえらび濁る音を。千万言の中に。一ツ二ツふ音で無りしを。漸こと轉用多く成るに従ひて或と言便(コトバテ)るなり。或も外国言(トツクニコトバ)なども相承(アヒマジコ)りて濁れるが。遂に同言の重き方といふ言と。定れる物とぞ所思(ソボ)める　其一ツ二ツは元より濁れる言あるなり。清濁とりて氷炭相反もてるその思ひも谷川氏の言に。清濁とりて氷炭相反もてるその不見(サリ)ありざりの反しにあり。シとキと通ずり。いと濁れを不見ありざりの反しにあり。シとキと通ずり。いと濁れを濁りにを濁りにバ不見(ズ)ありみたいに見るあり。スとルと通れの急詰あり。たとの反しスありみたいに見る。ざるの反しスありみたいに見る。ざるの反しテあり テを濁れいに見てての義あり。それも古今集の。初ても見ゆ。初でを見えるるの。歌と

下の初でもは不審の義と。先輩も釈せられしれど。て字濁りて読ざれ音を通しづらし。やはり「庭」の雪に我り跡なりて出るるをとはれるりとと人や見るらひ。の歌。てもじ知もし濁りてらめも 怪歌と ふるといひ「我り心ふぞさめり初 却更科や。たば捨ふてづる月を見て。此歌しとるるの てもじを濁り唱ふる時に。京人の歌とあるとるが如しとく分別らずきこそしたるる如くデジズふぞを。清て云ずしに非初を。此等の類しえらず濁音あるずし然れとあれ。奈良の頃ずを。彼人の清ていふ音を。此人と濁りて云ひ。此人の清て云ふ言を。彼人し濁りて云ひ。すと国と云て度とるとて。言語の清濁一様あらば。古事記序に諸家之所賫帝紀及本辞。とある類の古書とる。此書とは清音と書とる言を。彼書とは濁音と書きあど。各と様とあらし

を。彼勅語の旧辞〻撰録せ〻よ〻と有る大御言の如く。安麻侶朝臣の心と。その旧辞の。正しき限りを擇びて清濁を定め本書の假字をば。悉改めて一定と記れしふり。其と書紀續紀万葉等。以来の書ども皆更ふり。古事紀ふり以前の書の適〻存れる。聖徳法王帝説ふど。古〻と今傳は皆古書どもを。中世の書と引て見えるとも。清濁の假字の互に異ふるは何の意しふく。濁音の処〻清音の假字を用ひ。清音と濁音の假字を。濫用〻るも多うれど。然のみは非び。清より濁りと云る語ふる故に。二様に書て見せるも多うり。此を按ふと。古事記撰録の時に。安麻侶朝臣の假字を改め書れることゝ明ふり。其と清濁の假字のみと非ず。餘の假字。まと地名神名の書状ふども。一様〻〻のまて。佗書どもも。伊佐奈伎命とも。伊射那岐命とも。種〻と書るを。邪岐の濁音を定ふて。い弉とちで。伊耶那岐命と書れるを。一を以て也。惟ふ知ふし他しふと安麻侶朝臣の著〻い云ふど

稗田阿礼の。口〻ひいてし書をう弉せるふて其やがて謂ゆる勅語の旧辞と云しの也〻。

いて足ひき

宮人ふどの口嶋弉鳥家形鳥。ふどの口の類を。古書〻〻と。何も清音の假字を書る也。当時ふも是るの言は。ふて古音を失ばばし故ふり。まと後世〻清む言。濁音の假字をのみ用〻るも多きは。古と後世と。言の清濁の変れる也と有るも。古事記と限る事〻て。佗書とも皆然る也非ば。凡て古語の本也。こふ清音ふりし事は。始継水ふどの口キツは古書〻も多く。濁音の假字を用ひ。今しふて也濁りて云めと。言の本を思ふむ。始し端継付。水は満と同言

あれど。甚古へ。清音の言ふりしを。後に濁れること知ぬ
し。そは今も常陸人。出羽人などの始を波志米・水を美都といひ次継ぎ
ふどのキを清音にいふ国所もあり。はゝ端を常はゝ・波自ものこをこめり。ゝ次をツキと云ふも常ふれど
も。由基主基の主基やうて次つ字は義ふるを清てスキと唱
ひ来ぬ。すゝ次継字の義も異れども。言の本と附と同言と
て清音ふることゝ。次も彼と此の付く義。継も彼と此の付く
意ふることゝ思ひ辨ふべし。此も此一二つに限らず長も中
正〜正し。比も内ふるゝぶひ。もも濁音といふ一方の言の
解ぎしきの。清音と徳して考ふるゝ。解ざ
る言ある事ふし。本編の諸章を見て知べし。然れど総て古
事記に出ぬもとし。濁音の言いふ後ふして。神語の本語
ゝは非じゝし。然て有れど。合しも何ふも せむ。早き御世
ゝゝ遠長ゝ。ゝ定まり来ぬる事ふし有れど。我人共

ゝ。古事記日来の清濁ゝ擾りて在るぞ。即ちの勅語の旨辞
ゝ従ひ奉る道理ゝふし有れる。然て有れ。世の古学ゝる徒
をのゝ固〜守ゝひ。彼記ゝ濁音の假字を書る言をぞ。本を
ゝ濁れゝ言ゝして清音の言の寛れゝる由を辨ずば其を清
音に復して古義を蒙むぎき事を
知ざゝるゝて亦深〜思はざゝるふゝ。

五十音義訣巻之四

大壑 平篤胤撰述 男 鐵胤
孫 延胤 謹校

延約通畧第九

○古語延約通畧等説

今しは誰も知りて云ふる延言約言畧言轉回ひる言ふどの事ぞ。本考ふ。上件の説等ゆ次ぐ。其大概を誨さとしぶ。此條々ふは。論ひ直ひ曲ぎ事等ぞ。然るふ今印本。ゆらゆ條々甚く錯乱して。其偽りは取ぐ。故今は既ま云る。已ぐ闇記の憶断をもて。其文を訂正し抜く。按ふ旨況も述むとひ。其は本考ふ。延言約言と標して。後世ぐハ漢國ふ反と

いふよ依りて。反しと云ふぞ。我国ては。二言を約めて一言とし。一言を延て二言ふ云ふくと有れど。反しとはみ云とては足ざるかて。篤胤云。契冲の正濫抄ふ反しとも切とも云へてし説の如し。但し此もりは古説なれ本考ふ始め名目を用ひられしり。信ふ此る固より有てし名称ふるり。且は形阿を延る現始と云ば。延言現先ふ舉ると云ふども。是ふは童部の心得易らむゲ為ふ。約言現先いへて。其約むる事は。○淡海国ても。也阿波字美てふ名ふ阿を。其波字を約むれど。布とれる故て。假字は阿布美と書れて。是ふあうみの如く唱ふるて。言便も。あうみとも書べき現。必あふみと書来しふ依りて。其本阿波字美てふ言ふろを知るふり。○篤胤云。阿波て阿布と同言ふて。淡海なあふを云は。阿布宇美の。宇は省れる言ふて。其て布ふ宇。韻あれどふり。委くて阿行篇の第五

章ふいへり。字斯の説は如くふても。言の本て同ドりれど。阿波。阿布同言ふる古義を思ふて。此方やはさりぬべき。○遠江国てを也登保都阿波字美と云へるを。其都阿を約れば多とれる故て。假字は登保多布美也書ふて。是も唱ふよとうみとも也ふとほみとも書べきを右の約言は例ふよて。必ず登保多布美也書されど。ふとてを成さず。○篤胤云。これて阿布美て。止て准へて知べし。○行知布。戀知布れど万葉ふあるは。行といふ。戀といふ也云言れる現。登以を約ば知とるは故ふ。志り有ふかて。今京こふさは。其知ふ氏ふ轉じて氏布といふ。今も東国ふてて。ろふ也云へり。○和布を爾伎多倍也云ふをそは多倍を約めて爾伎氏とを云へて。ふ伎て。調ひてう於く志きふ云ふ。多倍は。布の類をを名ふて。○我妹子現和藝毛古と云て。和賀伊毛古れ。賀伊の約免藝ふれどふて。是ら

れ類百千ふれども皆是ふるから牙。本言の濁るて。延約とも不濁りて。それ清濁違ひてて叶てず。○篤胤云。和賀。和藝ハ同言ふて。我妹子を和藝毛古と云ふ。藝ふ伊韻あるう故ふ。妹の伊は省かりし。和賀。和藝とも不。吾の古言ふ。ること。○竪の音を直ふ約め云ふ和行の第一章を見て知べし。○餓は。紀ふ伊比爾恵氏と有るて。伊比尓字恵氏ふて。草木殖植る殖。恵とはみ有るも。共ふ字恵を約ふるふり。伊夜を夜。布保を保ゆいふ類ふて。○並の横韻を直ふ約め云ふは。万葉ふ。於毛比を毛比。於登伎を。云類ふり。是等ハ畧くふ非ず約免ふて。篤胤云。卯本此間ふ。○或て約め云し。○夜ハ須るは。我良尓云々。○志加志奈我良云てふ三節あるは。轉回通と云へる條の錯乱ふり。正しべし。○右の如く二言を約るは常ふて。三言四言をも。一言ふ約るも有て。神代紀ふ。都利波里は事を

知とはみ云は。其上下は都と里を二を約め云ふて。篤胤云。釣を知を云て。あぐ都理の約てふり。波理て言ふは係ら爰。多行は第九章を見て知べし。○比乃志多て事を比ふと云は。比て日ふて。乃志多は上下の乃多殖約れば。奈を成ふむ。ふて。篤胤云。比那て比泥と同言ふて。古の義爲し。けて卯本は。下ふ。○言の下ふ。須良を。いふ辞。○延言。右て云く。と云へる章あるは。轉回は條の錯乱ふり。

は約言は。其言長くふて。云ふくけ難き時ふ約めいひ。此延言は言短くふて。其言ふいでの悪ふ時ふ延ていふ。篤胤云。卯本此下ふ。ふるを。由都以波牟良云ふ。○宇良夫礼て云ふ。○御こと。はりぶふ。云ふ。○見万志由加万志ふどは云ふ。と云る章ふ。はりぶふ。其て轉回の條れ錯乱ふ。ば。此ふ出さ爰。良久少紀を云ひ。戀る多殖のるを延て。ふ良久の多殖を延て見

云ふて。是て良久の約めるを逢はむとし玩のむを延て阿波
ふるると表裏ふり。此外ふ花ちはを花ちらふ。移
万久ふし玩を云ふ。万久の約ふり。武ふり
る玩うゑらふ物ど云類。これ延言ふて。是まる限り無ふれ
ど。皆是らの意ゆ。
○二度延さる物て。万葉一ふ。家告閉とあ物て。家を乃礼の
礼を延て。良閉を詔ひしふて右の類物り。良閉の約て名告
即礼ふり。名告
佐根と有物て。は玩名告物と云ふ礼を延て良世と物るを。
其世をまふ延て。佐根をよみ坐せて。是玩約言もて。約むる
時は。奈乃良佐祢の。佐祢ゆ約てはは世ふて。其世て上ゆ良を
合せて。良世を約れど禮と成て。名告禮てふ言ふり。ふ玩以
て延言約言ゆ有こを知ぼし。さて同集ふ草を加良佐祢
といふも右ふ同じ。此類多

このれど。皆かくかり○篤胤云。右二
節卯本ふ畧言ゆ條ふ錯出せて。○畧言。あれふ種々あて。
高脚を多可しと云は。加を引くふあれこもれむふり。過去
し玩過ふし。小青を佐子。腹赤玩波良加ふどを右て同じ。○
家を倍。上を倍。道を知。石玩志といふ類て。只ふ略物る物て。
○宇々良々玩宇良々。久々を比佐々。淺々玩阿佐々ふど様
ふ略くも有て。○下玩畧くは。天をあ。足をあ。時を登ゆいふ
類ふて。○上下を略くふも種々物り。佐我美の国て。牟佐我
美ゆ牟玩略き。牟佐斯の国て。牟佐斯毛ゆ毛玩略きて。西北
の国て。前後をもて名を分ち。東国て上下玩もて。然て身
狭といふ地名て諸国ふ多し。ふも其身狭の名より国の
名ゆて成しふり。○篤胤云。相摸武蔵二ツ国ゆ内て。身狭てふ
地名あるゆと無れて。此て従ひがゝ。内山眞龍ゲ言ふ。相

模武藏の名て。足柄坂り基起きて。坂上ふる国を佐賀美と
いひ。坂下ふ国を牟佐志といふ。御坂下御坂上の義を云へ
る説ぞ近ろりける。○乎々里を云は。其も。木ゝ枝。草ゝどゝ多よわ
く靡くゝと波畧紀云ふ。是ゝ波多和美靡くを云ふを。其多
和を重ね。美を略きて。多々和々をいふを。多波登ふ通ハせ
和と乎波。隅違ひふ通てせて。登々乎々といひ。其登々乎々
を略きて登乎々と云を。はゝ略よて乎ゝ里と云。是。此里は
美ふ通ひて。多乎美といふ同じ。即多和美ふり。かく幾度
も略ふ多し。篤胤云。宇々良々云々より以下四節ゝ。卯本
と云を始め。十二箇月ゝ名の解も有ども。卯本いとく乱れ
て。其月名も多く落ゝる。今しかの眞跡本ゝ文をくも
闇記せば。ゝ波てて万葉考ふも出さ迯で漏せり。ゝて此乎
乎里の説。まゝ従ひゝゝし。其ゝ乎々里は。和行の第八章ふ

出る言ふて。袁宇。袁恵とも浩よて。勞ゝ弱れる意の言。多和
は。多行の第八章ふ出て多袁やうふど活く言ふて。
相似ゝる言ふがら元より別ふ。○轉同通はゝ例て。神代紀
ゝ。委くは其章とを見て知べし。
万葉らふ。五百箇磐石と書ふく。いふ波いてむらてふ言ふ
ふるを。由都以波牟良と唱ふるは。伊保の約りは與れる波。
同音ゝ由ふ轉じ云ふり。湯津爪櫛。湯津桂ふどゝの波皆是
ふり。○宇良夫礼ゝ和備ふ同じ。其宇良ゝ約りは和ふゝ。夫
礼の約ゝは倍ふる波。備ふ轉して。和備といゝ。篤胤云。宇良夫礼ゝ。
心と振と二言合ゝる言ふて。和備と同意の言ふて有ゝ。
宇良夫礼を約めて。和備と云ふゝを云。むゝ違へり。そは宇良
は和行の第九章。和備ゝ和行の第
五章ふ出るを合せ見て知べし。○御こゝを御こゝふ。命乃良万
止と有ふて。みゝを乃良武てふ言れる波其武を万ふ轉し。

ある物を。篤胤云。御こと[illegible]ると[illegible]ども。其ふくこそ有まれ。乃良麻とはふし。此はもと良米良牟物ども云。詞の本語ふり。委くて良行の第、章を見て知べし。○見万志。由加麻志ふぞい。見武行武と云ふ事物るを。是も万ぞ武を轉じ通はして云ひ。下の志は志伎の略ふて。ちよは繁でふ言ゆ下ふ添て。其言を強てらちひるふり。古事記ふ。穢繁国とあはは是ふて。且ふ〳〵は嬉し紀を字わし。悲し紀を加ふしぞ略よ云ふ同じ。篤胤云。此轉同の條て卯本殊ふ誤りふ〳〵ふ至るすでを。延言の條ふ錯出せる所ふり。○或て約免。或て轉て。此て殊ふ[illegible]しふ闇記せ[illegible]しふるも有て。万葉ふ。比流波志美良爾と云は。書てそ万万爾ち少言物るを。曾乃を約物で曾とるふ。其曾を志ふ。

轉し通はし。万々ち約て方ふ物を。美ふ轉し通はし。良も方も通すバ。右の万々の言ふこ免こて。爾て辞ふて本ち如し。篤胤云。此説用ひ難し。然るは志美良は。一巻ふ。山乎茂。九巻ふ茂立。十一巻ふ。垣も繁森ふど有るふ同く。志美。志牟。志米。志麻牟と活く言ふて繁き由物るが。下の良て[illegible]ふ。○夜添物る助辞ふて。委くて佐行篇の第六章ふ云へり。は須我良爾と云は。夜ハ佐奈我良爾ふて。此佐て。志加の約物るを。須ふ轉じ通てし。奈は須奈ち約免佐て物る故ふ。其佐ふ須て志免こるこそ。上の良をち免しふ同じ。良爾て本ち如し。然れで是も曾乃万くて少言ふ物ふ。言便ふよりて。志美良とも須我良とを云へるを。篤胤云。此説も用ひがる美良ち良と同く添物る辞ふり。須我は須藝。須則。須碁志。須碁佐牟ふど活きて。過字の義ふり。然物バ須我良て過らと

云が如し。是をもて終夜の字を訓来れり。○志加志奈我良
委くは佐行篇の第一章を見て知るべし。○志加志奈我良
てふ言を。一度切くに免て志加須我といひ。二度約めて佐須
我と云へり。其一度約めては志加て本は如くふて。此の如くふ
べき云ふ意なり。次の志奈を約まば。佐べきなる故須ふ轉せり。我
は我良より約まれる我なり。仍て志加須我といふ。二度約るは。志
加を約まば佐とふる。須我ハ奈我良なるに依て右と同じ。か
約め通てまる本を心得ぬ人。さればてふ言ふ。流石の字を
何ていふ意得むとなる。遠迂遠なり。先ちまづは。ちうしふが
らてふ意なり。べきを知らば。何のあと矛をか用ひむ。其言ハ物
をかくせむと思へども。ちうしふがら然てなし難しなれど
思ふ時ういひて。人皆心得ぬ。是を流石と書くて。流ふ石
ありて。一方に行がる孔に譬へしものふて。是もとさればが
て。志加志奈我良てふ言の畧なるを知らぬ俗意より起れ
まこと此言を解く通を知らじ。何のから字をう用ひむ。何の譬へ

を借るべき。○篤胤云。志加志奈我良て。作然ふて。下の志
は里と云も同く意なり。志加須我は然ばうて。其ばうて
人も知ばうるど云ふ。ふて添詞なり。志加志奈我良
とて元より別なり。然なれど此説も従ひ難し。然れど佐須我
は。志加須我の約りてふ説い違てば。委
くハ佐行篇は第一章を見て知るべし。○言は下ふ須良と
いふ辞て。曾乃万々にいふ事なるを。曾乃万々一言の上下
を約まば左べきなる故。須ふ轉じ通てせて須といひ。次は万
は良ふ通ひて須良とふなる。上は夜は須我良ふ合せ見よ。
篤胤云。此説も従ひ難し。須良て尚ふて。其が上ふかもこれ
と云ふ意ふて。曾乃万々と云ふとは。言のもと甚し違へで。か
まる。委くて佐行篇の第かく其言は本は尋ねて。後より思ひ
九章を見て知べし。
当る時は。ひ切ふしけまと。都て打いづるが。自切ふら此五
十聯の音ふりふふふぞ有ば。既ふも云へば如く。天地のいは

そむる言は国の妙なる也と何ぞ。此訂正のさまと・印本と合せ見て知るべし。上件は考説。圏點をもて別ち著さば〻章〻と侈て二十六事なる中ふ。十事ばかりは動もすれば説ふるが。其餘て皆その下ふ次〻論ふ如く。今しも從ひ難く思ふ説等ふる限就て。亦茲ふ取都て論ふべき事ら有り。其は宇斯は文ふ。約言は事ふ。波字を約言ば布と為る云〻。延言の事ふは。を延て良久といふ云々。略言は事ふ。年佐斯毛は毛を略て云〻。轉同通のもとふ。方と武を轉じ通はし云々など書れ。まゝ或は約言はその言長くそて。云ばかけ難き時ふ約めいひ。延言は。言短くそて。其言ばいでは悪き時く延て云ふども云れ

さるて。人は心と殊更ふ延約略き。轉し同らし思ふ任りせし如く聞えて何ふり。本考の言ばりひ。凡て如此きのみは非文。宇斯は著書く為同し趣ふるを学びて。世の学者〻ちの。然れど此は宇斯のもくて無く。其常云ふ所も是ふ同じ。いひ様を誤られしまて。其は初免ふ舉こは文り。此言語なしも。天地の父母は教ふて云ひ。今も天地の云そむる言は国の妙ふる為て。と云ふるゝ。謂ゆる言霊は幸の自然ふり。と云意為はも以て知べし。柳言語は上り。延さる言何て。約て〻る言何り。略て〻る言何り。轉り同て通へは言あり。其延るも約るも。略ふはも轉通ふも。人は才覺ふそる事ふは非文。実を天地の父母は云そむる惟神の道ふり。そは此東

国あさるとふて。何といふこと。と云ひ。銭の一貫をいつゝんぞと云ふぐひ其いふ徒がら誰も。といふ。と云ふべき事もくるとんのくるを約て。このんぞ云ふべき事をも知りて。ちゝ云ふふくと非ず。それ自然ふして。然云ふてもて知べきふり。然れど此等れ名目を。れ言。却ぐ免言ばど云てはは違へて。延言はのびごと。約言はおまるおぞ。略言ばくはうてびぞ。轉通言てう却て通ふ言ばど云はでく。道理うばくと。其そのゐ言却ぐ免言ふど延ゐ約めさる事とふまでふり。此はゐぐ名目れくふも。抑こ非ど。文て其事を云ふてもふ。意ちらび有べき事ふり。れ語意考の始くふ。然る誤言も交れる由は。此宇斯。古学創草の第二世て出て。其頃いまゝ古語れ延約と云ふ事をぐふ。露も え知らぬ世人らを。宇豆ばい思ふ懇切のはは。彼

荷田大人よて兼られゐは古説を。ひそて寶とせず。疾く容易く佗ふも示し傳へむと。此書を草稿せられ。未精撰ふり竟ず。世て傳ハてし故て。然る誤言れ交まはふて。此く既ぐ五十音辨誤は。師の記されしる語意といへる書は。その身はてられふ際て。且くそはし置れ却るかて。猶考へ改められるゐきを。然る事もふき侭ふれど。思ひ誤られしる事も多てと云へるが如し。宇斯の在てし当時。ふも古言れ處分を知ざりし事。はゝ翁れ其を嘆ず思ばれゐは趣も。上の万葉一ふは。家告閉云くの詞を釋て。古を以て延言約言れ有こそを知ゐし。と書れし一語を以て

も知るぢきれて。

○古言學由来第十

言霊は神の幸はふわれの皇国は。古の訶語は道を学はしと
はるふは。舊き辞書ふ據らずして有べからば。古へは辞書等は
いと多かりしと聞ゆるが中ふかれ勅語の舊辞といふ物
ぞ。最も尊く正しう御座く思ひ奉らる。然るふ今その書
有らざれば。知ぼうらげるが如くふれども。元明天皇は和
銅四年ふ。太安麻呂朝臣ふ勅して。古事記を撰ばーめ給へ
るは。天武天皇は稗田阿礼ふ誦習はーめ給へりし。謂ゆる
勅語の舊辞を以て錄さし免給ふる由ふれば。此事委くふ古史徵の開
題記ふいへり。古事記ふる古語は。悉く勅語の舊辞ふる事いふも
更なり。此ふて日本紀。万葉集を始め。古書どもふ記し傳い

まゆ古語も。皆舊辞書ふ依りて記されさるふ座られ
ば。今し言語の道を学ばむとは古典ふ據らずして有べから
ず。然ていれど。書籍ふは記し傳いらず。古より詞ふはみ唱へ
来しも多ふるべきまで。古書ふ例ふしとて強ふ捨べき事
ふも非ずかし。斯て御世ふるはふく。世の中は事業ふげく
其称呼も多く成ぬるふ就ては。古へふはき詞も。多く出来べ
き理なり。然る上ふ世間儒學佛學の盛なりし頃は。万古へ
ふよゆ事を思ふず。言語の道も濫ずはーめ記事は有るは。
甚も慨き事なりなり。爾ふ村上天皇の御世頃ふ。源順朝臣。
延長第四公主勤子内親王は敕旨を奉て。舊辞書どもを

集め。国史万葉集などに載せる古語をも拾ひ。猶博く諸書に考證して。倭名類聚鈔を著されしなり。最も愛され功績りて。古へを学ばむ人。誰らは古の書に頼らざるべき。其はそれ自序に見えたる如し。當時そでも和名を屑と為ざりし故に。其弊を揉むとりて。輕嶋が大御代に成りひ。彼五十聯音図を亀鑑と為し。古假字格を正されし書なれば。此抄の事も上に引出て論じ。そこ古史徴の開顕記も記せれど。おのれ委くそ云ふべ。いかばかり其後の歌人等。おの書に然しも心を用ふる事なく。いねえ忘なをば差別をさだに得知らで。弥々益々謬て来ふるはて。弥まれまれ概さく憤ろ〜記事ありりり。然るに此和名鈔の有し

よりて二百四五十年ばかり。後鳥羽天皇が御世に。京極中納言定家卿。古典の規格に據こと無くそして。一家の假字用格を定め給へり。謂ゆる行阿假名文字遣と云書。やがて其を増補せる物にて類字假名遣といふ書は。其をはじ増益せし物なり。行阿假字遣を。今は定家假字遣と号けて板本にあり。乃行阿の序に。京極中納言。家集拾遺愚草の清書を祖父河内前司親行に訛へ申されける時親行申て云。をお。えゑへ。いゐひ等の文字の邑通ひ。はは誤あるに依りて。其字の見て記難き事これ有り。是次をもて。後学がためにに定め置るべき由黄門に申に所に。我も亦日来よりより思ひ事なり。いらで所存の分。書出して進ぜ申べき由仰られける間大概ばかりに如く注進ぬ所に。申に所悉く其理相叶へるとて。乃合点せられ畢ぬ然れど文字遣は定むること。親行が抄これ濫觴也とて。行阿の増加せる由を記し。殘る所の詞等そ是に准據をべしと云ひ。類字假名遣と。伊勢が荒木田氏なる人の。寛文中

ふ著せる物ゝて。其自序ふ。それ二人九秘抄て。河内前司親行朝臣述作有しふ。同朔の定家卿御合躰のもれとぞ。仍かくゝ号いろ〳〵りし。然てあれど世以て定家ゝ假名遣と云ひらはせり。云くゝて。其増益せる由を記せて。七巻ふて都て。定家假名遣の十倍も有べし。林春斎翁ゝ漢文の跋あり。契冲の和字正濫抄て。全是等ゝ書どもの無稽ふかゝ濫ふはゝ正し誨ゑゝふは舉ふて有りる。其は自序中ゝ。有音相似易濫者。中葉以來。学識俱降日ゝ不致意。遂則匪翅混以為遠於等。迄于四位寄椎逢寄藍木居寄戀縱令有爺正之手。典據不明訛謬尚繁。余介之懐久矣。因繙曩編。足可證粗辨樗栲以便流俗。味檢的據者。姑闕不強勤為五巻云ゝと云へるゝて知べし。ふは其假字の総論ふ。行阿假名遣の序を引て。其混乱多き事を論じ。今撰ぶ所て。次ゝ。国史及び古事記。万葉集。新撰万葉集。古語拾遺。延喜式。和名抄のゆぐひ。古今集等。及び諸家集までふ。假名ふ證とゝ以ゆき事あれば。見及ぶゝ隨ひて。引て是を證ゝ云ゝと云へて。是ぞ。ゝゝが古学の起れる山口ゝ。けて此書ゝ世ふ出ゝはゝて。元禄六年といふ年ゝゝゝしゝ。其頃江戸ふ橘成貞といふ者ゝゝりて。同く八年ゝゝ云年ふ。和字用例書といふ物を著して。其總論ふ。正濫ふも假字ゝ總論ゝ舉て。畢竟は假字遣の法。往昔未定ゝら更。国史。万葉。古事記。古語拾遺。延喜式。和名抄。古今集。其外家々ゝ集。をたえ。等乱ゝて。假名ゝ證據とハ定ゝ難し。右の書を證據とそゝ時ゝ。假名遣の法はゝきゝて。何様ふ書ても苦からぬふ成ゝし。假名ゝ法ゝ。平上去入ゝ四色ふ從ひて定まりぬと云へて。故爰ふ契冲ゝ和字正濫要略を著し

て。其非を辨ずこと。そは其要畧の奥ふ。此書と密乗沙門契はある古書を引證して哥道は便とに。然るふ武江の住橘成貞といへる人。和字通例書八巻を著して。新古は假字をおじ。正濫を誹謗せること多し。けるふよりて。師古書ふより書べき旨を。此書ふ具り述給ひ。正濫ふも添書し給へ。又き。凡て古人の定め置りは假字を違へて。漫りに俗り従ふ浅ゝらざる事。是書の中ふ見えさるゞ如し。宝永己丑正月。洛東隠士今井似閑とあるふて知べし。其初発ふ。假字遣ひて。俗ふもわさるる事ゝゝ。正ちくは和歌をそて遊ぶ人の事ゝり。是ふよりて。今歌書ふ用ふる言ゝ中ふ。人れ錯ずねを措ずて。或て昔より誤り。或は今人の惑ひ易きを擇りて。和字正濫要略と名く。古書を引ずて證とるて。私ふ切を顕せり。昔明魏法師と云人は。假名文字遣を破ずて。いねたをえ。ちれ類。これ一

切ふ書べしを申されしは由。ある物ふ云ふり。鐵亂云。明魏法師と。藤原長親卿の僧名ふり。そは其著されさる倭片假字反切義解の奥書ふ花山散人明魏。字耕雲。自作和哥口傳則應永年中出家住山洲花頂山馬。續作者部類日。凡僧明魏花山院流尹大納言師賢卿孫權中納言家賢卿子。名長親。南朝任權大納言。新續古今集。亦新葉集載右大將長親詠歌有數首云。と見え。耕雲和哥口傳の奥書ふ。此一巻者。南禪寺栖院耕雲魏公上人所述而。和歌之道深切著明者也。耕雲南朝權大納言右大將藤原長親卿法名号明魏。又耕雲と見ゆ。源氏物語の注り。ふ鑑まゝ仙源抄ふど云物あり。其哥集を耕雲千首と称ふ。斯て假名文字遣を破れる説。その仙源抄の自跋ふ見えさり。其大意。定家卿の假字ゝうひを非とし。潢字ゝい四色を別ちて。同文字も音ふよりて心も変れて。和字聚りて心を顕を物ふり。無きと。和字く一字ふ心ふし。文字遣ひの豫て定絶たき。は古ふよて色のさるゝし。或く別の色を同音ふ用さるゝ。此以呂波四十七字は内ふ同書あるれを。ちれ。ねたをえ。ちれ外ふ。はひふへほをわるうえを。と誦ひて。詞の字は訓ふ切外て。遨ふ文字ふり。總て上去の三色は讀ずきふて是りて和字ふ文字遣ひの豫て定絶たき

難き事を知りぬ。定家の定めさる所四色に叶ふと更に云ふ。一字は義かりまば。其文字そ訓に叶ふと云ひがたし。音も非ぞ義にも非ず。何れの篇に初きて定めあるとう覚束かし。然れども俄に是初ひえを改むべきに非ず。よりて此一帖にて文字遣をはしらせど。音に通ぜむ者て自初ら此心を辨ず知まとるりと有ふて知べし。新勅撰集に同じ文字のき歌。「逢こそよ今はかぎりのあびかれや。行さきを知らでむ初ぞもえる。」えをを混せで。此歌同じ文字ある歌かるぼし。はも古今集に。「世のうきを見えぬ山ぢへ入むるは」と云ふ。同じ文字に歌とん。えとへを音便おかじ。書違へあらで不具かる事も出来べし。億計王。弘計王。は兄弟にてはし坐ん。億計王に仁賢天皇と申し。弘計王に顕宗天皇かて。古事記には。意祁王。袁祁王と書れり。億

意は共にた。弘袁に共にをかて。億に大の義弘て小にる彼し。計て何の義といふ事に知らば。そしたを混せば。此御中に初まる御兄。に初れ御弟と別初こと能ざるなし。黄口先立ちて飛べば。群雀ちがひ紀綱ふかしと。清盲進て導かば。衆盲迷ひ紀坎に初。明魏て目ちひの道ちがへるに異ふら文。篤胤云。語意考に。古き書に。大和に京に出来しふて。其音も従ひて解ちらば。有べらぬ事多にて。譬へば掛まくも畏き。意計。弘計のみにて。御兄弟にて。同じ大殿まれはしく坐しに。意と弘にこそ。はしくくいふ。感はしらむ。然らで御名にかくし申し奉るべきや。胡乱ふく分れし物かりに。別れで五十聯。音は中の袁。於衣恵。以為の音も義も明らかに別にして。かく有らでて。是国の言を成さばるが故に。相似るをも並べ載せしにより。且右れ御名を分けに意て平色にて於保の畧き。弘は去色にて小れ意に。平色にて於保の畧き。弘は去色にて小れ意に。大別のみこ。小別のみこ。ちふ事にて乃御兄を大。御弟

をかと申分け奉れて。然るを吉野の明魏とう云人。假字を破るし事なるし古を紹知らぬ私ごとかり。唯古言て。古き書の假字を。愼み守り隨ひて。意をも敢くかに。年をふば。えふらぬ味も出来べし。打思ふとは別ふる物ぞと云はしも同じ意かは。はゝ近頃の人。ふの事て拙やく知ゆゞ。ちひて眞名は四色ふよる色しと云ひり。是は謂ふ紀事ふり。五十音は自然の音ふ見ば。神世て更ふも云ず。人世とふりても。面〻ふ自拙ふら知りてあ故云ひ兒。其後ま文字わゝて。和語の義ふ隨ひて。伊為等は音をも用ひけ。眞名をも彼此と配當せるふて。譬へで大の字は假字を。遠くとも。遠保遠於とも。於く。於遠とを書さらで。古ふ隨ひて然こそ書べきり。於保とのを書る。其故て知ふ拙ども。昔ふ隨ひて書来れて。神武天皇は御哥ふ。於貴異之とあるを。古事記ふは於斐之とかり。日本紀の自注ふは。大石と有ひで。古ふよはとひを通へるふり。万拙の書やう此ふ准ふ兒し。おは

拙と云ひを拙て平色。たゐ山と云ふときは上色。おゐ野と云ひきは去色ふて。去とてた字拙ふ有て。を書ことふし。伯母をゝと云ふは上声。小女をを兒と云ふは去色。是はゝ色ふよりて。拙れを替る事ふし。いね。えゑも是ふ準ふ兒し。此の如く。三色は本はゝ有て。入色て和語ふ兒てふし。篤胤云。語意考ふ。昭の入る国て。ゐ音もて云ひ。此国て言を專として。音は次とに。そを何と云ふ。わが国ふ生ふい。兒あ一ち音を出せるより。幾でくも經ぞして言をきい得。二タとせ計りの程ふをの云めて。然て其言を。国所の万ふく習ひて。後ふ其地の音をかせり。故音は言よて未とひるふり。是ぞ此言ち国れ云るし也ふる。然るを今れ世人。ふら字の音をかまくふ聞かふ初て。其をひて。あいの言をも音をも知ひとひる迄ば。否らぬ事と成ぬ。是国上つ代ひ元よりふて。彼ふら国の字を借りて。ものを書ふる時と成りても。其字の音ふ拘て。ふらぬ事て。古事記ふ。字比地迩上神次妹須比地迩去神と有り

て始めて上声を注し次て去声を注し又れど書る字をは
野ふせざり。まさ阿那迩夜志愛上袁登古ちふ袁隆古の袁
て去声なるまゝ上声ふ唱ふれども字て別ふせる。
此外ふ言便ふよりて音の異ふふるが多ゝれど本の訓を注せし字まる常云ふ
假字を替ふる事ふ上ば紀のどの言ふ以てを思ひ出れ譬へば加茂も平声也万も平声ふ
て然るふ加茂山といふ時は去声ふ唱ふれど字記違ざる
ゞ如しまさ万葉ふ載さる東歌て。うか東音ふて訓出せし
を其ゝける假字は京哥ふかく違ふ事ふし他国ふても
下字の音と連声て別ふれど音ふ守りて字て替ざりと見
ゆるを唯その一字の音を守りて字の假字を誤正そく
る人あるて論ふふも足ず。と云れさふも同意ふて。
假字ば混ふゝは。五十音ば中ふ。あや。わ三行の内を出ず。以
呂波ゝは。此中ふ伊衣字の三音を省きて。残る十二字の内。
以為。江恵。袁於の三對六字。これ用ひ別ゐき字ふり。其外。は。
ひ。ふ。へ。ほば中ふあて。わ。い。う。え。を。と聞ゆは音便まさ障

泥あふて。葵あふひ等ば。ふ。のを。ば如く聞え。生うゆれ。埋う
ゆれ等のうれむ。ゆ混ゆ等。そ。し心を切くれば易
ゆふりと云ふ。皆理さる説等ふて。要畧ふ此文の末ま字を反ば。二字て反を
上を切字といひ下を韵字といふ下の韵字て平上去入
て定まれと和語ふて書と死其て用ふし上の字ふて。いね
えを。おを等を分ふり云ふと謂へれど此て師ば字音假
字用格ふ假字て反切みて分ふり事ふ非ず契冲て。かゞら
ての事を考へ誤まるゐき人ゝは非さるを是ハ深く心な
用ひ更して唯下てさりの理を以て。ゆと定めさる説と見
えて其證例ふ挙ゆふ字ば反切そでふ其假字ふ合ゆふし
て其餘をや強て反切を以て分りむとふらむ韵字ふを
ゐし韵字として下の字ば云ふ唯音の三行は韵字て分ち
ゐ所由は無ふしの非ず。と云れさる如く非説ふり。
て上件ば説等。みる五十音ば假字ふ就ての説ゐる中ふ。か
ば和字用例書の説て。其とは云ふど。全く明魏法師の。平上

去れ三色ふよりて。假字を定むるとふ説ふ創意せる物ふて。爰ふ契冲疾く其創意をくみ知りて。要略ふ。ま門明魏法師の説を破り。然して近頃の人。うりの事は杳やく知ぬがとて。用例書の非を辨じ。ころりて。然るふ其明魏の説。まゝ根據とる所あて。然るは其反切義解より自序ふ。天平勝寶年中。古亟相吉備眞備公。取通用四十五字。省偏旁點畫。作片假字。抑四十字音。鄕音。反阿伊宇江子五字。此乃天地自然之倭語焉。是故竪列五字。横列十字。加入同音五字。為五十字。世俗傳称之。云吉備大臣。倭庁假字反切。有其口訣矣。然後弘仁天長年中。釈空海造四十七字。伊呂波。四十五字。增補於韋二字。以

便于女童。其體則草書也。于學和歌。楽音律。其餘力竊注己意。名曰倭行假字反切義解。聊述由緒。冠假字首云爾と。此

今の考説ふ要ある。文のみを。甚く約めて引出さり。委くは本書を見を。然て今挙る文の取緒こる意と。吉備眞備公。世ふ通用ける眞假字四十五字て。偏旁点畫を省きて。片假字と作せるふ。其四十五字は中ふ。アイウエオの五字を除き て四十字は。長く引て呼べど。其鄕音こふ阿伊宇江子の五声ま反る。是故ふ竪ふ。同音五字を列ふ。横ふ同韵十字ま列ふて。音図ふ作らむとする。五字足らず。是を以てイウエオイの同音五字を加入して。五十字とれし。始めて音図を為さるを。世俗ふ傳えて。吉備公の倭庁假字反切と云ふ。即其口訣あて。然て後ふ釈空海はいろは四十七字を作れる時ふ。其音図のワ行のヲを於ふ改免ヤ行のイ韋ふ改め然し ていろは假字を作れて。今それ和哥音律まるしむ餘力ま其意を注をと云るふり。注として乃謂もる義解ふて。片假字の傍ふ。其本字を書添さるを云ふ。其本字當り難きもあて。ほゝ此外ふ假字反切音義。假字音義方位。伊呂波字畫解ふど云る條こあるも。明魏の所為ふて誤あて。今の要ふも非

ざ行は濁音。都べて抄さぶ。かくて其吉備公は音図。及び其口訣のさま斯の如し。○今按ずるに。

○假字反切口訣

上父字行。堅下母字行。横其隅生子字。

例 伊上父和下母反阿隅子

亦 也上父字下母反勇隅子

横行歸父字。竪行歸母字。其歸生子字。

例 阿上父和下母反阿歸子

亦 也上父勇下母反勇歸子

○□内五字序所謂同音五字是也。

改乎伊作於韋者。空海所為也。

此反切の口訣を。上に擧こる和名抄の音図は字切と。其文こそ異なれ。全同じ。説ふて。今は誰も知る如くなれど。殊に論ふべき事も無れど。是五十音図を吉備公は作と云ひ。後に空海のヲ。イを改めて。オ平と為こりと謂ふは。疑ふく世俗の妄傳ふて。此こ明魏より前に。和名抄をも知ぬ。嗚呼は歌人ふどの。少か音律を楽めるが。古言は竪位の。アイウエオ行る由を僅ふ聞ぎ。ふり。かの管絃音義ふ。乎を阿行ふ置こるを。生狡意は取用ひて。此図は作行るふ。元

ア	イ	ウ	エ	オ	ヲ	ワ	イ	ウ	エ	ヲ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ						
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ						
タ	チ	ツ	テ	ト						
ラ	リ	ル	レ	ロ						
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ						
マ	ミ	ム	メ	モ						
カ	キ	ク	ケ	コ						
サ	シ	ス	セ	ソ						

とて音韻の本義を知らず。喉音三行中に十音を。同音重復と心得さる故なり。此音図を作るに。同音五字の加入とは云るふり。豈に是れ同音のみならむ哉も。実ふは阿行にイウエオは止喉音和行にワヰウエヲふ。て。都て発声ふを帯び。夜行にを帯て発声ふイ。現帯びて。其イエ実にはイイエと云べく。二行共ふ拗音ふるが。其呼法音義各々差別ある事ふり委くハ第五條。然るふ此を吉備喉音三行論の所ふ謂ふを見て知べし。

公の作と為さるて。今用ゐる片假字を。舊く彼公に作と云ふ説あるなり。如此誣しるふり。吉備公ふ喉音三行の差別を知らぬ人ふらむや。然るに此公ばかも天平勝寶に頃。世ふ在し給へるが。元より多才に儒者ふて。渡唐留学二十年計ふして。歇まで彼邦の韻学をも学び得て帰朝せられ。

天皇に漢籍を読み給ふ。御師と為し給ひしふどの達学ふるふ。此頃殊ふ音韻の学びに盛ふそし御世ふるを。此公いうで其道ふかく拙うらむ。深く當時の趣を想ふるきふて。凡て学びと云ふて。元より知ざる事を真似ぶ。或ハ何の道ふまれ衰へさる時に。そを再興をるよりと云ふ事ふるが。皇国元より。音韻言語の道に学ふ且許り正うりし事。天平五年ふ奉ける出雲風土記ふ。郡郷に名字を改免給へ事を記して。神亀三年改字。其と謂へる。持志。恵曇。伊晨玖潭。塩冶。斐伊ふどの類ある文字ふり。盈く音韻の道に自然り合へるを以て。況て此天平七年ふ。吉備公帰朝の時に。彼土の衰晋卿と云人を伴ひ来れるふ。此人のこと。空海の性霊集ふ。調両京之音韻。改三呉之訛響。吐唐言。発揮嬰学之耳目。といひ。続紀ふ此人に傳に。学得文選爾雅等音。為大学音博士。あり。吉備公の事を。三善清行朝臣に異見封事ふ。恢弘道藝。親自傳受。即令学生四百人習五経。三史。明法。筭術。音韻。籀篆等六道と有ふて。音韻の道ふも。彰れて在し事を知べし。於乎の所属をも知らず。ヤ行ふ。ワ。をおき。彼

十音を重復と思へる類、ひの韵学ふて、其道を親自傳授る
る者き物うは亦是らの文等ふて、此頃殊る音韵学の盛れ
をし趣なも扨まゝ釋空海はいろは歌を作る時ふ。此音図
知べきふり。
は和行ぬる。ヲ は改めて オ を用し。夜行の イ は改めて ヰ と
為ゝを謂ふも。亦元よりを妄説ふて。空海あふ然る愚僧ふ
らむや。法師ぬがらも素より奇才は性ふ。渡唐留学の
年久ろく。漢学ふ頗ぶる長りて詩文を能し。ふ故彼悉曇は
学は。其謂ゆる密宗は専ゝ仏道ふて。雅言ふ阿字本不生。や
うて此音韵は学ぬるを。爭でう於衰は所属を錯て。夜行ふ
エ は在るを改め更。却て其イ は平ふ改むる蒙闇の所為
ぬらむ。此く彼以呂波歌を。空海の作と謂ふ。此図を其歌

ふ校を ぬ ぞ 平オ は二字足ざ故ふ。そ は補へる後人の妄
言ゆるあと疑ふし。悉曇章の学ふて、喉音三行の差別は
神字日文傳ふも。其要領を云るまて知ぬし。空海は世頃て、
学者みふ悉曇の義を心得ふる時ふ非ねど。空海法師は
其宗ふ通ぐ諦を知りてぞ有ぬる。其て喉音三行の声を知こ
と諦ぬらでは。梵字を以て梵語を書こと能くぎる事ふる
を。空海の梵書て更ふり。彼いろは哥の假字ぬるひの正し
紀なも思ひ合せて。此学ふ拙らぬ事ふ知ぬきふり。斯て
此法師はいろは哥を作ぬてと
云ふ事の由て。日文傳ふ謂へて。ちて此吉備大臣は音図と
云そは。斯の如き妄誕の物ふる は。明魏のいうふ思ひ惑は
通在ぬる。此をしも甚く信じて其義解を作て。ふ故是より
思ひ立し事と見えて。古は假字ぬうひを破りて。彼いね。
をたえ忘て同音ふて。差別ふしと謂ふ。憶説なぞ述られけ

ほ。此事いとやく契沖法師と縣居宇斯の辨説あるを上ふ出せるが如し。此ふくめぐ其根據せる由來を云ふかり門人云此憶説ふくりて按ふ明魏元より此憶説あるを推立むを為る上の音図を自ら作る吉備公ふ記けらるるふく非じらと云へる旁痛き事ちて右反切義解ふく有るとど然も云はど云ひもけどし

れ尾る花山耕雲散人明魏愚草とよく記して年月を無れど應永年中ふ出家して山城の花頂山ふ住けと云ふ其年頃ふ作らるる物ふる斯て其奥ふ右一卷捜求舊庫反故中而手錄以帰庵倩見開秘密之奥藏示攉實之正軌而有益于後学功不少矣云云元和庚申歳阿闍梨良正とかり庚申は乃元和六年といふ歳ふて應永の末年より二百年ふは足らず此頃ふか今有る悉曇は横位ふ因かる音図の無て

し事あの密宗阿闍梨ふ。あを珍重せる趣ふて知るし。其て今有る音図を常ふ見ふるて有るましらば右の偽図を如此感まじき謂ふれどかるる此次ふいま一ふ奥書ある其て既ふ上の分注ふ引ふりき然ふ其後いふの程ふ何人の所為ふるる右音図れ横位をば悉曇ふよるて。アカサタナハマヤラワふ次第ふ作る改ふる其図の物ふ見えるばて寛永五年ふ彫ふる小板の韻鏡れ首ふ出せばを初ふる其音図ふぎる記るを如し此ふ悉曇の竪横次第ハ知ふれど。オヲ。エヱ。イヰを用ひて。ヰ字ふ紀故る二段の合拗音ふ假字違ひ。エ字ふき故ふ四段の開拗音假字違へる是より前享祿元年

五音五位之次第

ワ イヤ ウワ	ラ リヤ ルワ	ヤ イヤ エワ	マ シヤ ムワ	ハ ヒヤ フワ	ナ ニヤ ヌワ	タ チヤ ツワ	サ シヤ スワ	カ キヤ クワ	ア イヤ ウワ
イ イ、 ウイ	リ リイ ルイ	イ イ、 エイ	ミ ミイ ムイ	ヒ ヒイ フイ	ニ ニイ ヌイ	チ チイ ツイ	シ シイ スイ	キ キイ クイ	イ イ、 ウイ
ウ ウイ、 ウウ	ル リユ ルウ	ユ イユ ユウ	ム ミユ ムウ	ヲ ヒユ フウ	ヌ ニユ ヌウ	ツ チユ ツウ	ス シユ スウ	ク キユ クウ	ウ イユ ウウ
エ イエ ウエ	レ リエ ルエ	エ イエ エエ	メ ミエ メエ	ヘ ヒエ フエ	ネ ニエ ヌエ	テ チエ ツエ	セ シエ スエ	ケ キエ クエ	エ イエ ウエ
ヲ イヨ ウヲ	ワ リヨ ルヲ	ヨ イヨ ユヲ	モ ミヨ ムヲ	ホ ヒヨ フヲ	ノ ニヨ ヌヲ	ト チヨ ツヲ	ソ シヨ スヲ	コ キヨ クヲ	ヨ イヨ ウヲ

小始めて板小彫さる韻鏡小は。此音図有事小し。享祿元年よ。寛永五年まで。百一年小まで。是問ふる人の所為と見えこと。彼明魏は音図の奥書ふる。元和庚申年より。寛永五年小至りて九年ふり。享祿板の韻鏡く、宋板を翻刻せる珍本小。其尾小韵鏡之書行於本邦久而未有刊者。故轉写之訛烏而焉馬而馬覧者多困彼此不一。泉南宗仲論師偶訪諸本善不善者。且從且改因命工鋟板期其歸一以便於覧者。旦曰非敢擴之天下聊備家訓而已。於戲今日家書乃天下書也。学者思旃享祿戊子孟冬初一日正三位侍從臣清原朝臣宣賢とあり。此て岡本保孝主の藏本を借覧せるふり。是よ。後小。寛永十八年。明暦二年。寛文二年は板本共小大本小ふる。其首小添へふる音図。開合の拗音も。右ふ一字も異小ふ。其後元祿六年小。校正韻鏡て彫さる大本小。始めて平上去入字を出せ小。其図まゝ次小舉げ如く。イ平。エ上。オヲの所属は違へし故ふ。二段四段の拗音開合みか違ひ。五段は合拗音も違ふ。然るを世ふ其非を知る人小く。傳はて来ふ小て。蓋そは其素本ども小附ふる図の当る未書どもの多ふ小非ず。然る小其韵学先生等は作此頃まて。韵鏡学者と聞えしも。ふ小皆其誤図を承ふる図等ふまで。ふ小喉音三行開合の差

五音五位之次第

ワ ウヤ ウワ	ラ リヤ ルワ	ヤ チヤ ヌワ	マ ミヤ ムワ	ハ ヒヤ フワ	ナ ニヤ ヌワ	タ チヤ ツワ	サ シヤ スワ	カ キヤ クワ	ア イヤ ウワ
イ イヰ ウイ	リ リヰ ルイ	井 イヰ ニイ	ミ ミヰ ムイ	ヒ ヒヰ フイ	ニ ニヰ ヌイ	チ チヰ ツイ	シ シヰ スイ	キ キヰ クイ	イ イヰ ウイ
ウ ウイ ウユ	ル リユ ルウ	ユ イユ ユウ	ム ミユ ムウ	フ ヒユ フウ	ヌ ニユ ヌウ	ツ チユ ツウ	ス シユ スウ	ク キユ クウ	ウ ウイ ウユ
エ ウヱ エ	レ リヱ ルエ	ア イヱ ユエ	メ ミヱ ムエ	ヘ ヒヱ フエ	子 ニヱ ヌエ	テ チヱ ツエ	ヌ シヱ スエ	ケ キヱ クエ	エ イヱ ウヱ
オ イヨ ウオ	ロ リヨ ルフ	ヨ イヨ ユオ	モ ミヨ ムオ	ホ ヒヨ フオ	ノ ニヨ ヌオ	ト チヨ ツオ	ソ シヨ スオ	コ キヨ クオ	ヲ イヨ ウオ

別を知ざるべし。かくて契沖師の正濫抄を著せるは。元禄六年といふ歳なり。其音図は横行て。安加左太奈波末也良和ふて。安行を安以宇江遠と著し。加行以下は。悉曇半満の法を用ひて。也行を。也 也切 夜 也以切 ゆ 也宇切 ゑ 也江切 よ 也衰切 遠 和行なり。和 切 ね 和以切 う 和宇切 え 和江切 れ 和衰切 を 和遠切 とや

うふ書て。右の図梵文ふ準へて作れりと云へり。悉曇半満法と云ふこと。委くて印度藏志・神字日文傳などよ記せるを見るべし。此て然れどふ契沖の所為ふし有れば。上の図等ふ比べては。越ふく正しく。悉曇図ふ近けれど。此もふかおをの所属を錯れる事よ心著ざりけり。其は近く悉曇字記よも。阿 伊 歐 奥と有るを。何ふして誤りけむ。訝し紀事ふ。正濫抄一巻ふ。假名の様な初の様を知るし。諸越の韻学と知むと思はば。先邑れ出る曇も。梵字をかく様を習ひさる許りふて。てらく云へれど。梵字を書ことを知りそき事と知侍ら文。天竺の悉ては。此所属を誤まるべき謂ふき事ふはまかく誤りしこと反るもいぶかしい。然れど何れる達人の其手ふ入さる事ふても。物よて非文。此所属を誤りし故ふ。五巻ふるアオワヲを。隅ちがひふ通ふといふ説て。辛く出さそき。然ぞれ此人ふして是過ち有しふ。甚く惜

き事かたがり。但し於袁は所属は正し敢ふど。イ平エエは所属と
已ふ改まりて。正ふ近く成ぬる事は。悉曇ふ據れる故のみ
ふ非ず。大かゝる本朝の古言を攷ふる力ゝ因ふこそ。正
濫抄。同く要略は二書は見て知べし。然るふ仍心たそき倫
て。其正は就ことと能てば。そは彼和字用例書といふ書を著せる人ふど是ふり。其五音五位と
いふ図ふ。假名直拗共通用て。ヲ。オの所属は違へるく更
ふり。元の如くヤ行は井エを置きワ行ふエを置てぞ有り
る。況て一向は韻鏡学者ふ少とは。殊ふ拙ふ時也しうば。是
よりて後。元録九年の板本韻鏡ふも。右は誤図を出し。延享元
年と云年ふ彼沙門文雄ぐ校本の。磨光と名けし韻鏡さへ
ふ。尚未喉音三行の所属。それ開合は得知らで。甚濫ふ

ふ事どもぞ多ふ。其韻鏡の上ふては。喉音三行の差別
は。殊は諦ふる事ふるを。此僧それ諸字の
開合ふ闇く。ふ故其假字をも此ふど仍知ざりし故ふ。開合
の轉うち混じて。イエヲ は のみ用ひて。平エオを用ひざる
まて知べし。実て イエオは開音。平エヲは合音ふるを。然ふ
差別ふき書をし。豈これを韻鏡と云むや。然ればど磨光ふど
て云ふくも非ず。然るふ彼太宰純ぞいひし儒者なりしめ。
此を韻鏡中の精本と心得ふるて。旁痛き事ふり。韻鏡実は
は正保ふて後は板本みふ宜ふらぬ中ふ。磨光と文字ふ開
合の差別ふく。假字を付さばこと殊ふわろし。此事ふふ下
ふも云ふ。ちて此間て。我ぐ縣居宇斯の眞盛ふ古學を世ふ
を見よ。
唱られし年頃ふて。荻生茂卿ぐ弟子ふて。服部元喬と親
ふき友ふて。彼ぐ歌ふ免る時て宇斯ふ語らひ。宇斯の詩を
作れる時て。彼は語ひふど。互ふ隔ふく交はて。彼家ふて。太
宰純まゝ文雄僧ふも。時ゝ出會給へる事も有りて。彼國意

考は。絶ゞ言ふ所きて書あるすじ。文雄と。音韻はこゝその論ふ
及びし事も有りと。橘千蔭ゞ我れ父枝直ふ紀〳〵持て伝由
ふて。已ゞ若きわゞ語と令聞しる事ゝなり。宇斯自筆の詩集。
持て有るふり。元喬と親しかりしは。共ふ老子をめ弘る意
の適ことはる故のりゝ云ふと。然も有るべし。其て元喬つ弘ふ
弟子らふ。道の微妙を知ることは老子ふり。聖人の教といふ
物て。小兒よりたまむまは喰こがさぬ物と云ふゞ如く。道理
れ精微ふるふて非更と云ふるとぞ。此て湯浅元禎ゞ。文會
雜記といふ物よも記せること覚ゆ。まゝ國意考て。純よ示
せる書ゞ云ふも。実ふ然ることゝ。其て彼ゞ撰しる辨道書と
云ふ書の病よ。よく當りて聞もればふり。因ふ云はむ。宇斯
中年よりそて。王羲之ゞ書を好みて。其天朗帖といふを好
み習はれしゞ。彼ゞ東江源鱗といふ書家をそゝ絶て義之よ
習てせ。彼ゞ小野道風の秋萩帖を。二度板よ彫しるゞ。宇斯
の教へて有りしと。此て宇斯の傍ふたきて。万葉考を彫し
免給ひし。井上清風といふ
彫刻師ゞ。若きわゞの事と

音韻開合假字反圖

拗音									
ワ ヰヤ ウヤ	ラ リヤ ルヤ	ヤ イヤ ユヤ	マ ミヤ ムヤ	ハ ヒヤ フヤ	ナ ニヤ ヌヤ	タ チヤ ツヤ	サ シヤ スヤ	カ キヤ クヤ	ア イヤ ウヤ
ヰ ヰイ ウイ	リ リイ ルイ	イ イイ ユイ	ミ ミイ ムイ	ヒ ヒイ フイ	ニ ニイ ヌイ	チ チイ ツイ	シ シイ スイ	キ キイ クイ	イ イイ ウイ
ウ ヰユ ウユ	ル リユ ルユ	ユ イユ ユユ	ム ミユ ムユ	フ ヒユ フユ	ヌ ニユ ヌユ	ツ チユ ツユ	ス シユ スユ	ク キユ クユ	ウ イユ ウユ
ヱ ヰエ ウエ	レ リエ ルエ	エ イエ ユエ	メ ミエ ムエ	ヘ ヒエ フエ	子 ニエ ヌエ	テ チエ ツエ	セ シエ スエ	ケ キエ クエ	エ イエ クエ
オ ヰヨ ウオ	ロ リヨ ルオ	ヨ イヨ ユオ	モ ミヨ ムオ	ホ ヒヨ フオ	ノ ニヨ ヌオ	ト チヨ ツオ	ソ シヨ スオ	コ キヨ クオ	ヲ イヨ ウオ
合	開	合	開	合	開	合	開	合	開
合	開	合	開	合	開	合	開	合	開

て語ゞ〳〵なれり。然れど文雄ゞ韻
學はも。宇斯の義論よ啓發
せる事を有りしゞ。或て彼
正濫抄も。世ふ知ふ〻時也
しるば。其図ても因れりと
見えて。寶暦四年ふ著せる
和字大觀抄りは。其誤を粗
正し改免てぞ有りふ。其音
図かくれ如し。然れどヲ。オ
の所属ふ違へる故り。第

五段の合拗音みな誤れて。但し此と彼文治元年に記せる
菅絃音義に。始めて錯置せるよりて以來六百年ばかりて。世間
ふぼて誤り來る事ふ一有れど。文雄をれこ難むべ紀ろ
も非ず。我が字斯とそは字斯等ちつて。其誤りを承りて。安
永年間まで。ふゐ紀正に至らず。先師鈴屋宇斯に至りて。始
めて其所置の錯りを悟り。字音假字用格を著はし。おを所
屬の辨を作なて。其用格の祕蘊を開示し。天下の音韻言語
れ道を學ぶ者れ眼目ぬぞ開き賜ひ在りる。此と實に安永
四年といふ歳ふりりて。乃宇斯の自序に。時者安永之四年
書竟られしるて。其前年ふることを知ず。然れど其
年正月之十日とあて。
て世に出されしるは。同じ紀五年といふ年ふりりて。

然はふまに同じ年間に。京に富士谷成章といふ人ありて。
其門人に筆記せし紀て。あゆひ抄と云書ぬ著せはる。五十
音図を經緯圖と名けて。阿行ふ於を置き。和行ふ袁を置ふ
て。世に經緯の理を知ら紀人。お經のたもじを和經にわき。
わ經れをもじぬあ經ふ置くは誤ふり。師説にてぬきの辨
あてと記し。其書を板に彫しるて。安永七年といふ年りて。
此人のおや。師の玉勝間に。近きころ京に。藤谷專右衛門成
章と云ふ人有りり。それが作れる
図略ふどいふ書等を驚の見ぬ。其よて前ふもちる人あり
とは。ふの聞しり志ふどいふ。例の今やうれい撫の哥よみふ
らむと。耳ふも立ざてしを。此書どもを見てぞ。知れる人に
ある樣を問しらば。此近きふどふ身まがてぬと聞て。まし
驚られぬ。万葉よりあるむ知ら紀。六運
の辨に云る趣を見るふ。古今集よてれしさまの哥れや

かざし抄　あゆひ抄　六運

うを能く見知る事は大かた近き世のからうたの人あらじとぞ思ふる。ぞ称られし人なりて。其脚結抄ふ。右れ如くは云へども。是よりて前明和四年八月板う彫りかざし抄ふて。舊紀は〜袁祇阿行ふ。於を和行ふむまて。柿頭の詞を説して。是を以てあもひ抄う。右れごと書こは。鈴屋れ説を襲ひ取れる也と論ふ人あり。其ていうど。有む。少後まては有ふまど。期らず師ぞ同按りてしも知ぬうら更。其て少きまれ。是間かく此所属れ古へふ復る後き時の行りあうや有りむ。成章れ子御枝と云るが。北邊随筆といふが来れるを。辨ずして書ふ。亡父云て。経のお。わ經のを祇置さ以て。嚼味を思ひ。まゐもじ餘て反切れよしを思ひ。う拗催馬樂の譜ふどふも。をそとのれ列のもじ祇引色れるふ。子〜と書びして。於こぞれみ書さるふて。始免てこれを定

む。後の人よく見定めよと云へて。此たれ置所ゐが為る事も。まる佗家ふ同説あり。ぞぞ。人の説なば。亡父かく書べきやうふし。猶かの字何まれ説ふども。ゐじ物のはしふ書抜けあきて。今まで世ふ示ちぐれて。亡父が説とて知る人ふきりて。此てかの僧叟が黨れ身を直。然くれる類うて。実も然も有べく聽容抜べき言ふこそ。然祇同じ時世ふして。谷川士清翁とも。山崎垂加の流る祇汲免ふ學者れ中ふ。比倫ふ祇博覽のをふて。我師れ於袁所属れ辨ふも聞知る人なるふ。況て悉曇韵鏡の事をも。大抵ふ心得る人ぞ聞もふを何ふる事ふう。於袁れ所属祇改めず。舊來の誤圖ふ據りて。古語を釋るるしうば。其日本紀通證。まる和訓栞ふどふ不具ふ見ゆる説ども多かて。然て有あるし以来。通證ばうて卓る注書ふく。古訓を集める書の多うる中て。和訓栞ばかり冨る書て有ことふし。是

をもて先師もまた序して。石上振の神杉古きを始め。今世の賤き志拙が利鎌を投げ渡る。眞柴枝の片葉まで。ちこられ山の大峡小峡の繁木が本。畫わけ尋ねて至らぬ隈なく。世に有とし有る言の葉の栞なるも物せられける。とぞ称られける。

けて師は漢字三音考。國〻字音假字用格の二書世に出てけり。天下の學者始めて。音韻の正理を知りて。我ふみ古語を解く者は更なり。悉曇は學者。韻鏡は學者。の蘭学者は勿論。皆皇国の古言古音に徴して。其国〻の聲韻をも。明らめ知る事とのむ成ぬ。其は悉曇の学にて。ばかりに精なるのみにて無く。韻鏡の学にては。太田方ぞうに精しきて無きを。それ皆我が師の説を見しよりて。出藍の説をも起せること。此人〻の著せる。悉曇字記新釋漢吳音図説などを見て知べし。はた蘭学にの柳圃が。蘭学生前父といふ物ありて知られぬ。何に遠しはき有功ならぬや。此等の事ども。故あるて日文傳ま

委く云ふ記。かくて五十音に事況論せる書に。近ごろ種〻有ぬ由なる中に。巳が見し一ツ二ツを論はむに。村田春海が。五十音雜誤といふ物なり。此に其獨見のみと書おそれ。我師の説に本拠なる舉ふて。中に論ひ得しぬ事もれきふは非ぬど。はた却て贅言蛇足なるわざなり。且契冲を始め。宇斯〻ちに。寛なるぼき事も多なるわざ。今に因て其寛を雪ぬがてら。其非説をも雜へ述む。今ハひらし。已春海に始めて遇こを。しは。享和三年と云る年なり。此よりて前に。鈴屋大人そで小身退て給ひしうは。彼が我が師と同じ縣居の弟子にて。當時の老者にも在ければ。益を得る事も有むと思ひ。鈴屋門人なる由を云ひて訪へる也なり。然るに春海。巳が年若きを侮れるうや。宣長に皇国の道といふ事を説くを始め。世人な誑惑とる偽学の徒ふりぞ。甚く誹謗しうりたるで。師弟に間て父子の義あるを。子

ふ其父を謗る聞ける人やゝ有る礼を知ざる人なりこそと思ひて其後は訪て更成り紀其は其書中ふ。

此五十音図。我国ふ神代よりも有ふし物のやうふ云ふ人あはゝ心得ず。然はこゝ何の書ふ出さるゝ訝し紀事ふて。鶯亂云五十音を神代より有来しと云ふを何の書ふ出さるふ訝しとは愚ふり初めふ出せる縣居翁れ此五十縣の音を連ね云ふて日れ入る国ふ習へと云人あるとそ嗚呼ふれ此国の古人詔語はざらむや言語ふて天地の父母れ教ふり故ふらば此五十聯の音も有めて且ふ思ふ人て時代をも思はず已が国れ古事をも知らで他国れ事をふまれまふ聞て云へるふりふ云ふと有るまは見ばや神代の神まゝ人と云へぞも其言語て五十れ音図出更何の禍ふ記せる事の有るを俟む其言語元よりも五十音れ活機ふるが故ふ後ふそ図せる音れ五十あるふり但しふて五十音と云へる詔の故ふ小謂ふ事ふ非ずまゝ接ずバ此て五十音図を云こと云ふは意ふらむり然ては語足ら更ず唯五十音と云ふ五十音とれみ云ふて口よりも出る音の事とふり五十音図と云ふば其音を記せる図の事と有るを然て知らざる

ふも下よりも然り五十音とれみ云へて縣居翁鈴屋翁も直る人の色を云と紀て五十音といひ図ふ文りは必ず五十音図と云へれゝて蓋し宇斯ゝちの文例を俟まても無くはゝし知れゝる文格ふるをや。東麻呂れ記されし物ふそれ家ふ。古紀傳への有しと云れしは。然も有ら免ど。爭ずり上ふ世よりれ傳へふるはき。其て荷田れ家のみふら更。神道を傳ふゝは家ふは。孰の家ふも。此五十音れ傳とりふ物て有るふりて。然れど其て皆後れ世ふ記せし物りて。古紀学ぶ人の為ふ。よりて所と紀し難ふ紀し。鶯亂云東麻呂の記されし物とは何ふらむ。已が見して先年清水濱臣が見せふる荷田翁の自筆ふて縣居翁ふ授りし傳書ふて濱臣て瑞海が弟子ふれむ師ふも見せりむ然る物を見ずゝ左ふ右ふ意る適くばそし事と見えて前ふ引ゝる古言梯の凡例ふ魚彦が此事を云へる所ふ標記して荷田の家ふ五十音の古傳ありと云て信られぬ事ふり加茂翁の語

意も未定の書ふて。従ひ難き事多しと云へる。語意考のかかり精撰からざる事と。於衰の錯置を未考へ知られぬべし。過ちて更かり。其事よりそこなひて。思ひ誤られふる事もふるら有れど。初免て初躰用令助れ活用を示さ迚ある事は。前ふ知る人無そし明説ふることぞ。正ふ其傳の存そし故ふそ。ふ中ふまし誤その説あそ。荷田加茂れ二翁。あふ傳ふふき事を傳ふ有りと称して。其偽そを讐る大人等ふらしや。此て春海自ふら見解せば。古へを能くも知さる頑意よそ。其仰父の義をも思そ更畏くも万世古学の祖と在ん大人等ふ。いあき汚濁を付むとせしふそ。然れど荷田家のみふら更。神道を傳ふる家ふは。孰の家ふも。此五十音れ傳といふ物ありと云ふも。頗ぶる悪意を含める言ふり。已ふ拾て餘の神道家ふ。然ふ古傳の事ふし。今考ふふふ。我が國ふ。此五十音ある由を聞さは事ふし。

ふふ事そ。むかし音博士ふふどの。唐よそ傳へし物と思はる。其て唐れ世ふ始めて。胡僧れ七音といふ事ふ云ひ出しよそ。音韻の學精しく成さそ。其は世ふ韻鏡の學といふ事は。是時よそ起れそ。其ふふ我國の人れ多くかしふふ行て。物學び為ふ拾ふば。然る時よそ傳へしふて。其本て天竺よそ起りし事ふるるし。其て佛經ふ早く出さふふ事ふれど。ふふ。葛胤云。我が国ふ五十音ある事はとて。此五十音図ふる事はと云意ふる事ふし。然らでは其音博士の。唐音を傳へざそし間の皇国人て。みふ無言ふて在そしといふ義と成れどふそ然て五十音図を。韻鏡よ習ひふ事ふて。今の春海が説て。上ふ出せる三音考の説ふ。ふふ拠れそは。誰も彼も同書の。博士を置て字音を正されし事といふ條ふる説を也取合せ。舊板韻鏡の首ふる。宋の張麟之が文よ。有沙門神珙者。是書作於此僧云くとて。同代れ鄭樵ぶ通志略を引しふる。ふ拠りて云ふる事ふる。此て無證の言ふり。其て皇朝よ音博士ふれきて。唐音を正されし當昔ふしこふは。樂曲ふは。七音を用ひしふど。音韻反切の学ふて。ふ拠て其説ふ記事ふて。此学ふ七音の説を立さふる。は南宋の世ふて。韻鏡を。ふはち其頃よ成ふる書ふ傳はそして。鏡倉の時代ふそし事。そでふ論へる如ふれど。此そかれ謂ゆる胡

椒丸吞といふ説ありぞ有ける。此五十音と云ふる物も。天地の自然の道理ふて。物の聲それ是ふ洩ぬ事なし。然れど何もの國の詞ふ為も。延喜の約免も忘ぶべ物ふ於べし。此は我國ふて出來し物ふら祢ど。此をを吾國の詞をも。能く釋き知ふ化ふて。篤胤云。此五十音といふ物も。天地自然の道理ふて云へるて然ふ云へると。そう天地ふ自然ふる物ふる故ふ。我ぶ国ふは殊ふ自然ふて固有せしふて。然れど其を著せる図の。此方ふる彼邦ふる。大抵同ふる侭き事。これ亦自然の事ふる。其図の先後れどを思ひて。強ひて我国ふて出來し物ふらば。彼ふ借さば物ぞ。謂ふて。頑心ふこそ。今吾國ふ學ふる人ふ。我ぶ國を尊むあまふ。異国の事をふくふ取用ふを。口惜し事ふ思ひて。上代ふて有し也ふど強ひて云免て。爭でかしふ事を此方ふ借さうとも。

吾ぶ恥ふと云ふ謂あらむ。とも かくも有ふを有るとし。無ふを無化をして。事を正ふく云むこそ好けれ。心せはく負じ魂ふらむは。僻ふ忘き業ふる侭し。篤胤云。ふて荷田宇斯と。縣居宇斯とふ聞もれども。裡ふ甚く當ふる言ふて。一ふわ〻り然ふ事ふも。其て皇国はしふも。元ふて万国の皇は国を貶しむる意ふて。其て皇国ふ事物の用ふべふ限りて。借用ふるまも国ふし有れど。万国ふ事ふき道理ふ也ふど。ても無く。皆取り用ひ給てむふ。何でふ事ふの類ひ。此方ふ固ふて有ふる況其ふ西洋暦法まふ文字ふどを取用ふ給へるふどて。借用ひ〻りてちし措れて。諸越ふを。師説ふも何ふ如く。人の形を始め。と云ひも然ふる事ふ也ぞ。此方ふも佗国ふも大抵同ふくして。然山川草木鳥獸ふどのけもの。此方ふも佗国ふも大抵同ふくして。然しも異ふらざれど。其を繪ふ畫ふるも。互ふ相似ふる況五十聯音もその如く。皇国ふも。自然ふ固有せふが故ふ。そを図ふ摸せば。大抵同ふ様と成ふるふり。ほ〻有ふを有るとし。無きを無きと為べきは勿論の事ふがら。無ふ物を為ふ有るとし。無きを無きと為ふ。国ふ実ふて僻ふ有ふる心ふより云ふ形れど。其て僻ふ有ふる侭ふらぬを。無き物をふしと云ふて

更ふり。有無の何れぞの判らぬ。或て固より有理し物を
も無をし趣旨云ひ断むとける。春海が倫ふる人等も世う
嗜ふり。そは上ぎ古そ大倭見して見むれ。裡の心て絶国の
奴隷ふて。我が父母の国をし。竺くふ貶しむ所を。見高き事
ふして。同し意に世人らふ。其潔きよしを示せむ為ふれば。
却て甚ふくしや。そは春海が今云へる言等。乃て其醜意
りて。元よりて古へを信ぎる心ふどは。露も無てし男ふ通じ。如
此云ふ裡の意て。荷田縣居二人の宇斯ふ。娥が父羊を攘
めて濡衣きせて。已が潔白ふる由を能ふ能言らむと。構ふ
出ふる醜言ふこそ。其て上りも下ふも論ふ事ともふ。思ひ
合せて辨ふ。

○五十音に阿行ふ乎を置ことは誤ふり。此て本
居宣長が考へ出ふる事ふて。謂いと明ふり。ふは宣長が言
ふ通ふ。

古へ五十音に事に記せし物を見るふ。皆於を阿
行ふ置ふて。ふふ恵を阿行ふたくて云。説も初が言ふて。是
も正しに證あり。下ふ云ふ見るぞし。鶯亂云。岡本保孝ぬし
の言ふ。春海が言ふ。宣

長が言をはふ。と云へるて腹ぐろし。此てかの玉あられ論
を書ふる徒の本居翁の玉霰丸の功能ふりて。其論を書
ふるふ同じと云れき。此は知言と云べし。其て鈴屋のれを
所属の辨を見ざて。しし前ふ。てやく其申を古書ふて見出て。
下ふ記せる如く。書連ねあきて。然て後ふ所属の辨を見ふ
らむりは。宣長が言を俟て。とも云べし。鈴屋に然る辨ふ見
て。始めて驚き。その驚ける眼をもて見し故ふ。和名抄
ふるふ始に。種ふに書ふ。さは所属ふる弥も見出され。然れ
て事でう。宣長が言を俟ぞと云ことを得む。かく腹黒ふる
心を。負じ魂とも。妬心とも謂ふ。但し此て春海のみて非ず。
かの末輩。犬糞学者の如し。凡て五十音は。字ふ記ふき物ふ所を。
著書。大抵かくの如し。況てあれ於乎衣恵ふとの位。違ひある弥以て延約免せば。
誤りいと多うて。初学に人惑ふこ必ず勿。鶯亂云。是まさ語意ふ出され
ふる図ふ。於乎の所属を鎖られふる当ふるて。彼考を
人ふ信ぜし免じと構へし言ふる。五十音て動き易ふ物
と云へるて。五十音図て動ふ易ふ物と云へる意ふ通りれど。
縣居翁の当時まで。例の誤図の餘波ふて。あをの所属の。い

まことに正し敢ざるを故に動き初れると。鈴屋翁の校正ありし後は。其所属をでふ古へふ復せれど。此後万世動く事ふし。然るふ動き易き物と云へるを。此後もふか動くこと有らむと殆み思へるうや。初学の徒。ゆゑ〳〵る愚説う惑ふ事ふうれ。○引聲ふ阿行の五音ふ用ふ事は。阿伊宇衣於の五音は。音母にて。其餘れ四十餘の音。ぞれ聲を引と紀て。皆ふれ母音の五音ふ歸をふあり。此て自然の理ふり。いかし牙國郡の名れ一言ふる紀。文字は二字ふ書さはあて。其は奈良れ朝よりの定免ふて。其一言れ名を二字ふ為せるまて。其引聲れ字紀下ふ加あり。紀伊國。備中國都宇郡。筑前國比伊郡。薩摩國頴娃郡ふどれ類ふは多し。皆阿行の五音れみ用ひも乱れじ。ふて字音の自然ふて。五十音れ上ふ能く叶ゑるふや。はゆる五十音をいふ事。をでふ世ふ取扱ふ事ふて。ふう阿行の五音紀引聲ふ用ひしまても。有ゑし。何をふあゆ此引聲ふ用ひある音を本と云ゆ。阿行の五音を定むべし。鷲嵐云其云奈良の朝よりの定免ふりとて。續紀和銅六年五月の詔ふ。畿内七道諸国郡郷名著好字と見え。延喜民部式ふ。凡諸国部内郡里等名並用二字心取嘉名ふど見えさる御定をいふ。斯て此條の論を。鈴屋翁の字音假字用格。まさ地名字音轉用例ふどふ。委く論せられし説を。抄略めさる言ふて。皆理れさる事れるふ中ふ。はゆる五十音と云ふこと已ふうせる取扱ふ事ふて。ふうの阿行の五音を引起ふ用ひしふて。も有ゑし。と云ふのとは。春海ふ説ふれど。此て贅言ふり。其て是より前ふ。五十音といふ物て。元より皇國ふふる事れるを。悉曇ふたりて立さる物ぞと云ゆる言あれて。今の文意て。皇国言ふ阿伊宇延於ふ引声を為さはて。悉曇ふよりて。始めて知さる事ふらむと云へる意ふればふり。今れ五十音図ふし其はじめ。悉曇ふ因ふ物ふも有れ。皇国れ古言ふ元をて其差別ふりて。故ふ。悉曇と符合せるふて。然

まで和銅といひし御世頃て、いまゞ悉曇の理をし、明らめ知ざる時ゐ所をや。○阿行ゐ於を置て、ゆは。阿行の於を乎と改めしころは。契沖が和字正濫抄ゐ。五十音れ圖を出せしゐ。然言せし著せし耳ゐて。古くは無き事ゐて。あて悉曇れ上ゐ必をよて。掲と思ひ誤てし物と見ゆ。篤胤云。こて契沖ゐ取てて、甚く冤ゐる言ゐり。然るは喉音三行の所属を誤てしはゐの管絃音義その嘀矢ゐて、次ゐ反切義解の拙図ゐり。其よてして悉曇ゐ校し改めしゐる図ども、次ゐ出ゐ拙ゐど、仍正し得ず。法師の学者ゐして、韵鏡を張行せる文雄さ矛ゐ、其差別を知ざてしを、然れゐ小契沖も、悉曇れ学ゆ、文雄ゐ倫ゐて非ざる故ゐ、正濫抄ゐ、大抵正し明せしゐば、文雄ゐの大観抄ゐて、其図を用ひしこと、上ゐ委く論へるゐ如し。然るゐ契沖何ゐ、て思ひ落しゐむ悉曇ゐて、思ひ於て阿行ゐ於物を、於乎の所属を改めざりして、謂ゆる上手れ手ゐ漏るて、水れ如し。然るを春海五十音図のゐ沿革をも故ゐ、辯言へれ、の為始めゐる事ゐし。この拙悉曇の上よて誤てし物と見ゆと云へるて、其悉曇ゐて

も、於て阿行、乎は、和行ゐる事ゐ知ざるゐり、斯て口を開りて、悉く曇くと云ゐて。是何れ言ぞや。古況物ゐは。定家卿の明月記ゐ。阿以字江於と記され。釋日本紀ゐも。阿伊宇江於之五音相通といひ。まゐ天文年中の人れ書く所。略本和名抄れ始よ。五十音例舉ころゐも。阿伊烏衣於と云ゐ。林春齋ゐ類字假字遣の跋ゐも。安以字江於と書くて。然れて古くよて春齋ゐ比まで。は。於を阿行ゐ置る事ゐわしを。契沖より誤れること著し。篤胤云。阿行ゐ於を属せくは引出ゐりて。但し此中ゐ。和名抄の始発ゐると、紀ある証文どもを能くも知ると、ゐは古き所属の証と足れど、明月記と類字假字遣の跋ゐ。そは定家卿哥ゐ。其定められしりと謂ゐ。定家假事遣とも云ゐもれを見ゐ。イ平エ平オヲれ差別ゐども知らゐ。まゐ春齋の跋を書くゐる。類字假字遣

と云ふ物とこと同じ類ひ。古假字と合さる物ふるふ。況て春齋の書ある假字ぬをども。甚く假字の違ひて有れど。其正しと見ゆ。阿以宇江於も。ゆ(ヤ)く(ク)を無く書れこゝろて。支ふ抱りて書さるふて有まじく所思ゆ。ゆじ。然て此春海が見さる和名抄は。乃(ナ)上ふ云へる平山滿晴が所藏の。天文本の写しなり。ちて和名抄ふ。和泉國日根郡呼吸(ヨブ)子。大隅国噌唹(ソヒ)曽と有り。是みれ於を引聲ふ用ひこと。上ふも云ふ如く。引舉ハに屈て。阿行の五音ゆ用ふる事ふて。呼(ヲ)の引聲ふ唹(ヲ)と有るふて。呼(ヲ)てたくふ在ぢく。唹(ヲ)てはしふ在べき事れ明(キラ)かなるを思ふ。契沖て此噌唹と有ふを疑ひて。曽れ引聲て乎形ふ。唹(ヲ)とゆるは。彼國人の詞の重(カモ)ゆ故ゆと云ふい。最(イト)ゆ(ヤ)わて無し。於乎の所れ違へる我思はず。誤を助りむと為(スル)ることゆ我こゆり。国郡れ名を二字て定め

られして。詔ありて。朝廷ゆて文字をば定められしふて。然ば佳字ふ從ふと云こともも。国史ふ見えこて。其国の人れ詞重くとも。事て預ゆる官人の。其俗て文字を入ゆきやうふし。且是引詔の字を下ふそふるて。文字の上の事ふて。其国人の言ふ関ゆて。さる事ふてあらず。古言れ例をたれふ。息(イキ)於支(ヲキ)ゆも。愛宕を安多(アタゴ)古とも云ふ類ひ。伊と安ゆ於と通はし云へるは。阿行れ五音通へ。ゆれて。篤胤云。和名抄ふ。和泉国云こと云よて。といふ條の抄畧ふして。皆理(ヒ)字音假字用格の。おを所屬辨書るは。彼国の方言ゆと云へるて。乎をかく屈きて唹を心著ざてしふや。ゆ云れしふ。和泉れ呼唹ふどふるを思て。誤てを助りむと為ることゆ我こゆれ。と罵れる言れてゆ春海が言ふる。抑わが師の書等ふ。契沖の誤りを正せり事の往こ何ふも。此人僧ふこゆ有れ。眞心ふてしふて。殊ゆ古学の基を起ちく功績あれど。其心して論ハれこて。其れ字音假字用格のてじ名ふ數百年を經るふど。假字誤ゆりを誤まり來し事をいひて。然るふ近世難波

○契沖僧始めて是を考へ出し。和字正濫抄を著せるよりて。
古へは假字再び世に明らかに成ぬるに。比類なき大功なり。
とまれ云れしことを。契沖あるを誤りを助けむとそして。然はをこ
言はる人なからむや。舊き所屬の誤まりを心著さるし故に
ちて思ひ誤まるなり。然れど此
も春海が蛇足は過言なりなり。○乎は和行に有ぎて。止
乎こは乎も多和こと也。乎乃こ久とも和奈々久ぞも。多乎也
米とも多和也米ぞも通はし云て。ちて居字は訓を為とも
乎里ぞも云へば。乎里は約り為られば。是らみは五音
を通はし云ふる例を見る所し。於を和行に書く時は。於里
は約り為と成て。乎里の約てて伊ぞ成まり。然ては古語の
假名みなれて解ぎ様なし。（駕亂云。是節まこと字音假字用格の七葉裡なる師説を抄略
ゐて。其解秋を加へ為る所て。其は於を和行に書く時は。と云へ
るよりて以下是なり。然るに其言粗略みして通え難し。擬ふ

此は。於を和行に書き。乎を阿行に置と成て。於里の約り
為と成て。乎里の約ては伊と成れば。古語の假名みな乱まて
て解ぎ様なし。と云へる意なるべし。契沖は此はぞわては通ら思ふ苦みて。
乎ぞ和と。阿ぞ於と隔違ひに通ふるべし。ぞ云へば。甚そひ
言ふて。いうで隔違ひは通ふと云はず。五十音何まは音が通はざる音なる
違ひに通ふと云はず。
ぎ。此は契沖が私は意に。思ひ計てて云ふ事なて。音韻の
上にかく云ふ道理は。絶てなき事なり。五十音は通ふぎき
は。竪は音は同行。横の音は同位のみなて。竪横の通音なて
とは。古言は上に例ふ所を驚。謾に通ては可べからず。凡て古
言は例ふよりて。解ぎ物なて。（駕亂云。契沖の隔違ひに通ふと云へる説は。正濫抄五巻

ふ。愛宕をあさごとも云ふる就て此もとたゞ
通ふ様人る尋ぬべし。たわゝを〻〻を云ひそろ〳〵くを
〻〻〻〻と云ふ。此〻とを〻を通ふ様もたゞ隅違ふ通
て〻犬をいぬ〻ぬ息ないき。たゞ居を〻る。ぬる。是らも尋
ぬ〻しと記し置て。さて其私心ふ定めさふ考説ふて非文。
元よ〻彼あをの所属れ違ふ所ふ心著ぢ〻しらば。如此通
ふ言のあるて。何故と云ふこと。思ひ定め難さる故て。已て
何ふる嵒とも知ら文。知さる人も有るひ。尋ぬ〻しと。丁寧
反復して。後生ふ心を〻あふ詞ふり。然れど是由て。あをの
所属れ誤りを悟らざる限て。絶て知こゞ能はざる事ふ
る故ふ。縣居宇斯そら。然ろ丁寧の言を聞ゆ〻も思ひ付れ
文。諦ふそみ違ひの通ひと定めて。語意ふ阿行と和行と隅
違ひり通ふて。阿毛と於も。阿多期と於多藝。登子々〻多和
和袁ろこ久と和奈々久の類ふり。〻と云れさるを。鈴屋宇斯
ふ至りて。彼所属を古へふ復されして。契冲の心付ふ創意せ
られし事ふも有へし。然る〻春海。其ゆゑ師れ説のそり尾
ふ取ゆきて。如此しも契冲を拙き者ふ云へる。情ふきわざ尾
ふり。其て我ゞ師説の無りせで更ふり。契冲世ふ出文て。春
海ゞ学も有まじきを。其好免る我語ふも。食ゆきて器を破
て。蔭ふをそりて其枚ふ折ふを。情ふき者の所業として為さ

て。其て契冲ふて次〻大人〻ち出て導ふ〻る迹を蹈ゆ
ゆ。僅ふこの辨誤訓りの著述ふて。し物を。契冲と世ふ易〻
らむふ。豈それ琴後集ふる。〇衣れ阿行ふ有べ文は。此て契
一首も引ふて出むやも。
冲て誤らぢりし〻。東麻呂の恵を阿行ふ置〻と云れし
ふ依て。師説も始免は其ふ據ら是て。冠辭考の部を分ゆ
ふも。恵を阿行ふ出されるて。然れど後ふ其誤を知て
改免られ。彼語意ゆどふて。衣を阿行ふ出ち是〻ふ。篤胤云。此
一節全く春海ゞ説ふり。荷田翁の恵を阿行ふ置べし。と云
れし事て。春海ゞ此言れくゞ。我ゆて聞知べき事ふ非文。然
是ど此は疑て〻しく思て。必ずとて信られば。其
て荷田宇斯の世ふれはせし頃ふ〻て世ふ有ふ是〻る図
は。れ阿行ふ工を置〻る図ふて〻しらば。彼家の古図の失
〻るふ替て。深く思ひ加ふる事れく。用られゆじを。加茂
大人まゝ其誤りふ受けて。冠辭考を物せら是し頃まで。心
著れ文在るを。其後ふ契冲の正濫抄ふ出せる図ふよて

て改められるゝ非じゝと思へる。其は語意考ふ出されゝ
る所属。全く正濫抄ふる少と同じゝれぞゝり。此て後人ふほ
能く考ふ。上は明月記以下は書等ふも。みれ阿伊宇江於とそ
ゝし。和名抄ふ。備中國下道郡弟翳勢と有て。ゝ世ゝいふ
一言は名ゝ也ゝバ。引聲の翳を下ふゝゝゝあり。かく引聲ふ用ヒ
ゝるふて。衣て阿行は音ゝゝるこゝを明ふて。はゝ万葉巻十八
の橘の歌ふ。孫枝毛伊(ヒエモイ)ゝゝゝ少と有はゝ。伊(イ)と衣(エ)を通ずバ毛衣(モエ)
は毛伊(モイ)と云ゝゝゝ。はゝ巻十六は歌ふ。雙六の采は。左敵(サエ)と
よみ。後の物語ふどふ。才智の才をざえ云ゝゝも。伊と衣を
通はし云ゝゝふて。はゝ棋津といふ地名を。万葉は歌ふは。衣(エ)
奈津(ナヅ)とよみ。和名抄ふは。伊奈豆と有はゝふど。皆衣(エ)と伊(イ)を。通

はしあゝゝ例を知ゝし。篤胤云。此件尋常は人て然ゝる事ふ思
ふゝゝれど。此て阿行の伊衣を行の
以ゝは差別を知ゝざる説ゝゝり。其て はゝ引音ふ用ふるイウ。
エは。アオと同列ふて。阿行の音ふれど言は上ふ拗くイウ
エろふ。噯音三行の差別ゝゝて。はゝ言の下ふ在るイウエて。
阿行の音ふ非ゝゝ。ウは和行は音イエて也行は音イエを。
皇国は古言のみ然ゝふ非ゝ。諸越は字音ふても。其差別ゝ
る事ゝり。其て春海ゝ舉ゝる。采は和ふどのサイは音ゝるを。
サエを謂ふは。や行のイエふて。阿行はイエろは非ゝ。此伊
ゝゝて。猶第五條ふ謂ふを合セ考へて曉り給へし。
ゝを衣と通ふを。也伊由衣與は行ふても通へば。阿行ふ恵伊
置て。同じ事ゝゝと思ふ人有ゝゝれゝ。其て音韻の事を
知らぬ輩ゝて。世行の伊と衣て。韻鏡の上ふいふ塡聲てい
ふ物て。阿行の音ふ。ゝゝふ再び置ゝゝふて。阿行を恵な
置くとせゝ。也行は塡聲も。恵ゝらでは叶ゝぬ事ゝて。然ふ

を時て。恵と以せ通ふこせ無れど。古言れ例ふ合は更。萬胤云也
行の伊せ衣て。韻鏡の上まいふ填音といふ物ふて云こと
謂へるは。字音假字用格ふ。喉音三行辨を作りて。阿行のイ
エて母韻ふ𛂞して單音。夜行のイエて拗音ふ𛂞しる。イは
エは。イ〇エ〇の重れる音ふて。差別ある事を委曲ふ示し置れ〇
さろふ。仍其旨を得ざりし阿行れ音頭ふど再び置さ
除ろて。填音ありとは如何ぞや。韻鏡学者ふどの。彼国音
を釈くる填音と云ふて。彼方ふ文字の𛀁ろ合せて音
足ざる故ろ。必ど有べき音を設おきて。其ふ填る字音の出
る縁侯ぬ由と聞ゆるを。也行のイ〇エ〇あるを。然る空し。設け
音ふらむやゆ。宗斯ふさち猶引きて旋るべ。借れさ𛀁ど阿行
のイ〇ウ〇エ〇せ彼行のイ〇エ〇和行とて。後よこそ差別ふき
ふ如くふれ。甚しれる世ふて諦ふ差別あるしあと。已ふ上
ふ論へる。唯音三行を見て知るべし。春海が説の如く
ろては韻鏡の上ろて論拗音の根元更ふ立ざる物をや。必
まて道紀を得ざして。唯ふも口利くの物云はむとれ
𛂞人の議論て。大抵かくの如ぎ物ろざりける。或説ふ。犬[イヌ]を
恵[ヱ]奴[ヌ]とも云すば。恵を阿行ふたくりしせ云へ𛂞て誤ありかつ

く證の數多あ𛂞を棄て。其の一ツをれみ證し云べき事よ
は。ろ𛀁犬を恵奴と云ふ𛂞を必しも通音とハ云ひがゐし。此
そ別ふ故あるべし。衣そ阿行ふ有べきこせ疑ふし 萬胤云 伊奴恵
奴のこと。契冲よりそて。宇斯ゐちみる。二十巻の和名抄ふ
兼名苑云。犬一名。尨。爾雅集注云。狗犬子也。和名恵沼。又與犬
同と有ろを。諸書ふ。犬狗共ふ伊奴とのみ訓るふ合せて。思
ひ惑それ。今も人それ此事よ惑すれぞ彼五巻れ本ふて。兼
名苑云。犬狗之有懸蹄一名。尨。犬多毛也。亦作尨伊奴。尓雅注
云。狗犬子也。守禦畜也。和名恵沼。又與犬同と何そ。漢籍説文
よ。犬を先ふ作りて。狗之有懸蹄也。象形。孔子曰。視犬之字如
畫狗也と見え。繫傳よ。狗跪足趾也。高象長體垂耳也と云
ひ。曲禮注よ。分而言之。大曰犬。小曰狗。若通而言之狗犬通名
は尓雅狗字の注り。狗子未生乾毛者とも云すれど此そ
音通の故りは非ず。並てそ伊奴と云ふるれぞ犬子のいまだ
乾毛ふきを恵沼といふ。乃今を恵沼古呂と云ふめそ。字ひ斷もさぎ
ち元よりそ。今云ふ五巻の和名抄を見らざれど。然るを惑ひ
有べきな。○春海そ其本を見ずそと云ふよ。二十巻の本よ。然

る缺文ある事を知らて。はゝ或説ふ。悉曇は上るて。惠を阿
ゆふ惑へはく如何ぞや。はゝ信ずあし。春海むゝし
行ふ置こと。正し証あるとと云はも
悉曇は學を委くせし法師ふ聞くよ。於乎。衣惠は別ち悉曇
家よ傳へあはゝ。諸説さはくまて別ちがるし。故に先達の
此事をそゝし置はゝ物よも。慥ふ定はるある説ふしと云
ものを。悉曇は上も。古へは正し定め有しゆら。後世それ
傳亂れて。おゞ東ふく成るし物と見四。蔓亂云。悉曇の上ふて是別ち諦ふる事。
悉曇字記一部を見て知ふ事ふるを。其事を能ふ知ざる人
の生悉曇家よ問ふる故ふ。ゆる生答ふ為ふるゆを。然れ
ゝ此は論ふ。今思ふよ。吾國の古言ふ解くふは。唯古言は通
ふ例ふ。古へは字音の例とを以て定むるゆふを。悉曇の上ふ

は然のみ泥む為ゆ事ゆらば。其字音も。宋以後ふ記せる字
書ふとて古へ合はゝ。唐以上の書ふよるて。此方よ古へよを
用ひある字音ふ。考へ定むるゆふり。凡て字音はくふら
書ふ故ふひ馴ふる事の。後世は字書よ漸ふる事もふし。字義も唐以上の
ふ字躰ふとも。唐以上は字躰と。後世とて異ふり。顔眞卿が
于祿字書ゆの字躰と。我が古へは人の書ふ字躰よて。能く
合へと。後世は字書とは遥ふ別ふり。吾国は古の事は。もろ
こしの事ふあ故ふるを。唐以かの新撰字鏡ふとふ
上は書もて考へ合へべき事ふる。
出ふ字音は。後世の字書とは異ふて。唐以上の書ふよく
合ある物とを見て。ふゝは古へ字音はかゝらば唐以上の
書ふ據ふる事ふ知ふ。或人は。新撰字鏡は偽書ふりと
も。はゝ西土の書は上をも。共ふよくも知らぬ業ふて。ゆゝ
漫ふ人ふ異ふらし事ふ求めて云ふ。論ふるも足らず。

その正しき古書ふるよりは字鏡考證ふ そ所せり。さて於子衣惠ゐどれ字音の呼法ふよりて。正し記分ち有ほ事ハ。本居宣長ぐ。字音假字用格ま委く舉こて。彼き見て考ふ所し。師の記される語意といふ書て。その集退られふむ際ま。ろ拔ぐ記し置れ拔るふて。猶考へ改ゝらるゞきを然る事もふき侭ふれぐ。思ひ誤まられし事も多ゝて。世ろ廣むべ記物れちぐ。ちの隅違ひふ通ふ例ふどを記されし。契冲ぐ誤を兼られしふて。凡て師の常ふて。已ぐ心を空ろくして。人の説れよきふてかしこく。從はれ拔ゞ。且ば宣長ぐ説て。めふらを悅びて。從はるゞきこと疑ふし。然ゐ彼ぐ。ろの改めら所ふ及びて。止ふしさ。を遺憾しゐれ。寛政五年三月六日。と記せて。○上件春海ぐ説。それ要とゐる事どもは。我ぐ師ま字音假字用格を始ゑ。其餘の書等ふ著はし置れ。ゐる説等ふ本拔き。契冲の言。縣居ま説を其此と取合せ。ゐ自ゐからの意をも打交ゞて記せるふて。上ろ次ニ論ふ如く。非言ま多かる物うら。其善ゑ悪ゑ相並ゞて考へ明もる。初学びの徒ろハ。其益ろきふしも非拔ど。今は其書ま十ふ八九を出せはるを。此人初ふ師ま。し時ま贈れる消息ゆをま。の世ろ在ゐ。万世古学の師ふる由れど反ゐ。を得る由ふど云ふろ。未詳春海ぐ倫まで。御蔭ふよりて光輝の事ふ及ぶゞ。ロを極めて。師の身退られし後て。人と師といひし者ま贈れる文ろいま。師ま學風を好術偽学とも云ひ。本居といふ古狐ま計られる時て。菖西質ふ按文して。師を風刺せしめ。清水濱臣ふ接文して。霊れ往方といふ戯書ま作し。免き。此くみふ已まち。ふ見聞し拔る事ぞもふり。然れどめく。我ぐ師の説を憲章せる物ふど。ま有ゞ。ゞしとは。思ひ設ゞて。を近頃ふま岡本保孝主よりて借見て。ろ拔驚き拔ゞ。中ふ宇斯ふちれ冤ふる。ゞき事どもの見そゞし難く。はふ已ぐ知ふる事をし。今云ひ遺ろ更く。春海ぐ言後世ま弘まらむ時ふ。誰ろも宇斯ふ止免ちの。右れ冤みを雪く者の有らむと。進る心の我ふを止免

難くてかむ。○けて是頃或人。むかし我が友とせし伴信友が。假字に本末てふ書ありて來て見せしこと。此こと前に古史徵の閑題記を物せし時。はじめ日文傳を物せる時にも。少し力ありて容れて。世に其名ありし令知あり。但し其説等の中に。元より有ばかりに。其囑みの黙止がたき故も有しかば。已が説と並ぶ載して。取舍て見る人の擇びに任せしる也けり。然れども今思ふに。後悔ふかい事どもぞ多かる。其事等に。別に著はして書等に。因くに云ひ。此人素よりて其著書ふ。佗説を善悪ふかけて。佗説といふ事を好まぬ性りは有れども。已が開題記まこと日文傳ふぞは。右に故よし有ればぞ。厭まで知りて在れども。少しも知らぬ氣ふて。都てて

假字に本末ありとは云ふ。主ぞは已が。神世に文字ありてふ説の。裡を切なる書ふりけり。其末を切なる説の割否て。日文傳の訂正本を見あらむに。著き事ふれて。此所ふは云て。但し日文傳の前本を稿する時に。彼交切義解る擬図を。真ふ吉備公の創制ふて。空海の増補せる物と思ひて其由信友にも語るる。彼と其時兼ざとしがぞ。今其假字の本末てふ物を見れば。既に彼人に説とりて。例の比類なき校合の戈極めて。其説を敷延し。吉備公制作に始めて。皇国言に料ふ作ふる非ず。漢籍を讀む友切の料に作られる物ふ。本音四十五字ふ。空海悉曇の力に依りて。圓於に二字を増補して。四十七字ふ為れて。斯て其音図ふ拠りて。今皇国言の奇なく妙なる趣を解き明らむる上に取て。却りて漢字よりも。料りも立ちさりて。忌じき世の寶とふは。ふる奇しきまで有功れく美なしと云ふ。是謂もる音図を。吉備公まこと空海の手ふ成れると云ふ。是功も更にまこと美なしと云ふ。是謂もる音図を。吉後ろい上に論へる如く。瓦ぞ見て砕き擲ころ説りり。然しる信友て前ふ信ざとしかど。今して眞の玉と拾へて。され

で此は已却りて。彼が裡切を成せる謂ふりと最をくし。蓋し
その瓦ゝ玉ゝの定名を。兩説なくらを視て。後ゝ能く知る
淑人も有べし。けて其書中ふ。彼反切義解ふる妄圖を。吉備公ゝ創
制ふそて。空海ゝ訂補と云ふ説を。張行委曲せる中ふ。上件
ゝ已ゞ考證と違ひて。人世の兩端ふ惑ふべき事ゝを。此く
辨ずゑは有ぢゝらば。其説ゝ。中むらしゝ書ふ。音圖の阿行
ふ於を屬ふるは。まり源順朝臣集ふ。あいうえたを一音ゝ
故。初と終の句ゝ上ふたまて。詠る歌五首ゝを。はゝ天文丙
午寫本ゝ和名抄ゝ。一本卷首云とて。五十音ゝ書入ゝふ
も。阿伊烏衣於。まゝ和為有恵遠ゝ書ゝ。ゝて順朝臣の草本
ふゝ。又後人の書入ゝ。はゝ記されゝる
ゝるゝゝ詳ふらば。はゝ菅絃音義ふも。阿伊宇衣於と書ゝ。

釋日本紀ふも。阿伊宇江於之五音相通と云ゝ。ゝ有れど。此
ゝ釋紀の文こそ然て有れ。上三件ハ皆違へり。其はゝ順
朝臣集ふ。阿行ふ於を屬ふる證と為ゝき歌ゝのゝと云ゝ。
我ゝ覺えぬき事ゝなら。見落しゝむも知ゝと思ひて。其集
を再檢ふ。果して然る證歌ゝ有ゝ事ゝ。但し此集の
哥四十八首と云へる。春八首ゝはじめゝ。「あらちじゝ打ゝ
ゝをらむ小山田ゝ苗代水ゝぬゝて作るゝ。」冬八首の中ふ。
「ゝ於くともいざやこら彼立ふゝて下ふゝ草ふゝける蛛
のゝい」「うちわさし待ゝじろ木のゝいゝひゝ。ゝえてよらぬ
えゝゝぞや心ゝ」「忘ごひそゝ君ゝはし鷹ゝ。ゝ。野ふふ
放ちぞ早ゝく手ふそゝ忘思ハ首ゝ中ふ。「むもひゝをも恋をもせ
せのみそ死ゝと。一ゝかゝふ。ゝ拂ゝてばゝ。」恋八首ゝ中
ふ。「えゝもいゝて恋の乱ゝ心ゝ。」「ゝえ」「ゝをゝら山ゝかゝ於ゝふゝくゝも相見ぬゝ。ふゝ。ゝかばゝふ有ゝのみふ。此
れゝ恋し死物ゝを」と詠める七首のゝかゝちゝくゝふ有ゝ

を初め終りの假字は次第に並ぶれど。アイウエオ。ヤユヨ。なる
ものを。此を爭で。阿行の音は正しく記證と為るべき異
なりと云べし。もし然る證と為るべきは所ふり。次に天文丙午寫本の
本の有るにや。其も已が知ざる所ふり。次に天文丙午寫本の
和名抄は。一本巻首に云くて。五十音は書入こと。と云へるも
違ひて。其て是謂る天文本は和名抄は元本いまだ已が
許に有ば。能く見知こと。其五十音は書入に非ず。序文
は次總目錄の上に記して。其巻を除て全宗と云る僧の
筆なるが。元より順朝臣は載し置ること古圖なること。一
目見て疑ふ記物なり。一本巻首に云と云ふは語て有ども無
し。按ずるに此は。天文本の轉寫本なりを見て。二十巻の板本
に自から一本巻首云と書入置るを忘れて。如此て
記せる なるべし。然れば其分注なりて順朝臣の草本なりと
記さるべ。又後人の書入なるべし。詳ならず。と云へる

狐疑をも合せて刪る。然し。次に菅絃音義に。阿伊宇
胡乱の音図に非ざれば。是書は樂家の書なるが。
衣於と書記せる云ふ所も違へり。抑
其道は人さまに多くは知らず。況て常に見る人希なり。
殊に音圖とては有こと無く。唯に音韻の五十ある所以を
述べる文は有る。其語を抄て試に図を作れど。即已
ぐ上に著せる如く整て。阿字伊乎衣。ほ。和字為於恵。ま
と耶由以與衣と様に成りて。於乎は所屬を錯る嗚矢に
ほ物をや。此等は事は。自已の考説を記ると違て。本據を
著はと文ふれて。殊に慇懃に物せるは有ほど記事なるに。
斯の如き麁忽は。甚く後学を惑はと態て酷に記事は

を。但し是ほど例の異本ある。總て書は学びの異本校合
もいと好事にて有れども。世に校合家と称せらるる
人の書さる物を見る毎に其出所まさに何ちの人の藏さる本
と云ふ事の知れ難き打傾の異本も往々あり。然れど屋
代翁狩谷望之などの何某何某はともに烈しく偽みき。或人問て云
異本を作りて證とする人等ありて常に恵みき。
く。開題記に。伴信友の説をも何くれと出だしし故に。彼人
の名も世に知らるるに。翁とは兄弟にも比ふべき睦ある
く。誰も思ふ事なるに。昔わが友とせしに有ほど。按に外れ
ほど事にて最いぶかし。爭て其由を委曲に聞む。答ふ。篤胤元
よりも劣る凡男には有れど。朋に交はる道ばかりにて。小行を
し履失ふる者には非ず。我が其道を盡せる言の。却て彼
人の耳に逆ひて。竟にかくては成行しなり。其は爰に委曲に

云ふべき事には非ずかし。然れど如此のことを云て。舊の中善
の晴ましなれど。此に云ふとも然るべき事を聊か云む。其睦
び初さるて本居大平より紹介せしにて。文化二年二月廿
四日と云ふ日に。巳が鬼神新論を持て訪ひ行さるを初に
ものに互に学びの道の意あひて語らふ。世の限に兄弟
とるりて。大汝小汝に故事をも引いて云ふ。我より年
も三歩計り兄なれど。やがて兄のごとく思ひて在りける。
斯て五六しび往来する時
出て。を北條時頼が記とて云ふ書をとり
国の人に氣質を云へるこを能くも合へて。其が中に陸奥人
に事に氣質の倚尖るほどと。万丈の岩壁を見るが如しと
て。次に出羽人に事を奥州よりも健義る所あて智も
亦上る。武士て忠孝の志あて。下を使ふ法を沙汰し。
下命て上を敬ふ心あて。百姓て地頭を頼む心入ありて。互
ふ我が地頭を荷擔に頼もし。況所あて。我国て遠国偏土に
て。外に向ひ恥うしき事に有り。人に思ふ故に礼見
風俗ある也と見えしるが。君に交ひてふし。実に其言の
違はざほを知さる。斯て。況が生国の若狭人の事を當国て
人氣相和そる事る。昨日て睦うて扶る中

も今日は疎ろりて其非を挙る風ふり下とそて上を欺き
己が科を正される事は却て人の不法れ如くふ云ふせり取
はてし利発れしる故了差當れ辯舌一花の氣勢と有れども
根の遂る所ふしと有るも己が国人れ本性をよく見さる
説ふそとて其所こを披よて見せさるぞ己が此書を見さる
始了い有り然てかく此人よ益を得ず十五年ふど交
らひいはゆ文政二年ふかの古史成文同く徴ると板ふ彫
るとき信友云ひらく己とは短く仕へ事そばく暇るき
ゑ上了身の病さ矛屢発て勝ふれで息の内よ功成さむ事い必
覚束ふし汝く心さ速き生れぬらふて思ひ立さる事い必
遂べき益流男ふり己が及ぶべき限ふ非ず今よて
て己が負氣ふき書拱の心を弃て大人の功事れ成
て む今日まで集怨さる書どもい片成ふる考説の下書待
ても皆ども捨べき拾給へと物ふ書
ても唆ふら譲るべし取ると云ふ諾と云て彼人の名をも世ふ知そめむ
も云ふ開題記よ其説を載さそり学びの兄弟とも賴めと
も他ふ学びの外ふる事ふて我が何くれと心著て
る人了有はじれ事と行ひの国ふ友を失ず何ふ例類
しうど云ひ難き事ふり己が国ふ善を責て大事ふり
も有れで むの国ふらの本性ふて出む

せましと悲くて此時しも かの是人て人ふりれそと能く
見れで そふ哥て吟き出られそ然れど道の為ふ思
ひ直して時こそ有らめと穏ふも出さず幽て愧る事ふ然
うら怨を匿して友とせし事 まさ十年餘ふるが猶しも然
る事ども有ふ己が国ふられ本性の忍び ふ初て文政十
二年れ夏頃そが家ふて 密ふかの事ども五六條取り並て
切ふ諫めて 実の族よそも親ふく思ふ君ふ聞えう
そて己が面伏とも ふりて自然ふ道行く人とれし祭ら
れ事の有べしれぞ ふざと思てぬ事をも云て諫めふる
二三日たよて消息の底ひも万坊の ぬ遣せふる様見れで聖賢の定て
し如く心の ぬるはひも元守そあ矛難さそ
神等ふれらず然のみて れて さで はそ御自のを免給ふ
てばも有るひ ふど私心るを神習ふとそて引よせ捉さる事
ふも ありて在経ぬるを ぢふよふ侍れで己が身の為
ふも 陋しき心のふ 出て偽をご ぞし人を ふはうを欺き
事ふど の上ふも下ふ 更ふふらご 清く ふれて とい 争
で ふ申され侍る ぬき然れで よふ び誠め聞え給ひて ふりし
事等も よく思へば例の心習ひて 盈く過ちふを ふりと
は 有れど次よ其條ふ 大々己が不法のごと云ふ 振ふ い
ひ釈きて今行さ 死れ行ひも謹むとて 己ぞ例の本性の

ちし出はじきかも非ざるを然らむふて君の面伏されで。
相見ぬ昔の道行く人よ見ふしは給てむとのらばカ的し。と
書こり情深くも云へる言うのとは思へ。彼家ふものそて。
已が云へる言ひ中ふて意得ぬがひし事も有ふむ。今し道行
く人とふらひよは互ひ他よ笑はるるしのと。完悲し。是よて後く自然
ふしらずて其道て絶ざて睦びを昔ふ背ずしと思へと。已
ふ。ふまの出來て已はも其一尺ゆ紀で彼は二尺退き。それ三尺進めで。彼て六尺退
よ拒く。近き十年ゆどて。吾いふ訪へども彼ハ來らば。かの
の諫め拒る頃より。讓らひとて吾よ屬さて物等をも次
次ひ取て小遣せて。殘ふく返さしめ。剩よ世ふ得がしかて
し。新撰字鏡の詳本。字類抄。淨藏法師傳ふどを始め。西ふ走
て東ふくそり。著心して取出さる書ども。はけ彼ふ写させ
置さるが多く。其外ふも已が本もて写させし書も。いと多
うはを。後ふ初が本を無ふ。ふしふはも有れで。今度の舉ふ拒
きて。借てよと云ふやるふ。今は已拒他の庫ふ入て置されて
は出し難しるど。断を立て借さ更物学ぶ上ひては斯でひ
て悲き事て何らじ。はふ他と我が事よ及ぶごとふ。陽学の
よし況顕露ふ言更云ひ聞ふ。ふめ彼人ひ贈れる消息ども
ふ種ふの何と形し言の悪事をさふふ。書載せふが。世ふ傳

弘まるて。我が道の妨害とふれる事ども甚多うて。西土
人の言ふ。交絶猶無悪言。いひ。我まさ「人そよし人と非ら
ばゆ我やひと。人さる道を行うて有らめや」と言。舉も彼
まで。彼そよし犬壱を揚くとも。吾そよ大壱を眞似ぶべき
ふ非更とそ思ずど。然る消息の写しるど弘まるそさ彼が
書調ずし物等を見るふ。已が説の裡よ捨さる説多ふれて。
其を辨ふるとして。止事を得更かく。ふしむ。然て有れど笠間
よ生を比賣神のいひひ旁いさく見行てけらむと。最も嘆
息しく悲しかれど。彼ゆ我の。其或人まさ問ふ。此人素よて
国柄の氣質ふるを何ぞせむ。
其著書ふ。他説よ善くも悪くも。誰が説と云ふ事況好ほぬ
性ふりとは。何ふは事ぞ。答ふ。彼人常よ立説よ。今世の学者。
多く此そ某が考へそは誰が説とて。其説の先後ふどを論ふ
は劣れき議ふて。然るそ其説よし先後ふてとも。我人共ひ
見ふ所の。古書ふ據れる考説ふれで。拘はるふ足更と云き。

故是人の著述といふ物。已が見し限りを都て云はゞ。他人
も創意せる説を取りて。かの校合増補を用ひて敷延し故
故。創意は人の名譽覆ひて。其を竟に我が有とせば説等
多かり。是ほど已と氣質合ざる所あり。然れど中善かり
し程も。常に快からぬ事ども有り。濡て已に露も厭ふ
一二を云へむに。伊勢物語も。と業平朝臣の思ふ旨なり
て。自記せられし哥集ふて。在五中將物語と云ひし物なる
を。後人の他事をも取交へて。かく名けし物ふて。古今集ふ
此朝臣は哥の入さる詞書と。其自記を取舍して載せる物
といふ事と。已ほど髭も生ざるし程よりの説なり。伊勢物
語梓弓といふ物ふ記して。其中に。き故ふは多るでふ哥
の説ふ。ぞ誰ふも語りて。あを屋代翁の參考本に。已が名を
云ふとを遺れて出せる。信友見ふて。屋代翁ふ云ふ云
ひやをし事も有りき。然るに。其後。彦根の海量法師。已が家
に居るふど。其説を聞くふ。業平朝臣は自記と云ふことを。

彼も同説ふして。故先輩ふ。梓弓の稿を禁さるし
ど。彼開題記ふ。その端倪を著せるふ。信友元より。業平朝臣
の自記ふ説と受さるしうは。其を見て。刪を尋ねよとまで
云ふ。其後まる事の因ふ。玉襷よも記せしうは。彼此よ
を難き遣せるる人くも有り。然るふ。先こは彼人の伊勢
が家集を論へる物を見るふ。既ふ自説と化む心巧りて
有りる故。異しと見けるふ。假字の本末は。全く自説と成
を清して。此物語と。業平朝臣思ふ所あり。わざと有し事
もからはし事も。心のおもむくまゝに。自書きそふし。今てのの
涯の哥をさ是ふ作をて。書載給へる書ふるを。後ふ他人は
書加へさる文の。いにしへ交はる物ふほべく。推はうり思
はるゝ已が考ふをと著せり。ほて前ふ刪はと云ひし事を
忘れて。其後る自得せるが。闇合せるるも有るなど。此人
の書さる物ども。大ふさる。其趣ふれば如何あらむ。縱哭哉
此等は小考とも。幾百ちの有と化ることも。我が大考と思
ふ限りて取ことも能て。天朝無窮唐赤縣太古傳所度
藏志ふど故。あそ取せ是と誇ひ故ふ。頭ふりて見ぬを強
ひて見それで。血を吐く思ひふり。我ふ其義知られぬと
逃れで。ほを今ふ悲しく思ふて。堤朝風ふり。篤実潔白
なるひ無き人ふて。信友よりも舊き学びの兄ふるが。若ふ

とし程より、鈴屋翁の年譜をうつし記さむと志して、享和三年の事ありき。春庭主と、大平主とふ其志をいひやり、切ふこひて、故大人の自記ふる本居系図と、家の昔物語とを借よせつる。されば此二書の世ふ出つる初りて、そを驚亂が写ほして、其由を奥書ふ云ふし、其後信友ゑ、朝風が志を語りて、ほさ写させつるとき、斯て朝風故大人の事ふら種〻小紀し明して、遂ゑ其年譜の成るを、物ふくて板ふ彫こと能はず歎き居るふ、文政六年の事とたがゆ、我ら家ゑて、堤と伴ゑ始めて遇つる時ゑ、已ら〻を出て、彼年譜を伴ゑ見ひる事とはふりき。然るふ信友それ年譜ふ、いさ〻う筆を加ふの志て、例の已が有と為つり、抑人の傳まつ年譜ふ、ど彼書ふこそ、紙數て少ゆるゆ、大きふ心用ひある事ふて、実て容易ふらぬ事ゆるを、最ゆ情ふふ事ふら更や、朝風ら故て人を怨むる言ふどは云ざるし人ふれど、せ冗て書のてしふ、我が名を下言ぶふ云ひて有ほし物をと、今はふゆ云ふて言ひ、今ゆ耳ふ留まれり。そは已が取めちて借つる譜ふて有ばふ、繼ふ自身ゆ同じ意ふ、元より記し置るが有しふゆ、右の手ふ〻紀有れど、朝風が志をゆ顕はしそ彼き事ふ、神の御世より、人の名を顕はし知むる彼こそ、人れ太じき徳とは為ば。

集山堂